

## ●序章　ねじの回転

このところ、僕の左目はやがかかっている。物を見るとうねうねと白いもやがうねって見える。それどころか、ときおり大きな影が視界を横切ったりする。普通に暮らすには不都合がある訳じゃないけど気になってしょうがない。ちよつとだけ心配になったから明日、図書館で調べてみよう。

図書館で調べると「光視症」っていう病気に似ている。でも光視症は僕みたいな子供がかかる病気じゃない。何日かで治るらしいから、しばらく様子を見ることにした。

目は全然よくならない。もやがかかるようになってからも五日ぐらいになるけど、よくなるどころかどんどん悪くなっている。左目の奥がガンガンと痛い。

左目は開けていられないほど痛い。痛すぎて目が痛いんだか頭が痛いんだか判らない。熱もあるから目と頭の両方が痛いのかもしれない。起きていると自分がねじになってよじれていくようにクラクラするのでずっとベッドで寝ている。

父が家に来たようだ。頭が痛くて、気持ちが悪くて、何にも考えられない。父が来たようだけど、本当に来たのか、実際には来ないけど来た気がするだけなのか。どっちか判らない。もし本当に来てたのならこの病気は重い病気なんだろう。

もしかしたら僕は死ぬのかもしれない。頭が痛くて気持ち悪い。ここ二日は何も食べてない。

起きると、すべてが嘘だったかのように具合の悪いところはなくなくなった。頭も痛くないし、熱もない。立ち上がってもクラクラしない。ただ、左の隅の白いしみは残ったままだった。そのしみは時々数字をかたどっているように見える。数字に注目すると、ふっと消えてしまう。しばらく消えたままで、時間がたつと徐々にもやが集まってくる。目の病気は治ってないのだろうか。僕は手のひらで優しく左目をマッサージする。そして、目から手を放したとき。

名前…フサト・フンフリヒト　級位…2　体素…15／16　魔素…20／24

手にかぶってもやが文字となる。

「え？　なに？」

訳が分からず、無意識に声が出てしまう。周りを確認しても普段と変わらない僕の部屋だ。ベッドがあって、机と椅子があって、他には何もない。いつもと同じ殺風景な僕の部屋だ。ベッドの上の枕も布団も、机の上のノートもペンも、何も変わったところはない。もやが文字になることもない。

僕は机の引き出しの中から手鏡を取り出した。浮き出たのは僕の名前。僕を見ると僕の名前が出てくるのかもしれない。手鏡を見る。そこには僕の顔が映っている。

名前…フサト・フンフリヒト 級位…2 体素…15／

16 魔素…19／24 スキル…鑑定

文字に注目していると徐々にその文字が薄れていく。その文字をつなぎとめようと、鏡の中の自分の顔に注目する。でも、文字は消えてしまった。

鏡を見る。文字は出てこない。鏡を持つ右手を見る。文字は出てこない。鏡の中の自分を見る。鏡の中の僕もこっちの僕を見ている。僕はちょっと怖くなって、手鏡を裏返す。鏡の中の僕は、僕の目を見ながらくると回転して見えなくなる。僕は手鏡を見ながらつぶやいた。

「何なの？ これ」

『スキルアップしてアイテム鑑定できるようにしたいの？ それにはまだ鍛練が足りないよ』

頭の中に響くように声が聞こえる。僕が後ろを振り返ると、

そこには知らない子供が僕を見ていた。ちょっと見ただけでは男の子か女の子か判らないその子は僕を見てニコニコしている。

「誰。どこから入ってきたの」

それに答えるように、頭の中に『クレッサ』と響く。そしてその子にかぶって白いもやが文字をかたどる。

名前…クレッサ 級位…72 体素…710／715 魔素…766／784 スキル…鑑定、風魔法、治療、蘇生、魅了、????、????、????

「誰なの」

『だからクレッサだってば。ステータス、見えてるよね。そこに書いてあるでしょ』

「ステータスってこの数字のこと？ なんなの、この数字は」  
クレッサは答えない。ただ、ニコニコしている。

僕はまた周りを見回した。やつぱりここは僕の部屋だ。でもドアは閉まったまま。いったいこの子はどこから入ってきたんだろう。

『クレッサだって言ったでしょ。『この子』なんて呼ばないですよ』

僕の考えを読んだように、この子、クレッサが答える。なんなのだろうか。僕に何が起こってるのか。

クレッサはただニコニコしてる。そのとてもかわいい顔を

見て僕は祖母、父の母の信仰を思い出した。

「もしかして、妖精様？」

そして、その問いに満足したように、クレッサは優しく微笑んだ。

## ● 一章 家族の肖像

祖母、父の母が言うには、妖精様は人を守護してくれる聖なる存在だ。妖精様の姿は守護されるものにしか見えず、声も聞こえず、触れることもできない。妖精様の声を聞くことができ、姿を見ることができ、触ることができる者は、妖精様に守護されてる者だけだ。

妖精様の守護を得た者は、人々を幸せに導き、自らも幸福を得る。幸せに導かれる人の中に自分が入れますように。願わくば、自分が妖精様の守護を得て、人々を導くことができますように。

その想いで信仰するのが妖精聖教だ。この街に暮らす聖教徒の数は多くはないが、父の母は聖教徒だった。子供のころから聖教徒だったのではなく、最近、改宗したらしいのだけど、なぜ改宗したのか、その理由は判らない。誰が聞いても、理由を言わない。妖精様の話さえも家族にはしならしい。父の母が妖精様の話するのはただ一人、僕だけだ。僕への言葉も「お前に妖精様のご加護がありますように」のただ一

言だけでしかないが。

このクレッサも祖母の祈りの成果なのだろうか。

母が外出から帰ってきて、不機嫌に僕の部屋へ入ってきたとき、クレッサは僕と一緒にベッドに座っていた。でも、母はクレッサを見ることもなく、僕に向かって近づき、おでこを触った。

「熱はないようね。具合は？」

「もう大丈夫です」

「でもまだ寝てなさい」

そう言い放ち部屋を出ていく母は、最後までクレッサを見なかった。おそらく母にはクレッサが見えていないのだろう。僕はクレッサを見つめた。僕はクレッサが見える。母には見えない。僕はこれから幸せになれるのかもしれない。人々を幸せに導けるのかもしれない。

母が去ってすぐ、玄関の方で人の気配がする。ドアが開き、男の人の低い声がする。母の足音が玄関に向かい、ボソボソと不機嫌になにか話している。やがて二つの足音が僕の部屋の前に動く。そして、ゆっくりと僕の部屋のドアが開いた。

「どうだ」

顔をのぞかせ、そう尋ねたのは父だ。

「大丈夫です。痛みはなくなりました。熱もないようです」

父もクレッサには目もくれない。机のところにある椅子を引き寄せ、僕の前で座る。母はそれを見ると、ボタンとドアを閉めていなくなる。父はちよつと顔をしかめ、僕の目を下に引っ張る。

「舌を出して『アー』と言って」

いつもの父の診察パターンだ。その後は管を耳に差し込み管の先を僕に押し付けるだろう。

「よくなつたようだな」

「診てくれてありがとうございます」

「悪いところや、気になることはないか」

悪いところはない。気になることはある。本当に父にはクレッサが見えないのか。なぜ、僕のところに妖精様が来たのか。人にかぶつて表示されるステータスとは何なのか。と、ステータスのことに思い立った時、父の横には数字がないことに気づいた。

『ステータスは見ようと思ったときにしか見えないよ。無節操に鑑定を発動したら、すぐに魔素がなくなつて行動不能になつちゃうでしょ。見たい時には見たいと意思表示しないとスキルは発動しないから』

クレッサがすかさず、僕の疑問に答える。

「意思表示」

「なんだ。何か気になることがあるのか」

父が僕を見ている。クレッサに答えたつもりだったのだけど、クレッサの声が聞こえない父には、僕の返答は父への返事だと思つたのだろう。

『意思表示は『ステータス』って言えばいいよ』

「ステータス」

僕が父を見ながらつぶやくと、父の横に数字と文字が現れる。

名前…ヨバル・ドライヘレ 級位…5 体素…35／48

魔素…21／57 スキル…治療、蘇生

「ステータス？」

父が僕の顔を覗き込んでいる。気になることとしての答えが「ステータス」では意味が判らないだろう。不思議そうな顔で僕を見ている。僕が何か言わなきゃいけない感じになつた。だから、答えは得られないだろうと思ひながら疑問の一つを聞いてみる。

「ステータスが見えるようになったのは妖精様と関係があるのでしょうか」

父の表情が途端に険しくなつた。一瞬目をつぶり、急に再び僕の目を下に引っ張る。そのまま、隅から隅まで僕目を調べる。そして、両手を首の横にあて、さするように前後に動かす。

「妖精とはなんだ」

「僕の横に座っているクレッサは妖精様のようです」

父は左手を頭にあて、何か考えているようだ。

「横に座っているとは、いまここですか？」

そう言つて、僕の右側を見る。なるほど、確かに父にクレッサは見えていないようだ。クレッサが座っているのは右側ではなく、僕の左側なのだから。

「クレッサが座っているのは、そっちではなく、こっちです」

僕が左側を示すと、父は怒ったように腕を振り上げ、クレッサに向かって叩きつけた。

「ここに何かいるっていうのかっ」

父の振り下ろした腕は、クレッサの頭を突き抜け、鎖骨にめり込んだまま止まった。父の腕を体にいれたまま、クレッサは微笑んでいる。なるほど、妖精様は他人には見えないし、声も聞こえないし、触ることもできないのは本当のことなんだ。

クレッサはウフフといたずらっ子ぽく笑った。僕もなんだかおかしくなつてクレッサに向かって笑顔を返した。

「ここにいるのか」

笑顔になった僕を見て、今度はいつものどこか冷めた口調で尋ねる。

「はい」

「頭痛はないか。熱は。どこか痛いところは」

「先ほども言いましたが、どこにも痛みはありません。熱もありません」

「自分の名前と歳を言ってみろ」

「フサト。十二歳です」

知つて当然のことを聞いてくるのは、僕の知覚レベルを疑っているのだろう。そんなときは茶化した答えをしてはダメだ。父はそういう対応を気に入らない。

じろつと僕を見た父は、部屋を見渡す。そして、手を伸ばして机の上にあったペンを手に取る。

「これはペンだ。これをポケットに入れるぞ」

そう言つて、手に持ったペンをズボンのポケットに入れる。手品をするつもりなのかと思つて、じつくりと父の右手を見続けたが、普通にポケットにペンを入れただけだった。

「今日が何月何日か判るか」

僕はちよつと答えに詰まった。具合の悪さもあつて、ここ数日の記憶があいまいで正確な日数は思い出せないから。

「ずっと具合が悪くて寝ていたので、日にちの感覚が狂っています。月が開けるまではまだしばらくあると思います」

「何月何日かと聞いたのだが」

「聖人マチスの誕生月の二十三日です」

父はうなづくと人差し指、中指、薬指を立てて小さく手を

振る。

「これは何本だ」

「三本です」

「見えにくいとかダブって見えるとかはないか」

「ありません」

「さっき、私がポケットにしまったのは何だ」

「机の上にあったペンをズボンの右ポケットに入れました」

満足げに父はうなづく。そして、またさっきと同じ質問をする。

「妖精とはなんだ」

「人を幸せに導く存在です」

僕はちよつと答えを変える。その一言で満足だった父の顔がまた険しくなる。

「それがお前の横に座っていると云うのだな」

「はい」

「私には何も見えないがそれは何故だ」

「妖精様は守護される人にしか見えません。声も聞こえませんが、触れることもできません」

「お前は見えて、聞けて、触れるのか」

そう言われて僕もまだ触ったことがないことに気づき、手を伸ばしてクレッサの肩に触れた。クレッサは柔らかい。とても心地いい。肩から腕に手を滑らせていく。そしてなでる

ように何回も上下に往復する。

『スケベ』

クレッサにそう指摘されて、自分のしている行為が恥ずかしい行為であることに気づき、あわてて手を離れた。

「あ、あの。ふ、触れられます」

父は僕のおでこに手を当てる。

「幻聴や幻覚はいつから表れるようになった？」

「クレッサは幻ですか？」

父は答えない。僕にはクレッサが見えるし、触れることもできる。幻は見えるかもしれないけど、触れられないはずだ。だからクレッサは幻ではない。

「クレッサが見えるようになったのは、ついさっき、目が覚めた時からです」

父はポケットからペンを出すと、机の上に戻した。ポケットにしまったのは手品を見せるためではなかったようだ。

「妖精のことは誰にも言うな」

「何故ですか」

「三日後に私の仕事場に来なさい。そのとき説明しよう」

「次回の面会日は三日後ではありません」

「念のため、詳細鑑定したい」

「父様も鑑定できたのですね」

僕のスキルとクレッサのスキルには『鑑定』があったけど、

父のスキルには『鑑定』はない。それなのに鑑定できるのだろうか。

「チナには私から言うておく。今日はもうしばらく寝ていなさい」

父が部屋から出ていく。僕はあわてて布団をかぶって耳をふさいだ。今、家には母がいる。耳をふさがないと父と母ののしりあう声が聞こえてしまうから。

僕は父と一緒に暮らしていない。数年前、父と母が正式に夫婦別れをしてから、僕は母と二人で暮らしている。

小さい時の僕は体が弱かった。いつも小さな部屋で寝ていた記憶しかない。そんな僕を見て父方の親戚はこぞって、僕の体が弱いのは母のせいだとなじっていた。みんなして母を取り囲んでいるのを父は少し離れたところから、ただ黙ってみているだけだった。

ただ、母は言われっぱなしではない。一言言われるたびに二言三言言い返し、わめき、汚い言葉を吐き散らかしていた。父はみんなの前では母に何も言わない。だけど、みんながいなくなると母をののしっていた。

祖母、父の母だけは母にやさしかったが、祖母も母にやさしい顔を見せるのは周りに誰もいない時だけだった。そして、母はそんな暮らしから飛び出していった。

父の家系は代々治療師をしている。祖父、父の父も治療師だったし、祖父の父もそうだったらしい。祖父の祖父の代からずっと同じ場所で治療をしている。本当は父の代わりに大叔父、祖父の弟が跡を継いで治療師をしたかったみたいだけど、祖父が亡くなった後、治療院を継いだのは父だった。きっとそのこともあったんだと思う。母を一番責めていたのは大叔父だった。

そして、母が家を出て言った直後、父のもとを訪れ、僕を母のところへ「押し付ける」ように進言したのも大叔父だった。

「どうせこんな脆弱者は長く生きられん。ドライヘレの人間として育てるのは無駄だ」

僕を睨みつけながらそう言い放った大叔父の顔を僕はまだ覚えていて。そのころ住んでいた家の記憶として覚えてるのは、その醜い顔と言い争う大人たちと陰では優しい祖母のさみしそうな顔だけだ。

僕は治療院の人に連れられ、母のところへ行った。母は僕とその人を見るなりわめき散らかしたが、その人は時間をかけて母と話していた。話し合いは夜を通して行われたようで、いつのまにか寝てしまった僕が目覚めたときにも、治療院の人は母に向かって書類を見ながらボソボソと話をしていた。「フサト君は、今日からお母さんと暮らすことになります」。

お父さんとは月に一回会うことができます。いいですか」

起きてきた僕に、その人は淡々と告げる。「いいですか」と聞いているが「イヤだ」と答えてもその意見は認めてもらえないぐらいのことはその時の僕でも簡単に判った。

「妹とも月に一度ですか」

ここに二歳下の妹がいけないということは、妹は父と暮らすのだろう。妹は元気に走り回るかわいい子だからドライヘレ家の人間として育てても有益だ。

「妹さんですか。妹さんとの面会は規定していませんでした。追って調整いたします。月一度程度の面会でよろしいですか」  
「それなら、父様と会うときに、時々妹も連れてきてくれるよう、父様に伝えてもらえますか」

「判りました。お伝えします」

その人は、母に書類を渡すと、僕に向かって丁寧なお辞儀をして、僕を残して帰っていった。

それから僕は母と二人で暮らしている。母は昼間どこかへ出かけ仕事をしているらしい。何の仕事をしているかは判らない。母は僕と二人きりでいるときはほとんど口を利かない。母が話すのは人から文句を言われたときだけなのだろう。僕は、こんな僕を育ててくれている母に対して感謝あっても、文句はない。だから、母は僕に話しかけないのだ。

父に会うのは月に一回、決められた日だけだ。大抵は指定

された場所へ僕が出向き、そこで父と会って食事をする。たあいもない話をし、最後は何故か必ず握手をして別れる。約束通り何回かに一度、父に連れられ妹も来ていた。妹が来たときは、会話が途切れた時、妹が話題を振ってくれるので、気まずい時間が少なくなっておりがたい。

基本的には決められた日しか父とは会わないが、僕の体調がものすごく悪い時などは、父が母と僕が暮らす家にきて、僕を診てくれる。そのことによって、その次の面会がなくなることもない。父と別れて暮らすようになった頃は、しょっちゅう、動けなくなるほど具合が悪くなっていたので、年になりの回数、会っていた。この頃は、高熱を出すこともなくなっていたので、父がこの家に来ることも少なくなっていたのだが。

はじめは聞こえなかった父と母の怒鳴り声が、耳をふさいでいても漏れ聞こえてきてしまう。父と母のケンカという事実から逃れるために布団をかぶっている僕にクレッサが話しかける。

『ずっとそうやって聞こえないふりしているだけなの』

『子供の僕に何ができるっていうの』

『子供だからこそできることがあるし、しなくちゃいけないことがあるんじゃないの』

今までの僕は、父と母が言い合いを始めると、いつも逃げていた。父も母も暴力に訴えることはなかったから、そばにいたとしても危害を受ける訳ではない。でも、二人のケンカを見たくなかった僕は、いつもその場から立ち去り、ケンカには気が付かなかったフリをしていた。

それでは物事は解決しない。いままで二人のケンカは解決しなかったから、いまでも顔を合わせるたび言い合いになるのだろう。物事が解決すれば、父と母もケンカをせずに話ができるようになるかもしれない。それは一縷の望みであっても、僕は努力しなければいけない。二人の仲を直すのは二人の子供の僕の役目だから。

僕は布団を跳ね上げた。クレッサは椅子に座ってにこやかに僕を見ていた。妖精様の加護を受けた者は人々を幸せに導くのだ。まず、僕は父と母を幸せに導かなければいけないのだ。

布団から出て、耳をふさぐのをやめると、父と母の声がしつかりと聞こえてくる。父は母に向かい、僕が病気になったのは母の育て方が悪いからだを母を責める。それに対して母は、治療師のくせに自分の息子も治せないのは役立たずの治療師だと父をののしる。

僕は立ち上がって部屋を出て居間に向かった。

居間では父と母が立ったままいがみ合っている。まず、父

が僕のこと気に気づいたようで、ののしりの途中で口をつぐみ僕を見た。母はそれに気づかず、父を罵倒し続けている。

「ごめんなさい。病気になってごめんなさい。僕のことでケンカしないでください」

僕のその声で、母ははじめて僕に気が付いたようで、振り返って僕を見た。

「はあ、青い顔して何言ってるの。僕のことでもケンカをするなですって。あんたがいなけりゃケンカなんかしないわよ。あんたがいなけりゃ、この不愉快な男が私の家に来ることもないんだからね」

「お前は自分の子供になんてことを言うんだっ」

「自分の子供？ 何を偉そうに。あいつはあんたの子供でもあんだよ。あんたは自分の子供を捨てて私に押し付けといて、その上、意見しようってんの。私の育て方が悪いってんなら、あいつはあんたが自分で育てないさいよ。あんただってあんなクズガキ育てる気はないんですよ。人のこと言えた義理じゃないでしょうが」

「ごめんなさい。ごめんなさい。ケンカしないでください。ごめんなさい」

やっぱり僕には何もできなかった。かえって状況を悪化させただけだった。

『二人のステータスの体素と魔素を見て』

クレッサが僕にささやく。ステータス？ と考え、ケンカする二人を見た瞬間、父と母にかぶってステータスが表示された。そこには、徐々に減少する二人の体素と魔素が表示されている。

体素や魔素ってケンカすると減るんだって考えながら、僕は僕が生まれてきたことを謝り続けた。

母は部屋の隅でうずくまっている。父が帰った後の母はいつもそうだ。父に関係なく、仕事から帰宅した後すぐにそうなることもある。

一度、こうなると、この状態からすぐには復活しない。大抵、一晩中こんな状態だ。そんなときは晩御飯はでてこない。一晩で回復するときはいいが、回復しないときは朝食もなく母は仕事に出ていく。今までに僕は何回もそうして仕事に向かう母の背中をおなかをすかせたまま見送ってきた。

名前…チナ・フンフリヒト 級位…4 体素…4／44 魔素…0／31 スキル…風攻撃魔法、不快化

自分の殻に閉じこもり、ずっと動かないのは魔素がゼロだからかもしれない。どうすれば魔素は戻るのだろう。

『何もしないの』

ただ母を見つめているだけの僕に向かってクレッサが聞いている。

「何をすればいいっていうの」

『人間はものを食べれば少しは元気になるんでしょ』

「食べ物なんてないよ」

『あるじゃない。ごはんは米と水とかまどと鍋があれば作れるよ。パンは小麦粉と塩とイースト菌と水とかまど。時間的におすすめるのはごはんだね。パンは発酵させなきゃいけないから』

「僕は作ったことない。ごはんの作り方教えてくれる？」

『私だって作ったことないよ。それに私には料理のスキルはないから教えられないし。私のスキル欄に家事も料理もないの知ってるでしょ。マスクがかかっているスキルは料理スキルじゃないよ』

「僕のステータスにも料理はないよ」

クレッサはニコツと笑う。僕には何がおかしいのか判らない。

『チナにも料理のスキルないでしょ。でもいつもは作ってるよね。スキルがなくても料理は作れる。でもスキルがなければ料理をちゃんと教えることはできない。スキルを持つて人の作った料理はおいしい。スキルのない人の作った料理はそれなりの味。スキルっていうのはそういうもののなの』

「じゃあ、僕でもごはんを作れる？」

『米と水とかまどと鍋があればね』

かまども鍋も家にある。米は台所の箱に入っていたはずだ。水は台所の甕に入っているだろう。小麦粉も塩も家にある。イースト菌はあると思うけど、置き場所が判らない。クレッサもパンよりごはんのほうが簡単に作れるって言ってたし、今日はごはんを作ろう。

米を鍋に入れ水につけてかき混ぜる。水を捨てて、また水を入れる。鍋を火にかけてふたをする。確かごはんの炊き方はこんな感じだったはずだ。

僕は記憶を頼りにご飯を作った。記憶は間違ってたかったはずだけど、できたごはんはドロドロだった。きつと二回目の水の量が多すぎたんだろう。味見をしようと箸でつまんだら、ベトベトつと落ちてしまった。しかたなしにスプーンを持ってきて、一口食べてみたけど全然おいしくない。でも、ごはんの味はかすかにある。おいしくはないけど、食べられないことはないだろう。僕は皿にごはんを移し、母のところへ持っていった。

「食べて」

皿を前に置き、声をかけても、母は動かない。僕はスプーンにごはんを乗せ、母の口に持っていった。

それに反応して母は少しだけ口を開ける。僕は押し込むようにスプーンを口の中に入れる。母はゆっくりと口を動かす。

「まずい」

母が小さな声でつぶやく。不満を言いながらも、また口を少し開ける。僕はまたスプーンを母の口に運ぶ。

「まずい」

味のしないおかゆのようなごはんを食べるたび、母は涙を流しながら「まずい」と言って口を開ける。

常に攻撃的な母が悲しそうな顔をするのは、お金に関する問題に直面した時だけだ。

僕から見ると、母と僕の暮らしは普通の暮らしに見える。だが、母から見るとこの暮らしは貧乏に見えるらしい。母はいつも収入の少なさと生活費の高さを嘆いている。そして、そんなときだけ悲しそうな顔になる。今、母が悲しんでいるのは、ごはんがものすごくまずいからだろう。まずいごはんのために、米を無駄にしたことが悲しすぎて涙を流しているのだろう。

「お米を無駄にしてごめんなさい」

僕は謝り、母の口にご飯を運ぶ。母は「まずい」を繰り返しながらごはんを食べ続ける。そして、涙と鼻水を流し続ける。まずくても、食べないで捨てるのはさらなる無駄を生み出すことになるから。

僕は「ごめんなさい」を繰り返しながら、母の口へスプーンを運ぶ。

「ごめんなさい。まずくてごめんなさい。お米を無駄にして

「ごめんなさい」

母は涙を流して口を開ける。僕はみんなを幸せに導かなきゃいけないのに、母一人を幸せにすることはできなかった。幸せにするどころか、涙を流させるほど悲しませてしまった。

「お米を無駄にしてごめんなさい。ごめんなさい」

僕はスプーンを母の口に運び続けた。

## ●二章 試練の迷宮

クレッサはいつも僕のそばにいてくれる。朝起きてから寝るまでいつも一緒だ。

妖精様が僕を選んでくれたのはうれしい。でも、なぜクレッサが僕を選んでくれたのかは全然判らない。僕のもとに来た理由をクレッサに尋ねても、明確な回答はしてもらえない。いつもはぐらかされて終わりだ。

僕が見えるようになった級位や体素、魔素、そしてスキルについて聞いても、曖昧に笑ってごまかすだけだ。

ただ、級位が上がればより多くの人を幸せに導くことができることだけは教えてくれた。「どうすれば級位は上がるの」と聞くと『いつか教える』と答えただけだった。

クレッサが教えてくれないのなら自分で調べるしかない。僕は毎日のように祖父、母の父の図書館に足を運んでいた。

図書館で調べても、体素や、魔素のことはよく判らない。体素や、魔素について書かれた資料や本はほとんどない。

級位の本は少しだけあったが、文字記述や剣術の上手い下手を表す級位についての説明本で、僕の見える級位と微妙に違うようだ。それとも、僕の見える級位も剣術の級位と同じなのだろうか。

鑑定の本は何冊もあった。食器の鑑定について書かれた本が一番多かったのだが、僕にできるのは人の鑑定で、物の鑑定はまだできない。

人の鑑定の本は人事について書かれたものと、占いについて書かれたものが多かった。

人事について書かれた本の代表的なものは、その人の性格によって、組織のどこに配置するのが効率的かを解説した本だ。その系統の本が重みを置いているのは、人の系統分けとそれぞれの系統ごとの特性についてで、人物鑑定方法については軽く扱われていた。

逆に占いの本は、人物鑑定の仕方について詳しく書かれていた。人のどこを見るか。人の話し方から、その人の性格や考え方を読み取る方法。何気ない仕草が持つ意味。真名と性格の関連性。それらを組み合わせれば、鑑定によってその人の将来も判るという。

僕はまず、占いの本を手当たり次第に読んだ。本に書かれ

ていたことを意識しながら人を鑑定するとステータスが文字になるまでの時間がちよつとだけ早くなる気がした。でも、人の未来までは判らない。そこまで判るようになるには、もつともつと鍛練しなければいけないのだろう。

名前…フサト・フンフリヒト 級位…2 体素…13／  
16 魔素…6／24 スキル…鑑定

鍛練は鑑定を繰り返すことだ。僕は図書館の前で道行く人を鑑定する。クレッサは教えてくれないが、鍛練するといろんなことが判ってくる。

鑑定をすると魔素が減る。減った魔素は、時間がたつと復活する。疲れている人は体素も魔素も低い。魔素がゼロになると疲れて動けなくなる。そして、何も考えられなくなる。魔素がゼロの人はごくまれにいる。体素がゼロの人は見たことがない。体素がゼロになると死んでしまうのだろうか。級位が高い人は、体素や魔素の最大許容量が多い。たぶん、級位が上がれば体素と魔素の許容量も上がるのだろう。



父と約束した日、僕はクレッサと連れ立って、久しぶりに

父の治療院を訪れた。父は忙しそうにしていたが、僕を見ると今までしていた仕事をほかの人に任せ、僕を治療院の奥に連れてきた。

やってきたのは鉄の扉に閉ざされた部屋だった。重そうな扉を開け、僕を中に導きいれると、父はすぐに扉を閉めた。その部屋にあったのは洞窟の入り口だった。

「入れ」

「ここは何ですか」

「お前の内面を調べる試練の洞窟だ」

「父様と一緒に入るのですか」

「私は外で見ている。お前ひとりで入れ」

父はそういうと、洞窟の入り口を顎で示す。僕は、洞窟の中に足を踏み入れた。

薄暗い。青く光っているのはヒカリゴケだろう。父には「ひとりで入れ」と言われたが、クレッサも一緒に僕の横にいる。洞窟の中は常にシャカシャカと何かが動きまわる音がしている。周りをきよきよするが、何が動いているのか判らない。

『怖いのか？』

呼吸が早く、荒くなっていた僕に、クレッサが問いかけてくる。

怖い。でもそういったいいのか。クレッサにそう答えたらクレッサは僕を軽蔑するだろうか。それとも正直だと笑ってくれるだろうか。

『情報は目だけで得るんじゃないよ。音、匂い、風の動き、いろんなものから得ないと。鑑定っていうのはそういうこと』  
そうだ。図書館の本にもそう書いてあった。感じる事が大事だ。

僕は目を見開き、肌で風を感じ、耳を澄まし、鼻孔を大きくして、足を前に踏み出した。

シャカシャカは単一のものが発している音ではない。複数の、いや、無数のものが動きまわっている音だ。

ボトツ。

何かが天井から落ちてきて、僕の右肩に当たる。逃げていこうとするそれを僕は左手で捕まえる。スベツとしたようなヌメツとしたような感触が僕の手に伝わる。僕の左手の上腕ほどの大きさの蟲が身をよじりモゾモゾと節足を動かす。

ヘンペイムシだ。背が甲殻になっていないので、チャバネヘンペイムシだろう。

僕は捕まえたヘンペイムシを地面に叩きつけ、足で踏みつぶす。ヌルツとした感覚を足の裏に残し、ヘンペイムシは動きを止める。

父が言うにはヘンペイムシは病気を媒介する悪い蟲だ。ヘンペイムシがいなくなれば病気になる人が減る。病気で不幸になる人を減らすためにも害虫は退治しなくてはならない。そして、チャバネヘンペイムシであれば僕でもつぶすことができる。無数にいるヘンペイムシを踏みつぶしながら僕は洞窟を奥に進む。

ヘンペイムシは動きが早い。六対十二本の足を使って素早く動く。僕が踏もうとしても、大半はササツと逃げてしまう。

ここは僕のことを調べる洞窟だと父は言った。ということは、父はどこかでこの様子を見ているのだろう。逃げた蟲を追いかけて確実に殺すべきなのか、それとも蟲には目もくれずに、急いで出口を目指すべきなのか。父はどちらの行動を喜ぶだろう。

「クレッサは風魔法を使えるよね。魔法で蟲をいっぺんにやつつけられない？」

『ここはフサトの洞窟なのに私がやつつけていいの?』

クレッサの言うとおりだ。ここでクレッサに頼ってはいけない。

「じゃあ、僕に風魔法を教えて」

前にクレッサは言った。持っていないスキルを教えることはできないと。それならば、持っているスキルは教えることができるだろう。クレッサは風魔法のスキルを持っている。

僕に風魔法を教えることができるはずだ。

『よく見て』

薄暗い中でクレッサが印を切るのがぼんやりと見える。

『破ッ』

気合とともに印を前に押し出す。ヒュンという音がしてクレッサの手から白く輝く円弧状のものが無数に現れ飛んでいく。風の刃が飛んでいった先を見るとヘンペイムシがぎれいに切断され、息絶えていた。

僕もクレッサを真似て「破ッ」とやってみるが風の刃は出現しない。何度繰り返しても、風どころか空気の動きすら起きなかった。

『魔法がそんな簡単に覚えられる訳ないでしょ』

そう言うときクレッサは歩き出す。僕は慌ててクレッサを追いかけた。

確かにそうだろう、一度や二度の練習で魔法が覚えられるのなら、この世の中は魔法使いだらけになってしまう。

洞窟を奥に進むと、ヒカリゴケは少なくなり、さらに暗くなる。暗くなるが、闇に目が慣れてきたのか、物の見え方は変わらない。

それでも少し心細くなって、僕はクレッサの手を握る。クレッサはニヤッと笑うが何も言わず手を握り返す。

僕らは手をつないだまま、洞窟の奥へと進んでいった。



ヘンペイムシをつぶしつつ進むと、目の前には唐突に石の扉が現れた。僕は確かめるようにクレッサを見る。クレッサがうなづいたのをみて扉を押し開ける。

そこは何もない部屋だった。部屋というか広場というか、丸く開けた空間だ。その壁の下の方はびっしりとヒカリゴケが生えている。青く光るヒカリゴケが多く生えているからか、進んできた道よりは幾分明るい。

僕とクレッサは部屋の中に入る。すると、石の扉はバシンと大きな音を立てながら突如閉まった。

扉が完全にしまったのを確認すると、僕らはゆっくりと前に進んだ。中央の近くまで来たとき、今までより二回りは大きいチャバネヘンペイムシが僕にとびかかってきた。

チャバネヘンペイムシの幼生は羽根が完全ではなく飛ぶことができない。床をはいつくばって動き回る。脚力と棘状の脚先を使って壁や天井を走ることもある。

しかし、成体は背に茶色の光沢のある羽を持ち、短距離なら飛ぶこともできた。

成体の寿命は七日ほどだ。成体へ変態したヘンペイムシは交尾と産卵のことしか考えない。栄養をつけ、種を増やす。

それが最優先事項になる。そのため、屍肉や小動物を食らう。ここまで、ここではヘンペイムシ以外は見かけなかった。人を襲うことは少ないヘンペイムシだが、こんな洞窟では僕のような大人になりかけの人間は滅多に出会えない小動物の代わりなのかもしれない。

僕は右腕にとりついたヘンペイムシをはがそうとする。だが、ヘンペイムシはがっしりと腕にしがみついて離れない。それどころか、僕の上腕をかじり始める。

「あうっ」

痛さに声をあげてしまう。クレツサは風魔法の印を切ったまま、僕とヘンペイムシを見ている。

僕は左手で蟲を引き離そうとする。蟲は脚の棘を肉に食い込ませそれに対抗する。僕はさらに力を入れる。ビビッというかすかな音がして、蟲の体がかすかに腕から離れる。

「ぐっ」

僕は無理やり蟲を引きはがす。腕にめり込んでいた脚の棘と牙が、皮膚を切り裂きながらスライドして、最後には腕から離れていく。

そのまま左手を地面に押し付け、右足で何度も蟲を踏みつぶす。やがて、蟲の腹からベージュの体液が出てくる。それでもヘンペイムシの脚はモゾモゾと動いている。

僕は何回も何回も踏みつける。やがて蟲の背の茶色の光沢

はベージュの液にまみれ、十二本の脚も動かなくなっていた。

「うおう」

僕は叫んでいた。息が切れ、叫び声を止まると同時に腕に激痛が走る。クレツサは風魔法の印を治癒の印にかえる。

『ハッ』

腕の痛みは少しだけやわらぎ、避けた皮膚の表面がかさぶた状に固まる。流れ始めていた血がそれによって止まる。

『最低限の治癒だけしてあげる』

僕は痛みに耐えながら「ありがとう」と礼を言った。

人心地が付いたところであらためて部屋を見回す。入ってきた扉は閉じられたままだが、それとは反対の壁に開け放たれた扉が出現している。その扉の先には下へ降りる階段があった。

もうヘンペイムシが出てくる気配はない。何故かヘンペイムシ以外のものもこれ以上出てくるとは思えなかった。

頭の中に「安全地帯」の単語が浮かんできく。

暗い洞窟、扉、攻撃してくる蟲。その蟲を倒すと出現する下へ降りる階段。

「ここって迷宮なのかな」

『今までなんだと思ってたの。初心者用の迷宮以外にこんなところある訳ないでしょ』



迷宮。森の中や山、荒れ地など人があまり入り込まない場所に獣や怪物、物の怪が集まって巢食うところ。衛兵や勇士が時折駆逐するが、いつの間にか復活したり場所を移して新たに発生している闇の世界に属する場所。

大人たちは子供が迷宮に近づくのを厳しく禁じていた。子供だけで迷宮に入ったきり、全員が生きては出てこなかったなどという話もかなりある。

その迷宮に今は僕一人だ。

『私もいるから一人ではないし、フサトはもう子供でもないでしょ。大人と認められたからここにいるんじゃないの』

僕の不安を読み取ったようにクレッサがそう言う。クレッサの言うとおりだ。いつまでも子供ではいられない。子供では多くの人を本当の幸せには導けない。

「下に降りる前に、もう一度、風魔法を教えて」

本능が告げるには、蟲を倒し終わったここは安全地帯だ。もう敵が出てくることはない。このまま下に降りればチャバネヘンペイムシより強い敵が出てくるだろう。武器もなく素手の僕がこの洞窟から抜け出すには、敵に対抗する手段がもっと必要だ。

『そんなにすぐに覚えられるとは思えないけどね。特に今は』

「後になれば早く覚えられるの？」

クレッサはそれには答えず、風魔法の印を切る。僕もあわててクレッサの真似をする。

『破っ』

クレッサの手から風の刃が飛び出す。

「破っ」

僕も同じようにするが何も起きない。同じ動作を二度、三度と繰り返ししても何も変わらない。

『風って何』

クレッサが急に僕に問いかける。

「え、あ、空気の、流れ」

『風って何』

クレッサは僕の答えが不満だったようだ。同じ質問を繰り返す。

風は何だろう。空気の流れという答えだって悪くないはずだ。それ以上の答えとなると、何て答えればいいのか判らない。

『風は気圧の変化を均一化しようとする気体の動き』

「温度の一定化じゃなくて、気圧の一定化なんだ」

僕の知ってる限り、風はいつも冷たいところから暖かいところへ向かって吹いている。そのことを思い出し、クレッサに話すと、クレッサはフンと鼻で笑う。

『温度はものがどれだけ運動しているか。運動量が大きけれ

ば高温。小さければ低温。温かい空気は上昇してそこは低圧になる。低圧高圧は相対関係。結果、冷たい空気が温かいほうに流れる。上昇気流を生まない閉鎖空間なら、温度が違っても風は起きない。閉鎖空間で同じ温度でも、気圧が場所によって違えば風は起きる』

「風魔法は気圧の操作なの？」

『結果的に気圧の操作。温度を変えて上昇気流を発生させれば気圧が変わる。温度操作だけでも風魔法は発現する』

「矛盾しているように聞こえるんだけど」

クレッサは再び鼻で笑うと素早く印を切り風魔法を放つ。

僕も印を切り魔法を唱えるが風魔法は発動しない。

「僕には風魔法は使えないのかな」

『フサトは剣を剣士のように扱えるとも言うの』

「剣なんか触ったこともないよ」

『剣を持って二三回振っただけで、剣士になれる？』

「そんなのは無理」

そうだ、魔法もそうだ。たった二回の練習で使えるようになるほど簡単なら、世の中は魔法使いだらけだ。

僕は印を切る。何度も何度も。それでも、風の起きる気配すらしない。

『いつまでここでそうしているつもりなの』

魔法に気を取られていた僕は、我に返る。クレッサに言う

とおりだ。ここは僕を調べる洞窟で、今は検査の真っ最中だ。魔法の練習をしているときじゃない。でも、魔法がなければこの洞窟を抜けられないかもしれない。矛盾してるのはクレッサではなく僕だ。

『手のひらの中に空気を集める。手のちよつと先の空気を薄くする』

クレッサがそうつぶやく。僕は今言われたことを意識しながら印を切る。

「破っ」

魔法は発動しなかったが、風は動いた気がした。それを見たクレッサが奥の階段に向かって歩き始める。僕もクレッサに並んで歩き始めた。



階段を下に降りる。暗闇に目が慣れてきたのか、それとも検知するコツがつかめてきたのか、今までよりも周りがよく見える。黄昏時と同じぐらいの見え方だ。

それでも僕はクレッサと手をつないだまま迷宮を先に進んでいった。

シャカシャカという音はまだ聞こえている。時折チャバネヘンペイムシの姿も見かける。僕はできる限りヘンペイムシ

を踏みつぶしながら、先に進んだ。

ヘンペイムシは害虫。その害虫をやつつけることに満足感を覚えていた。この迷宮のヘンペイムシを全部退治しても病気はなくならないけど、僕が退治したヘンペイムシは今後、人を病気にすることはない。誰だって病気にはなりたくないだろう。ヘンペイムシが減れば幸せになる人が増えることになる。人を幸せに導くのが僕の仕事だ。

クレッサはただ、僕と並んで歩いている。ヘンペイムシが足元においても踏みつぶさない。足を下した先にたまたま蟲がいれば、それをよけることなくそのまま足を下すが、わざわざ狙って踏みつぶしたりはしない。まるで、そこには何もなにかのように黙々と歩いている。

そのクレッサが急に立ち止まった。「どうしたの」と聞こえた僕に向かって、何もしゃべらないようにと、人差し指を唇にあてて合図する。そして、耳を澄ましている。

シャカシャカという音に交じって、小さいカサカサが聞こえてくる。僕はカサカサ音がする方向を注意深く見た。

小型のヨロイヘンペイムシだ。

ヨロイヘンペイムシはチャバネヘンペイムシより動きが遅い。そのかわり、背は甲殻で覆われていて、危険を察知すると丸まり、球状になる。

ヨロイヘンペイムシの外殻は固く、安いナイフ程度では傷

つかない。聞いた話だと、希少金属を使った刃か魔法のかかった刃でないと傷つけることはできないらしい。

ヨロイヘンペイムシは街の中ではあまり見かけない。主な生息地は、街の外の洞窟や暗闇だ。僕も街の外の森で一度見かけたことがある。まだ小さいときで、興味本位に近づいたら「危ない」と母に叱られた。

そういえば、そのときは父も一緒にいた気がする。今では考えられないことだが、昔は父と母も仲が悪いときばかりではなかったのかもしれない。

ヨロイヘンペイムシの弱点は腹だ。背の甲殻に比べ腹は柔らかい。素手でも傷つけることが可能らしい。その腹を守るために危険を察知したヨロイヘンペイムシは丸まるのだ。

特別なナイフを持たない今の僕がヨロイヘンペイムシを斃すには腹を狙うしかない。僕はわざと大きな音を立ててヨロイヘンペイムシに近づき、背に触れる。

僕に手が触れる前からヨロイヘンペイムシは背を丸めて球になる。僕は丸まった蟲を手でかかえ、洞窟の通路の中央に持ってくる、そして腹が上になるように地面に置き、息を殺した。

しばらく見ていると、ヘンペイムシは脚を外に出し、もぞもぞと動き始める。そして、近くに触れるものがないと判ると、ゆっくりと背を伸ばし始める。

僕は腹が上になるように蟲を置いた。背を伸ばす蟲は、一瞬無防備に腹をむき出すことになる。

僕はその瞬間を逃さない。蟲の上はずっと持ち上げていた足を勢いよく下におろす。振り下ろした僕の足の裏で、グニヤリと蟲がつぶれる。

靴が蟲の体液でよごれるけど、そんなのは気にならない。ヨロイヘンペイムシを退治できたことのほうが重要だ。僕にもヨロイヘンペイムシが退治できることが判ったことが重要なのだ。

だけど、これでは駄目だ。チャバネヘンペイムシのときのようにいっぺんに何匹ものヨロイヘンペイムシがに襲われただけで対処できない。ひっくり返して腹を見せるのを待ってる間に別のヨロイヘンペイムシに襲われ、その対処をすればひっくり返した蟲はその隙に逃げてしまう。

一匹ずつ現れれば退治できる。でもいっぺんに複数の蟲と戦うには力が必要だ。この鎧を打ち破るほどの力が。力を手に入れば多くのヨロイヘンペイムシを短時間で斃すことができる。害虫を短時間で殺し、人々を短時間で幸せにできる。

そう思ったとき、洞窟がいきなり明るくなった。まぶしさに目をつむったとき父の声が聞こえてきた。

「鑑定はおしまいだ。結果は数日後に教える」

目を開けると、光の中に父の背中が見えた。

### ● 三章 図書館の女と男

祖母が亡くなった。葬儀で皆が集まった夜、僕は大叔父、父の父の弟に首を絞められた。大叔父にとつて僕はそれほど憎い存在なのだろう。

首を絞められた僕は苦しくてもがいたけど、できたのはそれだけだった。もしクレッサが風魔法で大叔父の手を切り落としてくれなかったら僕は死んでいたかもしれない。いつまでも妖精様に助けられていては駄目だ。もっと強くなって自分で何でもできるようにならないと。

剣士や衛兵は強い。彼らは剣を使う。強くなるには剣の鍛練を行うのがいいのかもしれない。だけど、僕には剣の素質はない。素質もないのに剣の鍛練場に通うなんていう無駄な母は許してくれないだろう。剣の鍛練場に通うにはお金が必要なのだから。

鍛練所に通う代わりに毎日、庭で剣に見立てた棒を振り回していたら、母が治療院の人を連れてきた。そして剣の鍛練所に通うのを許してくれた。それも二か所の鍛練所に通っていいとまで言ってくれた。無駄な金を使うことを許すなんてどういふ心境の変化なのかと思ったら、鍛練所にかかる費用

は父の治療院に勤めている人、僕を母に引き渡した男の人が出してくれるらしい。

何故、身内でもない人がお金を出してくれるのだろう。

『ステータス』

僕は心の中でつぶやき、治療院の男の人を鑑定した。

名前…エバート 級位…7 体素…13／63 魔素…6

2／81 スキル…公正な判断、説得、???、???、???、???

「したい習い事ができたときや習い事で物が必要になったときは私に言ってください。習い事と認められるか、習い事に必要な物かを私が公正に判断し、認められると判断できればその費用はすべて私が出します」

「剣の鍛練所は習い事として認めてもらえるのですね」

「鍛練所で使う道具も認めます」

「何故エバートさんがお金を出してくれるのですか」

「それが私の仕事だからです」

「それが仕事なのですか」

「はい、そうです。了承していただけますか。了承していただけるのでしたこの書類に署名をお願いします」

エバートさんは書類が好きらしい。母は物欲しそうな目でその書類を見ている。もし僕が署名を断れば母は不機嫌になるだろう。僕はエバートさんの仕事を理解しないまま、書類に署名した。

手続きと道具の準備の関係上、剣の鍛練所に通うのはしばらく先になるらしい。それまでは祖父、母の父の図書館に通い、本での鍛練だ。いままでの鑑定の本の他に剣の本も読んでみよう。

祖父の図書館は大きい。この街には他にいくつか図書館があるが、祖父の図書館が街一番の図書館だ。祖父が作った図書館だけど、祖父はもう引退していてそこにはいない。普段は自宅の工房で気が向いたときにアイテムを作っている。

この頃の僕は朝から昼までは庭で剣術の鍛練をして、昼から夕方まで図書館で本を読んでいる。図書館で読んでいるのは鑑定と剣術の本だ。そして夕方に図書館を出て、図書館の前で通りを歩く人で人物鑑定の鍛練を行っている。その時間がいろんな人が通りを歩いていて鑑定の鍛練にはうってつけだ。

「まだ帰らないの？」

図書館の横のベンチで街の人を見ている僕に声をかけてきたのは、司書の女の人だ。祖父の図書館には八人の司書がいる。七人は女の人で男の人は一人だけだ。その男の人はいつも奥の部屋で仕事をしていて滅多に顔を見せない。七人の女の司書もかわりばんこに図書館に来ていようだ。

声をかけてきた人は七人の司書の中でいちばんやさしい

人だった。本を借りる時にはいつも声をかけてくれる。図書館には数えきれないほどの本があるから、読みたい本がどこにあるのか判らないことも多い。だから探している本がどこに置いてあるかを司書の人に聞くことになるけど、ほとんどの人は不愛想に棚の方向を示すだけだ。だけど、この女の人丁寧に教えてくれる。それでも判らないときは棚の前まで連れていってくれたりしていた。

「もう夜だよ。あまり遅くなると家の人が心配するよ」

そう言いながら僕の右横、クレッサが座っていたところに腰を下ろした。クレッサは女に人が座る直前に立ちあがり、左横に座りなおした。

「僕は母と二人で暮らしています。母は働いていて、もっと遅くならないと帰ってきません」

「そっか」

女に人は立ち上がろうとした。でも、一瞬ためらってそのまま腰を下ろす。

「このごろ、占いの本をよく読んでいるね。占いの鍛練でもしているの」

本当は占いではなくて鑑定だけど、僕は「はい」と答える。

そこで会話が終わってしまう。女の人はまだ何か話したそう

だ。  
『占いのことを聞いてきたってことは占ってほしいってこ

と。鑑定してあげると喜ぶかもよ』

クレッサが救いの手を差し伸べてくれた。

「まだちゃんとはできないですけど、鑑定させてくれますか」

「私を占ってくれるの？ それは楽しみね」

『ステータス』

僕は心の名で呪文を唱えた。

名前…??? 級位…3 体素…19／31 魔素…20

／33 スキル…知識記憶、??? ？？？

『ほとんど判らない。これじゃあ何も話せないよ』

『もっとしつかり彼女を見て。手とか髪とか顔とか服とか。手が荒れるとかきいれだとか、髪は整っているか乱れているか、服はしわがないか、汚れてないか。そんなことから判ることも多いよ。それと、彼女が周りからどう思われているかも参考になるよ。そんなことも思い出してごらん』

クレッサが鑑定について教えてくれた。いままでどんなに頼んでも教えてくれなかったのに。

僕は右横の女の人を見た。上から下までじっくりと眺め、それから図書館の中で働いている姿を思い起こした。

名前…リサ・バツハ 級位…3 体素…19／31 魔素…

20／33 スキル…知識記憶、??? 構成情報…まじめ

女の人、リサさんの横に浮かんでいるステータスが変化していく。僕はその中の構成情報を読み上げた。

「バッハさんははじめですが自己主張が苦手です。仕事や恋愛においては周りの人に流される傾向にあります。相手から強く出られると断り切れません」

リサさんは恥ずかしそうにうなづいている。

『表示されたステータスをただ読むだけじゃダメ。占って欲しいっていう人は何らかの問題や悩みを抱えていてそれを解決して欲しい人。その悩みが何かを考えて、その答えを与えてあげなくちゃ』

『悩みや問題の答え？』

クレッサはニコニコしている。

『深層は心の中にあるから見た目を気にしないほうがいいよ。彼女の心の奥底を感じてみて』

僕は目をつむった。リサさんの悩みは何だろう。その答えは何だろう。

「新しい環境に旅立つときです。はじめは辛いこともありませんが、行動することで将来に大きな変化を与えてくれるでしょう」

リサさんは驚いたように僕を見ている。僕自身も驚いていた。リサさんのステータスはさっきのままだ。それなのにひとりで言葉がでてきたのだ。僕の意識しないところで僕の口また動き出す。

「それに伴って古い人間関係は清算すべきです」

「それって。や、やっぱり。あ、え、何でもない」

「新たな場所で新たな人間関係が始まります」

「新しい人と出会うってことね」

「影響を与える人は新しい人ではなく関係が変わる人です。関係が変わりバッハさんの人生に影響を与える人は二人います」

「人生の影響って、そのどっちかの人と結婚でもするのか」  
リサさんは何かが吹っ切れたような明るい顔になった。でもそこまでは判らない。口ももう動かないみたいだ。

「ごめんなさい。そこまでは判らないです」

また役に立たなかった。せつかく笑ってくれたのにちゃんと答えを教えて幸せにしてあげることはできなかった。

「ごめんなさい。まだ能力が足りなくて、そこまでは判りません。ごめんなさい」

リサさんは僕の謝罪を笑って受け入れてくれた。やっぱりリサさんはいい人だ。次はリサさんを喜ばせて幸せにしてあげなくては。そのためにはもっとスキルを磨かなくてはいけない。力をつけるためにもっともっと鍛練を頑張らなくては。



三日ほどしてやっと鍛練所に通えるようになった。でもま

だ二つの鍛練所に通える訳ではない。

二つの内一つは剣専門だが、もう一つは剣にまつわる総合的な鍛練所だ。剣の材料と加工の知識。過去の英雄や勇者の話。いろんな地形の特性とそれに即した戦い方。はたまた統治の仕方や他国との付き合い方まで。

総合的な鍛練のため座学が多く、実技は少ない。その少ない実技も基礎体力をつけることに主眼が置かれ、剣の鍛練に割り当てられた時間はほんの少ししかなかった。

そんな総合鍛練所は剣の道具を持っていなくても構わない。だから三日で通えるようになったのだろう。通いやすいからか、多くの人が通っている。通ってる他の人も僕と同じくらいの若者だけだ。座学が多いからかその総合鍛練所には小さな図書館も併設されていた。

総合鍛練所に通い始めてからは、祖父の図書館だけではなく、総合鍛練所の図書館もよく利用していた。

その小さな図書館で古いと人物鑑定の本を読んでいたり、声をかけられた。振り向くと僕と同じくらいの男の子がクレッサと同じくらいの女の子とともにこっちに向かって歩いていった。

男の子はユーリイ・フェルドだ。鑑定スキルの鍛練を続けたおかげか、この頃は見知った人なら魔素を使用しなくても名前ぐらいは判るようになっていた。でも、女の子は見知ら

ぬ子で名前は判らない。

ユーリイは僕の読んでいた本を見ながら僕の向かいの席に座った。

「そんな本ばかり読んでるなんて、フサトは占いができるのか。なら、俺とこいつの相性を占ってくれよ」

「ユーリイと彼女の相性？」

女の子は少し恥ずかしそうにユーリイの隣、クレッサに向かい合うように座った。

『ステータス』

名前…ユーリイ・フェルド 級位…2 体素…18／22

魔素…16／22 スキル…統率 構成情報…人懐こい性格

で誰からも好かれる

名前…??? 級位…2 体素…10／17 魔素…18

／25 スキル…精神強化魔法

相性を鑑定するには情報が少ない。

『鑑定のテクニックを教えてあげる。紙とペンを相手に渡して』

ユーリイに告げる言葉を考えているとクレッサが助言をくれた。僕は持っていたメモ帳から一枚抜いて、カバンの中にあったペンと共にユーリイの前に出した。

『そこに名前と生まれた日付を書いてもらって』

「じゃあ占ってみるから、そこに自分の名前と生まれた日を

書いて」

「おう、なんか本物の占いみたいだな」

ユーリイが名前を書いていく。僕はそのペン先を見ていた。『ダメ。名前を書いている相手の表情やペンを持つ手の力の入れ具合、書く速さを見て。自分の名前をさっと書くのか、丁寧に書くのかそれを見て。書かれた文字は後からでも見ることができると、書いてる姿は書いてる時しか見ることができないよ』

クレッサの言うとおりで。慌ててユーリイの表情を見ようとするが、彼はすでに書き終えていて紙とペンを女の子に渡している。僕はじつと女の子を見た。女の子は恥ずかしそうにしながらゆっくりと丁寧に名前を書いていく。そして、書き終わるとペンと紙を僕に返した。すると、女の子の横に表示されていたステータス内容の？が崩れていき、名前に変わった。

名前…カレン・ベルグス 級位…2 体素…10／17 魔素…18／25 スキル…精神強化魔法 構成情報…前に出るのは得意ではないが芯は強い

『テクニクその二。生まれ年の聖獣と生まれ日の守護星を言々と導入がスムーズになるよ』

一般的な占いは聖獣占いと星占い、そして血の色占いだ。聖獣占いは生まれ年によって司る聖獣が決まり、それによっ

て運命が判るというものだ。星占いは生まれた日によって守護星が決まり、性格も決まるという考え方だ。聖獣の数は十二。守護星の数も十二。占いにおいて十二は重要な数らしい。それぞれの占いについては多くの本が書かれている。僕は占いの本を何冊も読んでいたので、どの年がどの聖獣か、それぞれの守護星がいつ生まれた人の守護星になるのかは暗記している。

書かれた生まれ年を見ると、ユーリイとカレンさんと僕は同じ年の生まれだった。

「ユーリイ・フェルド。聖獣はフェニックス。守護星はアルヘナ。話し上手で行動力があります。人を導くタイプです。カレン・ベルグス。聖獣はフェニックス。守護星はグリーゼ。調和を大事にして争いは好みません。冷静に愛する人をサポートします」

ユーリイの顔がちゃかしたような表情から興味を持った表情に変わっていく。僕は目を閉じた。リサさんのときは目を閉じたら言うべき言葉が浮かんできた。今回もそうなるかもしれない。

「突っ走ろうとするユーリイに対して、落ち着かせるカレンさん。外に出たがらないカレンさんに対して引く張るユーリイ。お互いを補う関係なので相性はいいです」

「そうか。なら良かった」

「二つのことに注意すればずっと仲良くいられるでしょう」  
「二つ？」

「カレンさんは目立たないけど、ずっとユーリイを支えています。これを忘れないこと」

「お、おう」

「ユーリイは言葉に出さないけど、いつもカレンさんに感謝しています。これを忘れないこと」

カレンさんは微笑んでいる。

「でもたまには言葉にしてほしいです」

「お、おう」

ユーリイはさっきから同じ唸り声しか発しない。僕はちょっとだけ助け舟を出すことにした。

「ユーリイはこの街を導く人になるのです。立場的に口できかないこともあるでしょう。そこは察してあげてください」

「待て。俺はこの街を導く立場になれるのか」

「そこを指摘しているのですよね」

「俺はそんなことお前に一言も言っていないぞ」

「はい。聞いていません。でもそのつもりなんですよね」

「代官になれるのとなれないのでは大きな違いだろ」

ユーリイはこの街の代官を目指していたようだ。であれば、その道は険しい。簡単にはたどり着けないだろう。

「何故違うのですか。ユーリイは何のためにお代官様になり

たいのですか。街の人を幸せにする近道のためじゃないのですか」

「まあ、それはそうだけど」

「目的は街の人を幸せにすることで、その手段がお代官様になることですよね。お代官様が目的で、その手段として人を幸せにするのではないですよ。でしたら、なれるかどうかは関係ないのではないですか。お代官様になる心意気を持つて、人を幸せにすればいいだけですから」

「お、おう」

「そうですね。その通りです」

お決まりの唸り声のユーリイに対して、カレンさんは笑っている。

「カレンさんもユーリイが動きやすいようにサポートしてあげてください」

「もちろんです」

「先ほどの注意点を忘れなければ、お二人の結婚生活は幸せなものになります」

「俺たちは結婚するのか」

「許婚同士なのに結婚しないのですか」

「誰に聞いたっ。俺たちが許婚だって」

ユーリイが怒った顔で僕を見て、それから非難の目でカレンさんを見た。

「私は言っていないよ。フサトさんとは今日はじめて会ったんだから」

何故、ユーリイはそんなに怒っているのだろう。

「誰からも聞いてないです」

「ならどうして知っているっ」

「だって二人の間にそう書いてあるじゃないですか」

ユーリイとカレンさんの間にはそれぞれのステータスが文字として浮かんでいる。そこにはこう書かれていた。

付属情報…ユーリイ・フェルドとカレン・ベルゲスは許婚同士

ユーリイは驚いた顔をし、カレンさんは恥ずかしそうに笑っている。僕の横ではクレツサがただニコニコとした顔を見せていた。

後で聞いた話だが、ユーリイの祖父、父の父は病気で引退するまではこの街のお代官様だったらしい。それならばほっておいてもその内ユーリイにその座が渡ってくるのではないか。それとも、ユーリイの父ではない者に代官の座が渡ったのだろうか。

今にして思えば、大叔父は人々を治療したいのではなく、治療院のトップを目指していた。もしかしたらユーリイも街の人の幸せではなく、代官の座を目指していたのかもしれない

い。

僕はこの街のリーダーや代官には興味がない。確かに代官になればこの街の人を幸せに導くことができる。でも、僕が目指しているのはこの街の人の幸せではない。すべての人の幸せだ。まだまだそこへの道は遠いけど、そこにたどりつかなければいけない。そのために、今できることをしなければ。

#### ● 四章 細く長い風の音

実技鍛練所で使う道具も治療院のエバートさんが持ってきた。鍛練所で使うのは本物の剣ではなく竹でできた木刀だった。鎧も兜も本物ではなく、鍛練用に作った簡易品だった。自身の剣と木刀では値段がまるで違う。エバートさんが気前よく用意してくれたのは、そんなことも理由の一つかもしれない。

実技鍛練所は総合鍛練所と違って幅広い年齢の人が通っている。まだ言葉もままならないような小さな子から、僕の父よりも歳が上と思われる人までいる。みんなを鑑定してみると剣術関連のスキルを持った人が多くいた。僕より小さな子の中にもスキルを持った子はいいて、僕より上手に剣を扱っていた。

僕は小さい子と共に初心者を組み分けに入った。そのことに何の不满もない。僕はスキルを持つていないし、事実初

心者だ。一緒に組になった小さい子の中にはスキルを持った子も二人いる。その子たちの足を引っ張らないよう頑張ってる鍛錬しなくては。

実技鍛錬場は実技を教えてくれるところだが、初心者組はその前に覚えることがある。それは座ることと防具のつけ方、剣の握り方だ。

雨の日のことを考えてだろう、実技鍛錬所は屋根のある大広間だった。まずはその木の床での正坐を教えてもらった。正坐は精神統一を促し、技能習得の手助けになるらしい。

鑑定のときの精神統一と似ているので、これは得意だ。でも小さい子供は苦手なようで、途中で足を投げ出したり、騒いだりしている。

他にも、防具のつけ方、剣の握り方、歩き方、挨拶のしかたなど基礎中の基礎から教えてくれる。それも繰り返し教えてくれるのですごく判りやすい。スキルを持っている人に教えてもらうと、スキルを持つていない僕でさえこんなに理解できることに感動した。

実技鍛錬所に通うようになって生活リズムは少し変わった。実技鍛錬所は夕方から夜にかけて開かれている。鍛錬は組み分けごとに行われていて、みんなは一回来ては二三日休んでからまた来ているが、僕は特別に全てのコマに参加させ

てもらっている。そこまでしなければスキルを持っていない僕はみんなについていけない。

でも初心者組の僕は上級の組の鍛錬についていけない。できない鍛錬は鍛錬所の隅で見よう見真似で参加するか正坐したまま上級者の動きを観察することになっている。

その観察と共に鑑定の鍛錬を行っている。動きが見事な人は剣術四位とか剣技五位を持っている。鑑定も鍛錬をつづけたおかげだろう、スキルのレベル表記が増えていた。

僕のステータスはこんな感じだ。

名前…フサト・フンフリヒト 級位…2 体素…9／1  
6 魔素…5／24 スキル…鑑定三位

中には、剣術や剣技のスキルがなくても見事な動きをする人もいる。その人はきつともものすごい努力をしたのだろう。僕もその人を見習い追い付かなくては。

夕から夜までは実技鍛錬所ですぐす。昼前から夕方までは総合鍛錬所ですぐす。朝行っていた庭での棒振りはやめて、朝は風魔法の鍛錬をしている。クレッサに教えてもらいながら鍛錬しているのだが、なかなかスキルが発現しない。未だに風がちよこつと吹くだけだ。

クレッサが言うには素質は持っているのですが、もっと鍛錬すればその内、修得できるらしい。ただ、風攻撃魔法は魔素を

大量に消費する。四回で魔素が枯渇しその日は他に何もできなくなる。鑑定の鍛練も多少は魔素を使うから風攻撃魔法は一日二回が限度だ。それもあって、風魔法はなかなかスキルとまらないのだろう。

朝は庭で風魔法。夕方までは総合鍛練所、夕方から夜まで実技鍛練所。合間合間に鑑定の鍛練。そんな生活が数か月過ぎていった。

夜、そのころはいつも魔素が少ない。一晚寝ると魔素はかなり回復する。回復量はほぼ一定で、多く残していても底をつくらいでも、量は変わらない。満杯になったときは切り捨てられるので、寝る前は鍛練をして減らしておいたほうが得だ。だから、実技鍛練所から家に帰るときはいつも魔素が少ないのだ。

その日、僕はいつものように鍛練用の防具と木刀を詰めた袋を持って帰り道についていた。

ドスッ。

鈍く低い音とキーキーという鳴き声をする。僕は音のした方向、商店の横の狭い路地を見た。人二人がやっとすれ違えるほどの路になっているそこには、僕より少し小さいくらいの子が胸ぐらをつかまれ、壁に背中を押し付けられていた。

胸ぐらをつかんでいるのは。それは。ゴブリンだ。

僕はその獣の背中に向かって走り出した。四匹のゴブリンは男の子に気を取られていて僕に気付かない。

ドスッ。

僕は男の子の胸ぐらをつかんでいたゴブリンに背中から体当たりした。ゴブリンは衝撃で男の子を落とした。

キーキー。

そこではじめてゴブリンは僕に気が付いた。僕はうずくまる男の子に覆いかぶさるようにしてゴブリンたちに背を向けた。

何故ゴブリンが街の中にいるのか。門兵は何をしてるんだ。街の衛兵は何をしてるんだ。

ゴブリンは街の周辺に出没する人型のモンスターだ。生息地の森からあまり出てこないが、それでも、時折数匹で徒党を組み人を襲うことがある。街中で見かけることはほとんどないが、全くない訳じゃない。街で被害が出ないように門兵が街への侵入を食い止め、万が一入られてしまっても衛兵が排除するはずだ。こんな街の真ん中で男の子が襲われるなんてことはあってはいけない。

ゴブリンたちは男の子に覆いかぶさった僕を殴ったり蹴ったりしだした。殴られれば痛いし、蹴られればもっと痛い。

でも逃げ出すわけにはいかない。僕が逃げれば男の子が一人取り残されてしまうから。防具は脱いってしまったが、防具の下に着る布帷子はまだつけたままだ。布帷子は普通の服よりダメージを吸収する。男の子が着ているのは普通の服だ。僕が逃げれば男の子は今の僕よりもっとひどい痛みを受けてしまうのだ。

『もっと伏せて。もっと小さくなって』

クレッサが風魔法の印をきりながらゴブリンの後ろで叫んでいる。僕は地に這いつくばった。

ドンッ。

大きな風の衝撃が来る。二匹のゴブリンがそれに飛ばされ僕の体にのしかかってきた。

「グ、フォ」

僕は押しつぶされて息を吐く。

『僕にも当たっちゃう』

僕が叫ぶと、クレッサは判ったというようにうなずいて、印を少し変えた。

ピュッ。

クレッサの手から短く細い風攻撃魔法が放たれた。一匹のゴブリンがキーツと悲鳴を上げ腕を押さえている。ゴブリンはクレッサが見えないらしくキョロキョロしている。

僕ははたと気が付いた。今までの僕は掌全体から大きく風

を出そうとしていた。大きく動かすには大きな力が必要だ。力や技術が低い僕には大きな力を出すのは難しい。でも、小さく動かすのは小さな力でいいはずだ。僕は風魔法の印をきった。

ハッ。

男の子を護りながら空に向かって印を突き出した。

ピイイイッ。

イメージしたのは髪の毛の細さだ。掌ではなく指先から髪の毛の太さを持った風を押し出したのだ。放たれた風は空気を切り裂いて、高い音を立てながら空に向かって突き進む。

全くの的外れ。ゴブリンにはかすりもしない。もう一回。

ピイイイッ。

今度はゴブリンの腕の近くを通った。ゴブリンが顔をしかめる。もう少し右だ。

ピッ。

目の前が暗くなる。体の力がどっと抜ける。しまった。魔素不足だ。すでに少なかったというのに調子にのって魔法を連発したから魔素不足を引き起こしたんだ。魔素がゼロになると何もできなくなってしまふ。失敗した。僕は意識を手放した。

何かを尋ねるような野太い声がして、僕は意識を取り戻し

た。目の焦点があつてくると目の前には覗き込むようにしているクレッサと見知らぬおじさんの顔があつた。

周りには衛兵の制服を着た大人が何人かいるようだ。このおじさんは衛兵の隊長のようだ。

クレッサはいつものようにニコニコしている。もしかしたらクレッサが衛兵を連れてきてくれたのかもしれない。僕はクレッサに向けて苦笑に似た笑顔を見せた。

剣の鍛練と鑑定の鍛練で魔素が少なくなっているのは判っていたはずだ。それなのに風魔法が使えるようになったのがうれしくて限度を超えて連発してしまった。魔素不足に氣を付けるのは初歩の初歩だ。苦笑い以外の何物でもない。

クレッサが助けてくれなかったら、僕も男の子もゴブリンに殺されていただろう。今回僕は男の子を助けることができただけ、それもクレッサがいてくれたからだ。もつともつと強くなってクレッサに頼らなくても人を助けられるようにならなくて。もつともつと強くなって自分一人でも人を幸せに出来るようにならなくて。

## ●第五章 本物ではない騎士

総合鍛練所にいられるのは三年間だけらしい。一緒に入っただけは三年たってみんな上級総合鍛練所に行くという。いままで気づかなかったがみんな貴族様や大商人の子息令

嬢だったようだ。

僕は上級鍛練所には進まず仕事に就くことにした。就職先を探していたら、実技鍛練所の所長さんが手伝ってくれないかとさそってくれた。それは剣の鍛練につながるので僕にとってもありがたい話だ。

僕に剣の資質はない。だから剣のスキルは持っていない。でも毎日鍛練していたおかげで準スキルは取得できた。資質を持った人の三倍の鍛練をして二位相当の剣技の動きが可能になっていた。準スキルなのでちゃんと人に教えることはできない。でも教える手伝いならできる。

鑑定もスキルが上がって多くのことが見えるようになった。項目としては、資質、準スキル。対象としてはモンスターやアイテムも鑑定可能だ。

剣の鍛練をするようになって体が丈夫になったのも影響しているのだろう、この三年間は一度も父と会っていない。でもユーリイのお父さんとは三度会った。

ユーリイのお祖父さんは昔、この街のお代官様だった。お父さんは衛兵の隊長をしているらしい。ということはユーリイは貴族様のご子息なのだろう。そんなユーリイと僕が話をしたのが気に入らなかったらしく僕を待ち伏せして、僕の家族構成や暮らしの様子を聞いてきた。それが一回目、ゴブリ

ン騒ぎがあつた直後だ。

二回目と三回目はそれから二年後だ。街の中でゴブリンを捕まえたから、男の子を襲つたゴブリンを見て欲しいと言われた。

ゴブリンの顔なんか見分けがつかない。鑑定で名前を見たけど、襲われたときはまだモンスター鑑定はできなかったから、同一個体かは判らない。でもゴブリンはゴブリンだ。巢を調べれば悪事の痕跡ぐらいいくつも残しているだろう。

そもそもゴブリンは存在自体が悪だ。たまたま、まだ人を襲つていなかったとしても退治すべきだ。そう思った。だけど、後から考えたら確認した理由は、懸賞金だ。襲われた後、いろんな人にその時の話を聞かれた。その中の誰かがあのときのゴブリンに懸賞金をかけたのだろう。たぶん「男の子を助けるなんてすごいね」と僕をほめてくれた人だ。

でも僕が人を助けるのはすごいことではなく当然のことだ。僕にはクレッサがいる。妖精様の加護を受けている者は人を幸せに導かなければいけない。僕はすごくない。

でも、僕が妖精憑きだということを人に話すことはできない。それは父から他人には妖精様のことを言うなど言われたからだ。その後、話してもいいという許可はもらっていない。それはそうだ。あれから僕は父に会っていないのだから。

だから僕をほめてくれた人には妖精様のことは何も言わ

ず、ただ「人を幸せにするのは当然のことです」とだけ答えていた。

実技鍛練所は夕方から夜までだ。今まで総合鍛練所に行っていた昼は暇な時間になった。僕はその時間を利用して乗馬を習うことにした。

馬や馬車に乗る人は多い。僕も何回か馬車に乗ったことがある。貴族様やお金持ちは自分用の馬車を持っている。父の治療院にも馬車があり、父はよくそれに乗っていた。でも母は馬車を持っていない。母曰く馬車は無駄なものでそんなものを持つゆとりはないらしい。

乗馬も初めは拒否された。だが、習う費用はエバートさんが出してくれることになって、渋々ながら習うことを納得してくれた。たぶん、乗馬なんか習わずに、昼も働いてお金を稼いでほしかったんだろう。

僕が乗馬を習いたいと思つたのは、騎兵にあこがれたからだ。ほとんどの門兵や衛兵は徒歩だが、一部は馬に乗っている。彼らは困っている人の前にさっそうと現れ、素早く問題を解決し、さっそうと去っていく。電光石火の勢いで人を幸せにしていく。僕もそうになりたい。そう思ったからだ。

乗馬や馭者は比較的簡単に取れるスキルのようなのだ。鑑定で見ると、正式なスキルの人は少ないが、準スキルを持つてい

る人は数多くいる。特に体力系や風系のスキルを持った人は乗馬や馭者の準スキルも取りやすいらしい。僕も魔法を使える。そんなに苦労せず取れるはずだ。

僕には剣術二位の準スキルがある。剣術と乗馬があれば騎士への道が開かれる。僕の剣術は準スキルなので本物の騎士にはなれないが、準騎士でも今以上の力を得ることになる。それは多くの人を幸せにすることにつながる。

結局二十日ほどで乗馬の準スキルがとれた。それも一気に乗馬二位相当だ。同じ二位でも剣術二位が二年半かかったのとは大違いだ。

二位ではユニコーンやペガサスのような特殊な馬は扱えないが、普通の馬なら農耕馬から大型馬まで乗りこなせる。準スキルなので人にちゃんと教えることはできないが、そもそも乗馬を教えるつもりはない。教えようにも僕は馬を持つていない。エバートさんも馬の代金までは出してくれなかった。馬に乗りたくなったら貸し馬屋で借りるつもりだったが、準スキル取得から十日後、母が親戚から小型馬をもらってきた。小型馬と言ってもちゃんとした乗馬用の馬だ。ただ、老馬とは言わないまでも盛りは過ぎている馬だった。

その馬を届けに来たのは叔母、母の母の娘だった。叔母と母は父親が違うので、母の父の娘ではない。親が半分しか同

じでなくても母の妹になる。それは叔母と言っているだろう。叔母と母は十三も歳が離れている。叔母と僕は十歳差だ。年齢的には母より僕のほうが近い。

「フサト君とは私が今のフサト君ぐらいのときに会ってるんだけど、憶えてる？」

「はつきりとは憶えていないのですが、髪が長くていい匂いがしたのは記憶にあります。『男の子ならもっと体を強くしなさい』と忠告してくれました」

叔母の記憶はほとんどなかった。叔母に限らず、クレッサと会う前の記憶は徐々に薄れてきている。だが、これも鑑定の鍛練の結果か、顔をじつと見てたり、その人のことをじっくり考えているとその人との出来事がうっすらと見えてくることがあった。ただ、それは実際に過去にあったことか、頭の中に浮かんできただけの事実なのかは判らない。

「うん、フサト君は見違えるようにたくましくなったね」

「それはアドバイスをくれたミカエラさんのおかげです。ありがとうございます」

僕が嬉しそうにそう言うときミカエラさんは恥ずかしそうに笑った。その笑顔はまるで少女のようだった。

「馬の試し乗りしてみる？ 私も馬で来たから付き合っ  
てあげるよ」

「ではサミエルの丘に行ってみたいです」

馬は速い。街の中ではそんなに速く走らせられないが、人の少ない野や街道では風のように駆けめぐっている。風が体を取り囲みまるで空の上を飛んでいるようだ。

クレッサは背後から僕にしがみついている。やわらかい肌のぬくもりが背中に伝わってくる。顔にあたる風の涼しさと背中のクレッサの温かさが妙に相まって気持ちいい。

そんなことを考えていたら、クレッサに『スケベ』と言われてしまった。

僕らはあつという間にサミエルの丘についた。よく晴れて風が通る昼の丘は人影はまばらだった。

「向こうに展望台があるから行ってみようか」

ミカエラさんの提案に僕はうなづき、馬留に馬を残して芝の坂をあがっていった。

丘の頂上には数人がのぼれる高床のデッキが置かれている。そこが展望台のようだ。

展望台からは南に海が見えた。海のはずつと海だ。後ろを見れば山々が連なっている。西には白い霊山がデンとそびえている。

山と海、その間には田畑と家々が続いている。本当に多くの家やお屋敷が立っている。それぞれの家にはそれぞれの人

が住んでいる。見える範囲でこれだけあるのだ。これほどの家に人が住んでいるのだ。もうかすんで見えないところ、山の向こうで見えないところ、海の向こうで見えないところにもたくさん家があって人が住んでいる。

僕にはクレッサがいる。妖精様の加護がある僕はここから見渡せる人も、見えないところの人も、みんな幸せに導かなければならない。

僕はクレッサを見た。クレッサは僕の隣でこの世界を見ながらニコニコしている。僕もつられて笑顔になった。

「楽しそうだね」

ミカエラさんは僕の笑顔を見たのだろう。

「はい、とてもうれしいです。馬を譲ってくれてありがとうございます」

「もとはチナさん、フサト君のお母さんからもらった馬だから、そんなに感謝されることじゃないよ」

ミカエラさんが母を呼ぶとき『チナさん』と呼ぶ。『お姉さん』とは呼ばない。それが二人の距離感なのだろう。

だから僕も『叔母さん』とは呼ばない。『ミカエラさん』と呼ぶ。それでなくても未婚の女性は『オバさん』と呼んではいけないらしい。呼ぶとしても『ミカエラ姉さん』だ。

「馬の名前は何ですか」

今までミカエラさんがあの馬の世話をしてきた。これから

僕がその役目を引き継ぐことになる。

「え？ 何？」

展望台は丘の一番高いところにある。風が通り抜けるので聞こえなかったようだ。僕はぴたりと体を寄せた。そして耳元に口を近づける。今は肩までしかないミカエラさんの髪からは、頭の中に浮かんできたのと同じいい匂いがした。

「馬です。馬の名前です。馬の名前を教えてください」

そう言うと、ミカエラさんは赤くなった。顔を赤くして恥ずかしそうにしている。何かいけないことを聞いてしまったのだろうか。

「ごめんなさい。聞いてはいけないことでしたか」

「いけなくはないけど。これからはフサト君の馬だから、新しい名前をつけていいよ」

ミカエラさんの答えは小さな声だ。やはり風で聞き取りにくい。僕はもつとくつついた。

僕とミカエラさんの背の丈はかわらない。ミカエラさんの髪が風におどって僕の頬をやさしくなでている。

「ミカエラさんはいい匂いがします」

ミカエラさんはさらに赤くなった。

「フウコ。馬の名前はフウコ。あの子はいつも風を呼ぶから」  
変な名前だから恥ずかしがっているのかと思ったのだが、そうじゃなかったみたいだ。

フウコ、風呼。ぴったりの名前だ。風呼に乗って街道や野を駆けていたとき、僕は風を感じていた。あれは風呼が風を呼んでいたのだ。

「ピッタリのいい名前ですね。僕も風呼と呼ばせてもらいます」

ミカエラさんは風に吹かれながら恥ずかしそうに赤くなっていた。

ミカエラさんはそれから時々遠出に誘ってくれた。大抵は他に三人、四人の大人と一緒にだった。みんな優しい人たちだ。

行くのは白い霊山の近くが多い。たまに南の半島や北の山に行くこともある。

朝早くに出かけて昼まで馬に乗って、目的地でちょっと遊んで、夜に帰ってくる。いつもそうだった。

実技鍛練所の仕事があるときは遊ぶ時間を短くして早めに帰る。一緒の大人は目的地で泊まったりしているけど僕は帰る。

ミカエラさんはいつも僕と一緒に帰ってくれた。僕一人で帰すのは心配だと言うことだが、やっぱり僕はまだ頼りないのだろうか。

本物ではないが、剣技の準スキルも持っている。子供のこ

ろから比べるとだいぶ丈夫になっている。だが、ミカエラさんの中では僕はまだ子供のときのイメージのままなのかもしれない。

ミカエラさんは母の妹だけあって母に似ている。でも違うところも多い。母は恥ずかしそうにしないし僕を子ども扱いしたりしない。

名前…ミカエラ・グロサーフロス 級位…3 体素…25

／35 魔素…20／29 資質…体術、魔術、芸術、算術  
人物鑑定をすればもっと詳しく判る。その人の過去や未来や持っている闇やいだいてる夢、希望まで見ることができる。でも今は本人から請われない限り、魔素を使つての人物鑑定はやめていた。魔素を使わず人を鑑定する。それが今の鑑定の鍛練方法だ。

魔素を使わずに見えるのは名前と体素、魔素。それと資質までだ。スキルは相手によつて見えたり見えなかったりする。準スキルや構成情報、付加情報はまだ見えない。たぶん、鍛練を積めば今見えないものも見えるようになるだろう。

ミカエラさんはたぶん風魔法のスキルを持っている。僕にも風魔法がある。母も風攻撃魔法を使える。僕は母から風魔法を受け継いだのだろう。母も母の母から受け継ぎ、ミカエラさんも母の母から受けついたので。きっとそうだ。

資質は親と同じになることが多い。僕の魔術と心術は母か

らで、話術は父からだ。智術は母も父も持っていない。三年前に他界した祖母、父の母の素質は見るができなかったが、今思えば智術を持っているような雰囲気はあった。おそらく智術は父の母のものが父を経由して僕に伝わったのだろう。

ミカエラさんの仲間にドレイクさんがいる。この人は馬丁だ。馬のことは何でも知っている。怪我したときの治し方や、そもそも怪我をしないようにするにはどうしたらいいか、馬の機嫌が悪い時にはどうなだめるのか。そんなことを馬を飼うのが初めての僕に事細かく教えてくれる。

魔素を使つた人物鑑定はしていないので確証はないが、きっとスキルとして馬使い、もしくは獣使いを持っているのだろう。

スキルの中にはどの資質から派生したのか判らないものがある。ドレイクさんの持つている資質から想像すると馬使いは医師か心術のスキルになるのかもしれない。

そのドレイクさんとドレイクさんの奥さん、ミカエラさん、僕の四人で遠出をしたときだ。ドレイクさんと奥さんはそのまま霊山のふもとで宿に泊まることになっていた。たまたま実技鍛練所が休みの日だったので、四人で夕方まで遊び、そこからミカエラさんと二人で帰路についたのだが、峠で急な雨に降られてしまった。

雨に濡れて馬も湯気をあげている。ミカエラさんも僕もびつしよりだ。一旦、街道沿いの馬留で飼い葉を与えながら雨宿りをして雨はやみそうにない。一息入れたあと雨の中に馬を進めた。

だが、すぐに馬がぐずり始めた。飼い葉を与えて落ち着かせたのがいけなかったのかもしれない。ドレイクさんから聞いたとおり首をたたいたり、なでたりしても機嫌がなおらない。

歩くことは歩くのだが、駆けようとはしてくれない。さっきまでの馬留にはもう別のグループが来て休んでいる。駆けないのなら今日中には家に戻れない。飼い葉用の馬留は街道の途中途中にいくつもあるが、簡易的に休めるだけでちゃんとした休憩や宿泊はできない。

僕は途方にくれた。もう日も暮れていた。ミカエラさんは肩をすくめている。

ふと顔を上げると視界の隅にお城が見えた。こんな山の中だ。もちろん本物のお城ではない。本物のお城は領都か王都にしかない。

領都や王都にあるお城は、貴族様や領主様や王様が騎士を叙任したり、愛を誓ったりする場所だ。一般の人は入れない。

山の中のお城は、本物のお城に入れない一般の人が騎士叙任の真似事をしたり愛を誓いあったりする本物を模し

ただけの偽のお城だ。

でもあそこにはちゃんとした馬舎もあるし、休憩施設や宿泊施設も併設されている。

「あのお城に行きましょう」

僕がそう提案すると、ミカエラさんは目を丸くした。クレッサはいつものようにニコニコしている。

「意味判って言っている？ あれは本物のお城じゃないわよ」

「はい。あそこなら休憩できます」

「休憩ね。確かに休憩できるわね。行ったことあるの？」

ミカエラさんは急に不機嫌になった。何故だろう、何がけなかったのだろう。馬と一緒に急な不機嫌の原因が判らない。

「一般の人が騎士叙任の真似をする場所だと聞いています。僕をミカエラさんの騎士にしてください」

通常は騎士の誓いより愛の誓いに使われているのは想像にたやすい。そういう目で見ていいのかと感じ、ミカエラさんは不機嫌になったのだろう。

ミカエラさんはいい人だ。僕はミカエラさんが好きだ。だからミカエラさんがいいと言ったら愛の誓いでも構わない。でも、ここまで不機嫌になると言うことはミカエラさんにはそんな気がないのだろう。ならば愛の話はせず、騎士の話だ

けにしておいたほうがいい。

風の音と共に溜息の音が聞こえた。

「私でいいの？ その相手は」

「ミカエラさんがいいんです。ミカエラさんでなきゃ嫌なんです」

僕の剣技と乗馬は準スキルだ。本物のスキルではない。本物の騎士にはなれない。叙任の場所も本当のお城ではない。あそこで騎士の誓いをして本物の騎士になることはできない。

でも、たとえ本物ではないにしろ騎士の誓いは納得できる人になりたい。僕の周りでそんな人はミカエラさんしかない。「ついてきて」

ミカエラさんは不機嫌なまま馬にまたがり走らせた。その方向は街道から離れお城に向かっていく。僕も風呼に乗りあとを追いかける。風呼はいやがりながらもゆつくりと歩き出した。

そうして僕は騎士になった。本物ではなくても騎士は騎士だ。もう子供じゃない。これからはミカエラさんをしっかりと守っていかう。大人としてミカエラさんと世の中の人を幸せに導いていかう。

結局そのままお城に泊まってしまった。朝起きて馬を調べたら後ろ脚の蹄と蹄鉄の間に小枝が挟まっていた。それが痛くて走らなかつたのだ。取り除いたらいつものように駆けてくれた。

僕は痛い思いをさせたことを風呼に謝った。風呼をなでて首を抱きしめた。風呼は判ってくれたようで顔をすり寄せてくる。それを見ていたミカエラさんがなぜか僕を抱きしめてくれた。

ミカエラさんはいい匂いがした。

## ● 六章 堕ちる淫魔

僕が偽の騎士になったところから、僕の耳に父の噂が聞こえてくるようになった。それはあまりよくない噂だった。男女関係に関わることで、多くの人は父の子である僕の耳に入らないようにしていた。だが、そういう噂話に限ってわざわざ伝えてくる人もいる。

悪意を持って伝えてきているので、僕も顔面どおりには受け取らない。公正な判断のためには自分で実際に調べるべきだ。だが、父に直接聞いたところで本当の答えが返ってくるとは思えない。そもそも僕が父に会うことはない。

このところ妹とはよく会う。妹も総合鍛練所に通っていて、

その座学の質問をするためにときどき訪ねてくるのだ。

訪ねてくるのは自宅ではなく、実技鍛練所だ。実技鍛練所はたいいてい夕方から夜にかけて開かれている。だが、朝から夕まで開かれるときが周期的にある。その日の昼過ぎに鍛練所の前で待っているのだ。自宅ではなく鍛練所に来るのは母と顔をあわせたくないからだろう。

僕にはそこまでして僕に質問をしに来る意味が判らない。総合鍛練所での疑問なら総合鍛練所の教官に聞くのが速くて正確だ。だからといって、せっかく来た妹を追い返すようなことはしない。近くの食堂で軽い食事をとりながら妹の話聞き、質問に答えている。

二か月に一度ほどの割合で、その場にエバートさんが参加することがある。参加と言ってもエバートさんは僕に質問もしないし、僕の話にもあまり興味はないようだ。おそらく、僕なんかに聞くこともなければ、僕の話などおもしろくもないのだろう。それでも顔だけはニコニコ笑って食堂のテーブルについている。そして帰り際に僕にお金を渡してくれるのだ。

「お二人に一つ伺ってもよろしいでしょうか。最近の父様の様子はいかがですか。僕はもう何年も父様にお会いしていませんので、ちょっと気になりました」

質問会のおわりにエバートさんと妹にそう尋ねた。僕は二

人をじっと見る。

「いままでとおかわりなくお元気でございます」

少しの間ののちエバートさんがそう答える。

「ナナはどう思いますか」

「私、このごろ、父様と話してないから」

「そうですか。そう言われれば最近、僕も母様と話してないです」

僕は笑った。妹はテーブルのカップを見ている。エバートさんは妹を見ながら苦笑している。クレツサはいつものようにニコニコしていた。

鑑定スキルを持っている僕には今の会話だけで充分だった。

「お父様にお会いしたいのですか」

「いえ、そういう訳ではありません」

突然の父の話題はやはりそう取られてしまうのだろう。

数日後、エバートさんから連絡があり、父の治療院に呼び出された。おそらくはエバートさんが僕のことを父に話したのだろう。父は周りへのポーズのため僕を呼び出したに違いない。意図がない呼び出しだからか、再び試練の洞窟に入るように言われた。

試練の洞窟は初心者用の迷宮だ。前のときより級位も上が

っているし、剣の準スキルも得ている。偽とはいえ騎士にもなっている。風攻撃魔法も風防御魔法も使える。

途中に出てくるチャバネヘンペイムシやヨロイヘンペイムシなど敵ではない。クレッサの力を借りなくても難なく迷宮をクリアした。

試練の洞窟を抜けたあと会った父は少し疲れて見えた。そして憑かれていた。

母と夫婦別れた父は独り身だ。だからどんな女性と付き合い合うが、それが父の望みなら問題ないと思っていた。たとえ妹やエバートさんや他の大勢が好ましくない女性だと思っただけでも父がそれで幸せになるなら構わない。そう思っていたのだ。

僕は鑑定スキルが使える。普通の人には見えないものが見える。久々に父の顔を見たとき、そこに違和感を感じた。

最近を対象者の依頼を受けない限り魔素を使った鑑定は行っていない。だが、父を前に僕は心の中で『ステータス』と唱え父を鑑定した。

父には魔眼が憑いていた。

魔眼は人の目では見えない。僕も直接、目で見ることはできない。だが、人物鑑定をすれば憑いているもののおぼろげな姿が見えてくる。さらにそれに対し魔素を使ったモンスター

―鑑定を行えば、魔眼の種類と名前、詳細情報が見えてくる。それは人ならざるものがよく使う魔眼だった。

魔眼、魔目、目、式目、式、式眼。呼び名や種類はいろいろある。魔眼自体は悪いものではない。愛する人を見守るため目をつけることもある。人の出入りの確認のために街門や街道に設置されていたりもする。要は魔眼をどう使うかだ。

父についていた魔眼は父の同意なくつけられていた。父がどこにいかや会話の内容を誰かに送り続けていた。父の魔素も定期的に吸い取っているようだ。

『モンスターステータス』

魔眼にモンスター鑑定をかける。魔眼の使役者は人ならざるもの。サキュバスだった。

なぜ父がサキュバスに魅入られたのかは人物鑑定でも判らなかつた。だが、サキュバスに入れ込んでいるのは判った。サキュバスに入れ込んでいる父は一時的に幸せかもしれない。でも、このままでは近い将来、父は不幸になるか命を失うだろう。それは父の幸せにならない。父の周囲の幸せにならない。

僕は妖精憑きだ。妖精憑きは人を幸せに導かなければならない。だから僕は父にまわりつく魔物を排除しなければならぬのだ。

魔眼からは細い糸が伸びている。もちろん糸というのは比

喩で実際には見ることも触ることもできない。その目には見えない糸を使って魔眼は使役者に情報を送っている。だから糸をたどれば使役者の場所も判る。

使役者のサキュバスは街の外にいた。馬に乗りながらたどった糸の先は街にほど近いタワー型のダンジョンだった。

ダンジョンはモンスターが出現する迷宮だ。父に言われて入った試練の洞窟もダンジョンだ。ダンジョンはきちんと管理すれば怖くない。試練の洞窟がいい例だ。あのダンジョンは治療院の中にあるようだが、管理されているのでチャバネヘンペイムシがあふれだすことはない。怖いのは管理されていないダンジョンだ。管理されていなければ人もモンスターも出入り自由だ。モンスターが外に出てしまうこともあれば、何も知らない人が気付かず入ってしまうこともある。

サキュバスの塔は管理されているダンジョンだった。糸はその塔の五階層目に伸びていた。

塔には門番がいた。門番は出入りする人を監視し、許可のない人の入場を制限していた。許可は騎士か衛兵か冒険者に与えられるらしい。

僕は実技鍛錬所の手伝いだ。騎士を自負しているものの本物の騎士ではなく偽の騎士だ。僕には塔に入る資格はない。父も騎士でも衛兵でも冒険者でもない。でも父は治療師だ。

ダンジョンではモンスターと戦う。当然、怪我人が出る。その治療のために父が呼ばれて中に入ることはあるだろう。きつとそのときサキュバスが父に罠にかけたのだ。

塔のモンスターは外に出ることができない。僕は塔の中に入ることができない。そうなると父をたぶらかしたサキュバスを退治することができない。

僕は対策を練るため何度かその塔に來た。だが、あまり目立ってはサキュバスに感づかれてしまう。気づかれないような近くの街道を馬で通り過ぎるだけにしていた。それでも、何度か通ううち判ってきたことがある。

塔の周囲には見えない障壁があり、人が外から中に入ることも中から外に出ることもできない。出入口は一か所だけでその前には門番が常にいた。そして、許可証を持っていないものには扉は開かなかった。

人は許可証がなければ中に入れない。モンスターも管理されていて外に出られない。けれど魔眼の報告の糸は外から中に伸びている。小さな鳥や小さな蟲も障壁の影響を受けていない。風も通り抜けている。魔法や風のような形の無いものや、形があっても小鳥や蟲のような小さなものは障壁を通過できるのではないか。そう思った僕は馬で横を通りながら弱い風攻撃魔法を放った。

風魔法は何事もなく障壁を抜け、パサツと音を立てて塔の

外壁にあたって消えた。

外から魔法戦を行えば、塔のサキュバスを斃すことができる。だが、それはできると言うだけで認められた行為ではないかもしれない。これだけ管理がしっかりした塔なのだ。管理外のところで中のモンスターが斃されることを管理者は喜ばないだろう。

でも僕は父を真の幸せに導くためにサキュバスを斃さなければならぬ。それは管理者の不幸せにつながるだろうか。それともその程度のことは許容範囲だろうか。

どちらにしろ目立った戦闘をすれば、門番がやってきてその戦闘を阻止するだろう。それではサキュバスを斃せない。人目につかず、目立たない時間帯に戦闘を行うべきだ。

そう、これは戦闘なのだ。今までの実戦経験は三回。試練の洞窟が二回とゴブリンとの市街戦が一回だ。ゴブリンのときは一方的にやられただけで、僕は何もできなかった。試練の洞窟は初心者用なので本格的な実践は今回が初めてだ。初の実戦に向けて準備をしなければ。

まずは図書館でサキュバスについて調べた。サキュバスは魅了を使ってくる淫魔だ。魅了して相手を自由に操る。戦闘中にも僕が魅了されてしまったら、自分で自分を斃す命令を拒否できない。そうなれば僕の負けだ。

でも僕には心術の素質がある。心術は精神系の資質だ。心術を持っていない人より精神攻撃魔法の耐性がある。鍛練を積みめば魅了無効化スキルもとれるかもしれない。

対サキュバス戦をみすえて、朝から昼までは実戦形式での風魔法の鍛練をしている。これはクレッサに手伝ってもらっていた。

風魔法で飛び上がり、風攻撃魔法を撃つ。魅了が使えるクレッサに魅了を放ってもらって、それを防御する。そして、隙を見て再び風魔法を放つ。その鍛練を魔素が少なくなるまで繰り返して続けている。

昼から実技鍛練所がはじまるまでは、図書館でさらなるサキュバスの研究だ。もう、総合鍛練所の図書館は使えないので、使っているのは祖父、母の父の図書館だ。

鑑定や風魔法の本は読みつくしてしまったこともあり、最近以前ほどその図書館に行っていない。もしかしたら何冊か関連本が残っているかもしれないが、自力であの大量の蔵書の中からそれを探すのは不可能に近い。

親切な司書のリサさんは、別の図書館に異動となつて今はいない。もしいたら読み逃している本を教えてください。でも今はサキュバスの調査研究が第一だ。図書館でサキュバスと魅了について書かれた本を次々と読んでいった。

サキュバス。蝙蝠のような黒い翼を持ち、黒く細く長い尾

を持つ淫魔。尾の先には魔素を貯める袋があり、その魔素を翼に回して空を飛ぶことができる。

サキュバスに限らず淫魔は人から精を吸収して力を増す。精さえとつていれば食物の摂取は必要ない。逆に食物だけとつていても生きながらえるが、それだけでは成長しない。だから、サキュバスは人を魅了し、人から精を奪い取るのだ。僕は空に浮かぶことができる。風魔法を使って僕自身を浮かすのだ。だが、それには多くの魔素を必要とする。一方サキュバスは風魔法ではなく種族の特性で飛んでいる。生まれついて持っている種族スキルなので魔素の消費量は少ない。それでも尾の魔素袋と翼がなくなれば飛ぶことはできない。なる。

そこから考えたのが反復鍛練している内容だ。

五階層まで風魔法で飛び上がり、顔を見せたサキュバスに対し風攻撃魔法を放って斃す。斃せなくても尾を切断して魔素の供給をなくす。それができなかつたとしても翼を傷つける。魅了の攻撃をかわしながら飛行用の魔素が切れる前にそれを行う。そうすれば僕の勝利だ。

でも、戦闘となれば相手も必死だろう。うまくいくとは限らない。それをうまくいくようにするために僕は努力するのだ。

この戦闘には僕に大きな利点がある。僕はこうやって戦略

をたて準備をしている。だがサキュバスはそれを知らない。戦闘をしかけられるとは思っていない。不意を突けば僕の勝率はドンとあがるだろう。

相手の魔眼にヒントを得て、僕も式目を使った。塔が見える街道沿いの木に式目を仕掛けたのだ。そこから塔を見張らせ、ときどき回収して動きを確認した。サキュバスの使う魔眼のように常時接続型にはしなかつたのは糸をたぐらせないようにするためだ。

そこで判ったことがある。サキュバスは父が塔に入るときと出るときに五階層の出窓まできて、父の馬車を見送っていた。塔全体を見ている式目の目なので、あれが本当に父にとり憑いているサキュバスなのか、はたまた別のモンスターなのかは判らなかつたが、遠目に見ても人型であることは間違いない。

同じような人型が父の出入りのたびに姿を見せる。偶然とは言えない。あれが対象のサキュバスとみていいだろう。

戦闘の日は次に父が塔を訪れる日だ。僕は父の周辺の人に鑑定スキルを使ってその日を割り出した。

父は夜中に塔に入った。僕は少し離れた街道から魔眼の糸を見ていた。父が塔に入ってから糸は見えない。おそらく

糸は塔の中で父とサキュバスの間につながっているのだろう。その糸が見えたら父が塔の外に出た合図だ。

夜明け前の街道は人影がほとんどない。先ほど一人の騎士が塔の中に入っていたきりだ。この時間ならサキュバスと空中戦をしても目立たないだろう。

と、急に糸があらわれた。僕は塔に向かって馬を走らせた。糸は塔の真下に伸びていたが、父の馬車が離れるにつれ徐々に斜めになっていく。

出窓には人型の姿がある。その出窓の下に馬を停め風魔法で飛び上がった。そして、五階層の高さで出窓の女に向かい風魔法の印を切って、動けなくなった。

出窓にいたのは人間の女性だった。背に黒い翼はない。女性にはなまめかしく笑いながら僕を見た。

『ステータス』

名前…シャリー・バウムフ??? 級位…5 体素…4

2 魔素…64 資質…話術、心術、魔術、芸術 スキル…魅了三位、精神支配一位、心地よい会話五位 ??? ? ? ?

名前はシャリー・バウムフ???からシャリー・バ????????とコロコロと変わっている。スキルも見えたり見えなかったりする。こんなことははじめてだ。

若い女はニコリと笑い僕の正面に立った。なぜこんなところ

ろに女に人がいるのだろう。ダンジョンにいたと言うことは冒険者なのだろうか。僕のイメージの中では冒険者はもつとがっちりしている。でも正面で僕を見て微笑んでいるのはとてもきれいで細身の女の人だった。それはまるで美の女神様のようなだ。

くつ。

僕は右足に痛みを感じた。激痛と言っているほどの痛みだ。右を見るとクレッサが僕に向かって風攻撃魔法の印を切っていた。

なぜクレッサは僕を攻撃しているのだろう。クレッサは敵になってしまったのだろうか。もしそうなら僕はクレッサと戦って、クレッサに勝たなければならない。

クレッサが敵になったことが信じられなくて、本当に攻撃されたのかを確認すべくもう一度右足を見た。足にはすり切れたような傷がありダラダラと血が流れている。そして、足の下にはなにもなく、僕は空中に立っていた。僕には翼がない。このままだと落ちてしまう。僕は助けを求めるように、僕の前で微笑んでいるシャリーさんに向かって両手を伸ばした。

シャリーさんは色気のある笑みのまま僕を助けようと空を飛び近寄ってきてくれた。その目はまっすぐに僕を見て

チリリ。

何かが頭の中で震えた。妖しく微笑むその目の奥に、何とも言えない違和感がある。

チリリ。

頭の中の震えは警告だ。何かがおかしい。

『モンスターステータス』

名前…イルフツシユネドゥコム 種族…サキュバス 級位…  
5 体素…4 2 魔素…6 4 資質…話術、心術、魔術、芸術  
スキル…魅了三位、精神支配一位、心地よい会話五位 擬  
態二位 種族スキル…飛行三位 吸精四位

僕は伸ばしていた手の形を変えた。

シ、シュツ。

右手からは首の左側に向かって、左手からは腰の横の尾に向かって、風の刃が飛んでいく。

近くまで来ていたサキュバスは目を丸くして驚き、回避行動をとった。だが、それは完全には間に合わず、風の刃は左の翼の先と尾の中ほどを切り裂いていた。

僕は背中を見せて塔の中に逃げ込もうとしているサキュバスに再び風攻撃魔法を放った。

放たれた風の刃は右の翼の付け根にあたった。翼を失ったサキュバスは真つ逆さまに地面へと堕ち、つぶれて息絶えた。

淫魔が堕ちたときの衝撃に驚いたのか、風呼が棹立ちになりいなないた。僕は興奮する風呼の横に降り立ち、やさしくたてがみをなでた。その僕の横ではクレッサが治癒魔法で僕の足を直してくれている。

「ありがとう、助けてくれて」

『相手は魅了を使うって知ってるんだから油断しちゃダメだよ』

サキュバスは女の人に擬態していた。父はその擬態に騙され、とり憑かれてしまったのだろう。

そして僕もその女の人の目を見た瞬間、サキュバスの魅了にかかり、精神を支配されてしまったのだ。

クレッサは僕の目を覚まそうと僕の右足を傷つけたのだ。クレッサがそうしてくれなかったら僕は殺されていただろう。クレッサには感謝してもしきれない。

『ありがとう、クレッサ。ありがとう』

クレッサは僕の足の手当てをしながらニコニコと笑っていた。

## ●七章 神殿の男と女

父はサキュバスの呪縛から逃れた。だが、以前のようにには戻らなかった。以前は精力的に人と話し、治療を行っていた。最近は出歩くことも少なくなり、治療も人任せにすることが

多くなったらしい。

妹は父と過ごす時間が増えたことを喜んでいた。だからサキユバス退治は少しは人を幸せに導いたと言っている。

サキユバスを斃してから二年間で僕の級位は上がった。

名前…フサト・フンフリヒト 級位…4 体素…38 魔素…41

僕ぐらいの歳の人のほとんどは級位が二だ。たまに三の人がいるくらいで、四の人はごくまれにしか見かけない。級位が四の人はミカエラさんぐらいから、そのちよつと上の人が多い。僕が若くして四になったのは、級位が五の淫魔を斃したからだろう。

この二年は級位が上がっただけでなく、スキルも上がっていた。

剣技は準二位から準三位になっている。乗馬は準二位の準がとれ、正式なスキル、それも四位になっていた。鑑定も四位で人物でもモンスターでもアイテムでも、その現在、過去、未来のかんりの事柄を見ることができるようになった。さらには何故か魅了のスキルも入手していた。もしかするとモンスターを斃すと相手が持っていたスキルを手に入れること

ができるのかもしれない。

暮らしての大きな変化は家を出たことだ。

ミカエラさんへの騎士の誓いをしてから、僕はミカエラさんと過ごすことが多くなった。ミカエラさんは主《あるじ》として僕にやさしくしてくれる。僕もミカエラさんを守るべく常に気にかけている。そうこうしているうちに二人の距離は近くなり、ミカエラさんは僕の子供を妊娠した。

当初、ミカエラさんは僕の子供を産むのを嫌がった。血の濃い間での妊娠は障害を持った子供が生まれる確率が高いからだ。

一般的にいとこ間にできた子は心配は少ないが、親子や兄弟、叔母と甥との間の子は心配されている。ミカエラさんは母の妹だ、でも母とは父親が違う。血の濃さで言えばミカエラさんと僕はいとこと同じくらいだ。そんなに心配するほどでもない。

それに、たとえ障害があつたとしても愛情をもって育てれば本人は幸せではないのか。僕はそう思うのだが、ミカエラさんは違う考えのようだった。だから僕は安心させるため、ミカエラさんと僕の未来を鑑定した。

ミカエラさんと僕の間にできる三人の子供たちには障害はなかった。その結果を伝えてもミカエラさんは不安のぬぐい切れないようだ。

「僕は誓いました。何があっても僕がミカエラさんを守ります。ミカエラさんの産む子供を守ります。何があってもミカエラさんと子供たちを幸せにします」

子供の誕生は人を幸せにする。そういうものだ。だからミカエラさんが僕の子を身ごもったとき、母にも幸せになってもらおうと、そのことを報告した。

だが、母の反応は予想外だった。母は急に不機嫌になりミカエラさんをのしり始めたのだ。ミカエラさんは何も悪くないのに頭をさげ、謝りつづけている。僕は騎士だ。偽物の騎士だけどミカエラさんを守る義務がある。

「ミカエラさんは悪くありません。だから謝らないでください。母様もミカエラさんを責めないでください。これは僕が望んだことなのです」

「この色気違いがっ。そんなにこの女がいいなら、あんたはそいつのところで暮らしな。あんたを置いていても、もうメリットはないんだから、この家からさっさとでていきな」

子供は人を幸せにする。そんな当たり前のことさえ僕にはできなかった。僕は妖精憑きだ。人を幸せに導かなければならない。でも母を幸せにできなかった。もっともっと。人を幸せにするために、もっともっと頑張らなくてはいけない。

僕は母の家を出た。そして今、ミカエラさんの家で暮らし

ている。それが母の望みだ。

ミカエラさんと暮らしてからしばらくたったころ、ユーリイから連絡がきた。ユーリイとカレンさんが結婚すること、そのパーティへの招待状だ。

結婚もそれだけで人を幸せにする。その日は実技鍛練所がある日だったが、僕は訳を話して休ませてもらった。

鍛練所の所長さんも、そういうことならとこころよく休ませてくれた。そのときの所長さんは笑顔だった。所長さんはユーリイもカレンさんも知らない。結婚はそんな人まで幸せにしてしまうのだ。

「次はフサトが結婚パーティを開く番だな」

所長さんはそう言って笑ったが、僕とミカエラさんは結婚することができない。この国のきまりでは叔母と甥は結婚できないのだ。

「ごめんなさい。僕たちは故あって結婚できないんです」

「そうか。なら子供が生まれたら、そのお祝いパーティだな」所長さんは一瞬顔を曇らせたがすぐに笑顔になって僕の肩をたたいた。

招待状には神殿で結婚の誓いを行い、隣の大広間でパーティをする、とあった。どうやらユーリイは神教徒だったらしい。

僕はミカエラさんの亡くなった父の正装を借り、馬で神殿に向かった。

神殿の前には馬車があふれていた、ユーリイは貴族様だ。カレンさんもそうなのだろう。貴族様や神教徒は付き合いを大事にする。結婚式には多くの人が参列するようだ。

参列する人はちゃんとした服を着ている。僕みたいにいかにも借り物と判るダボダボの服を着ている人はいない。僕は少し恥ずかしくなって、あまり会場の隅で目立たないように立っていた。

「フサト・フンフリヒト。君も来ていたのか」

急に声をかけられ、見上げるとそこにはユーリイの父が僕を見下ろしていた。

ユーリイの父は平民の僕がユーリイと友人関係であることをこころよく思っていない。僕は招待状を見せた。

「この度はおめでとうございます。ご招待にあずかりました。ありがとうございます」

僕が頭を下げると、ユーリイの父は「うむ」と言って去っていった。

僕のことをよく思っていない人に対してどう接すればいいのか、僕にはまだよく判らない。そういう人も幸せにするのも僕の使命なのだが、そこへたどり着くにはまだまだ遠い道のりだ。僕は苦笑いの顔になった。クレッサは僕の横でニ

コニコしていた。

神殿で誓い合うユーリイとカレンさんはとても素敵だった。白い正装が光り輝いていた。まさに神教徒が信じている神の子のようだった。

パーティーではとても豪華な食事が出された。今までに見たことも食べたこともないような料理だ。それに戸惑っているのは僕と僕ぐらいの若者の中の数人だけだ。きつとまどつているのは僕と同じ平民なのだろう。

食事をしながらパーティーは続く。合間合間に貴族様が入れ代わり立ち代わりユーリイとカレンさんを褒めたたえる。時々、統治の話もするが、みんな輝かしい未来を語っていた。だから僕の番がきたときも同じようにユーリイとカレンさんの輝かしい未来を語ることにした。

未来のことを語るのは得意だ。人物鑑定をして見えた未来を言えがいいのだから。

まずはおめでとうの挨拶をする。その後ユーリイとカレンさんの個人的な未来から楽しいこと嬉しいことを抜き出してはなす。統治については知識も興味もないから話はできない。でもユーリイは将来、代官になってこの街を統治する。だからその話をした。

パーティーが終わってほとんどの人は帰っていった。でも僕は残っていた。それは先ほどの誓いの場面が強烈だったからだ。だから神殿をずっと眺めていた。

誓いの場ではそこにいたすべての人が幸せを感じていた。中には至福のあまり涙を流した人もいたほどだ。みんなが幸せの極致にいたのだ。それは僕が目指している理想の風景だった。

「あれ、フンフリヒト君？」

また名を呼ばれた。見ると女の人が僕を見ている。その隣には怪訝な顔の男の人がいた。女の人は微笑みながら僕に近づいてきた。誰だろう。僕は女の人と男の人の名前を見た。

名前…リサ・バツハ

名前…シヨーン・セダーベルグ

女の人は五年前に祖父の図書館にいたりリサさんだった。男の人は記憶にない。僕は男の人を見た。なるほど、リサさんの婚約者らしい。

「どうしたの？　こんなところで」

「お久しぶりです。友人の結婚式に出ていました。バツハさんは式場の下見ですか」

リサさんは笑顔を見せるが僕の問いには答えない。

「彼はフンフリヒト君。前にいた図書館によく来ていた子。ほら、前に話したことあったでしょ、占いが得意な子のこと」

「セダーベルグです」

リサさんの紹介に、セダーベルグさんは胡散臭いようなものを見る目で僕を見ている。

「フサト・フンフリヒトです。バツハさんには子供のころお世話になりました」

「フンフリヒト君の言うとおりにしたらセダーベルグさんと再会したの。あのときはアドバイス、ありがとうね」

五年前と比べるとリサさんは楽しそうだし幸せそうだ。何を言ったかよく覚えていないが、僕の言葉で少しでも幸せに導くことができたのならうれしい。僕は頭を下げた。

「こちらこそ」

「でもね、もう一人の人にはまだ出会ってないみたい。ほら、転勤で私の運命を変える、関係が変わる人。その人にはいつ会えるか教えてくれる？」

リサさんの言っている意味が判らず、僕は助けを求めるようにクレッサを見た。

『新たな場所で新たな人間関係が始まります。あなたに影響を与える人は関係が変わる人です。関係が変わり人生に影響を与える人は二人います』

クレッサは僕を見ながらニコニコしている。

『五年半前にこの人にそう言った』

「関係の変わる二人の人」

僕は独り言のようにつぶやきリサさんを見た。

リサさんと最後に話した五年半前は鑑定ができるようになってすぐのころだ。そのころはまだ浅い鑑定しかできなかった。でも今は違う、鑑定をすればリサさんの未来は絵巻のように見えてくる。あまりにも見えすぎるので今は依頼がなければ人物鑑定はしていないが、リサさんは「教えてくれる？」と言った。それは鑑定の依頼と取れなくはない。

『ステータス』

人物鑑定で見える過去はくっきりとしている。未来は不確定だ。直近ははっきり見えるのだが、人によっては先の未来になるにつれぼやけてくることもある。ずっと明確に見えても、ある時期を境に突如として二重に見えたりかすむこともある。それはその時点がその人の人生の分岐点なのだろう。以前はぼやけて見える場面が多かった。だから結果を曖昧にしか伝えることができなかった。でも今はかなりの部分ははっきりと見える。

でも、伝えるのは曖昧な言葉を使っている。それは相手を傷つけないためであり、希望や喜びを与えるためだ。それに明確に伝えるより、ぼかして伝えたほうが相手に喜ばれたり

するからだ。だから今回の見えたそのままでは言わない。

「今の時点でバッハさんはその人と会っています。ですが、それがどの人か判るのは今から半年後です。それまで今日のことは忘れないでください」

「その人はセダーベルグさんより、大きな影響があったりするのかな」

セダーベルグさんはさらに胡散臭いものを見るような目で僕を見た。

「見てみます。すみませんが、ここに名前と生まれた日を書いてくれますか」

僕はポケットからメモ帳とペンを出し、セダーベルグさんに渡した。セダーベルグさん何も言わず書き始め、僕はそのセダーベルグさんの目だけを見ていた。

「生まれた日はそれでいいですか。一日後ではないですか」

その言葉に僕に向かって伸ばされた手が止まった。

「僕はこれが自分の生まれた日だと思っています」

「判りました。それならば問題ありません」

僕はメモ帳を受け取り、目をつむった。

『ステータス』

十年先までははっきりと見えた。その先は映像が二重になっている。だが、どちらにも傍らにはリサさんの姿がある。「シヨーン・セダーベルグさんはこれから先ずっとリサ・バ

ッハさんと一緒にいます。セダーベルグさんが決断の時期と対応を間違えなければ、お二人はこの先ずっと幸せにすごせるでしょう」

「ずいぶんといまいで、どうにでも取れる占い結果ですね」

僕は人に好かれ、人に嫌われる。それは判っている。さっきのパーティーでも僕のスピーチを喜んでくれた人もいたが、無関心の人もいた。中にはユーリーの父のように僕のことを、にらみつけている人もいた。妖精憑きの僕は全ての人を幸せに導くのが使命だ。すべての人に好かれるのが使命ではない。セダーベルグさんは僕を嫌う人なのだろう。それは僕にとつて悲しいことだがしかたない。

具体例を欲しがるなら、明確な映像を伝えよう。

「お二人の式の当日は朝から雨が降っています。雨用の靴と替えの靴下を持っていかないと後悔します。その雨は式の直前にあがります。二人は天からの祝福の光に包まれるでしょう。どうぞ、お幸せに」

僕は頭を下げた。リサさんとクレッサは笑っている。セダーベルグさんは表情のない顔で「覚えておきます」と言った。

## ● 八章 未来に群がる屍

ユーリーとカレンさんの結婚からしばらくして、ミカエラさんが男の子を生んだ。親バカかもしれないが、とても可愛

らしい子だ。

子供が生まれることに関して、母はよく思っていないが、この子は母にとつて孫、息子の息子になる。誕生を知らせないのも変な話だ。だから顔を見せに行つたのだが、子供の顔をチラッと見て「あつそ」と言っただけで、それからはこちらを見ようとしなかった。

この子供は父にとつても孫になる。母に知らせて父に知らせないのはおかしい。だから父にも顔を見せに行つた。父の姿を見るのは淫魔のとき以来だ。そのときから比べると父はかなり老けて見えた。疲れた顔で子供を見て「おめでとう」と言ってくれた。

ミカエラさんと父の間に面識があるのかないのかは知らない。僕もミカエラさんが母の妹であることは告げなかった。ミカエラさんも名乗らなかった。父はチラッと見ただけで表情を変えなかったから、面識はなかったのだろう。

その場にいた妹は子供のときと同じ明るい声で「兄さまそっくりでかわいらしいね」とはしゃいでいる。そういう割には視線は子供ではなくミカエラさんをとらえたままだ。でも、妹とミカエラさんは初対面のはずだ。何がそんなに気になるのだろう。

そのときの子ももう二歳だ。今ではミカエラさんの腕の中

にもう一人の子供がいる。それは僕とミカエラさんの間にできた女の子だ。その子はまだ母や父には見せていないが、生まれたことの連絡だけはした。それを聞きつけた妹が僕の住むミカエラさんの家にやってきて、娘の顔を見ていった。

「目のところはお姉さまに似ているね」と言っていたが、妹にとってミカエラさんは姉ではなく叔母だ。でも僕はその訂正をしなかった。その後も何度か妹はミカエラさんの家に顔を出すようになった。

ミカエラさんの家に来るのは妹だけではない。近所に住む人や隣町に住む人がときどきやってくる。そしてそのほとんどの人が僕に鑑定を依頼するのだ。何故、知らない人が僕が鑑定できることを知っているのか不思議だったが、どうやらユーリイかユーリイの結婚式に出た人から聞いたらしい。

カレンさんが男の子を生んで、それを僕が予言した。そういう話になっているみたいだ。

僕は予言したわけではなく鑑定しただけだ。それを予言と取る人がいるのだろう。

予言だろうと鑑定だろうと占いだろうと、結果が変わる訳ではないのでどうとってもらっても構わない。その人が思う言葉でとらえればいいのだ。

それをわざわざ「予言ではなく鑑定です」と訂正すれば気まずい思いをさせるだけだ。それはその人の幸せを少なくともす

ることになる。

僕は妖精憑きだ。だから人を幸せにしなければならない。そんな僕が人から幸せを奪うことはできない。

僕の級位は四からあがっていない。でも魔素量はちよつとだけ増えた。今まで体素や魔素の量が増えたのは級位があがったときだけだったので、そういうものかと思っていたのだが、そうではないようだ。

今のスキルは剣技が準四位になっている。だがそれ以上は伸びない。いくら鍛練してももう技量があがらない。それどころか鍛練をサボると技量が減っていくような感じがする。素質のない人には準四位が限界なのかもしれない。

鑑定と乗馬はずっと四位のままで変わりが無い。でも、こっちは少しずつ技量があがっているようだ。

風魔法も最近四位に上がった。今では木刀に風魔法をまわせ威力を増すこともできるようになった。

実技鍛練所の仕事はまだしている。ミカエラさんの家に引っ越してからは、鍛練所には馬で通っている。子供が生まれたので、馬から馬車に変えてはどうかという人な人に言われたが、偽とはいえ騎士が馬車では格好がつかない。それに馬車をあやつるには馭者のスキルを取らなければならない。

乗馬のスキルを取るための鍛練所の費用は治療院のエバートさんが出してくれた。もしかしたら馭者の鍛練所の費用もエバートさんが出してくれるかもしれないが、子供がいる身で人の金をあてにするような真似はしたくない。

ミカエラさんは馭者の準スキルを持っているので、どうしても必要なときは馬車を借りてミカエラさんが馭するか、乗り合いの馬車を使っている。

実技鍛練所の仕事は、夕方から夜までが一日。昼前から夜までが二日。また、夕方から夜までが二日。休みが二日の繰り返しだ。あいてる朝と昼は子供のめんどうをみながら庭や裏山で風魔法の鍛練をしていた。

でもちょっと前から鑑定希望の人がその時間に来るようになって鍛練の時間がとりにくくなってきた。乗馬仲間のドレイクさんに相談したら、鑑定の日と時間を決めればいいと提案してくれた。それで今では休みの日の昼から夕方是一家にいて庭で剣技の鍛練をしながら鑑定希望の人の相手をしている。

鑑定の日は決めたが、それを知らない人は休みでない日にも来てしまう。でも追い返したりしない。せっかく来てくれたのだから、少しでも幸せになって帰ってもらいたい。

来る人は本人が希望してきているので魔素を使って詳細に鑑定している。鑑定の鍛練になるのでとてもありがたい。

ありがたくて、ときどき魔素を使いすぎて疲れてしまうほどだ。その辺の管理をうまくこなすのが今の僕の課題だ。

僕が鑑定しているときは近所の人の子供をみていてくれたりする。実技鍛練所のお給金は少ないので子供のためにもミカエラさんが働かないといけない。子連れでの仕事は大変なので、面倒を見ってくれる人がいるのは非常にありがたい。

この頃の生活は、朝は裏山で風魔法の鍛練。昼前から実技鍛練所の仕事があるときはそっちに行って、夕方からのときは時間になるまで庭で剣術の鍛練。休みの日は昼前から夕方までを鑑定の時間とした。そして、夜はミカエラさんと一緒にゆつくり子供と遊んでいる。

ミカエラさんの家は母の家と違って山のすぐ近くにある。家の裏はもう山の一部と言っているほどだ。庭も広く、隣の家とも距離がある。だから風魔法の鍛練にはうってつけだ。多少、強い風を吹かせても敷地から出るころには弱くなっている。大魔法だと敷地の外まで影響してしまうが、そんな大魔法を使いたい時は裏山に登ってそこで鍛練している。でもそんな魔法は魔素をものすごく消費するので何度も行いうことはできない。

裏山には鳥や獣が棲んでいる。里の近くにはあまりこないが山の奥にはオークやゴブリンもいる。ボア系の獣はその肉

を食べる人もいる。

オークやゴブリンはハンターが狩ると報酬がもらえる。僕はハンター登録をしていないので報酬金はもらえない。でもドレイクさんの知り合いにハンターがいてその人を紹介してもらった。

風魔法で狩ったボアや魔物の死体をそのハンターに届ける。そうすると肉を売った代金や報酬金の一部をくれる。ときにはさばいたボアの肉を一塊くれたりする。収入の少ない僕にはありがたい限りだ。

物をくれるのはハンターのジャグドさんだけではない。鑑定依頼に来る人たちも食べ物を持ってくる。以前にお金を渡してきた人がいて、断ったらそれから「うちでとれた」と言ってお菓子をくれたりする。僕は鑑定スキルの鍛練のためにやっているのに、物までもらって申し訳ない。

下の子がハイハイできるようになった蒸し暑い日、妹が友達二人を連れてやってきた。一人は子供のころからの妹の友人で、もう一人は知らない人だ。

妹の「友達を連れてきちゃった」のあとに、僕は赤い髪の女の子に向かってニコリと笑った。

「キャナリー・ヴァイデストロームさんですね。以前、父と

妹と三人で食事をしているときにお会いしましたね」

妹とヴァイデストロームさんはきよとした目をしている。ふたりは首をかしげながら「そんなことあったっけ」「全然覚えてない」と言い合っている。

「家具工房のとなりの煉瓦造りのレストランです。今日と同じように蒸し暑い日でした。あのときは窓越しにごあいさつしたのでこうしてお話するのは今日が初めてです」

「そう言えばそんなことがあったような、なかったような」「私は全然覚えてないけど。兄さまはよく覚えてるね」

「そのときナナは『一番の友達』と言いました。妹の一番の友達がとても可愛らしい女の子でしたので、ずっと心に残ったのです」

ヴァイデストロームさんともう一人の友人アドヴァイチブリックさんは、僕が人物鑑定をしているのを妹から聞きつけてきたらしい。鑑定依頼の人は年上の人が多い。だから若い三人の女性の姿はミカエラさんの家に集う人たちの中で目立っていた。

鑑定希望の人には二通りの人がいる。鑑定が終わったらすぐ帰る人としばらく残ってみんなと話していく人だ。残る人は近所の人や何度も来ている人に多い。

玄関を兼ねた土間や土間からつながる客間でお茶を飲ん

だりお菓子を食べたりしている。そして、子供たちの相手もしてくれている。

お茶やお菓子は誰かが持ってきてみんなに配っているようだ。慣れた手つきで下の子をあやしているヴァイデストロームさんにもお菓子を勧めている。みんな楽しそうにしているので人々を幸せにするのが使命の僕も、とてもうれしい。

「お袋。ここにいるのかっ」

僕の母と同じくらいの歳の男の人が大きな声を出しながら庭に入ってきた。

ミカエラさんの家は大きい。庭に面した側が通しの廊下になっていて、その廊下に沿って部屋がいくつもある。部屋と部屋の間、部屋と廊下、廊下と庭の間は引き戸で仕切られているが、今日のような暑い日はすべて開け放ち、風が入るようになっていいる。だからどの部屋から、庭が見えるようになっていた。

今、ここにいるのは年寄りの女性が四人と年寄りの男性が二人。この六人が客間でお茶を飲んでいる。隣の部屋には妹と妹の友達たち、そして二人の子供がいる。廊下には僕の父と同じくらいの歳の女性が鑑定の順番を待っていて、鑑定中なのはその女の人の連れだ。

男の人は母親を探している。口調からして緊急の用件だろ

う。僕は男の人の名前を見た。

ジャン・ボウグスタッド 資質…魔術、体術、技術、智術  
探しているのが母親なら探し人は客間にいるちよつと大柄な女の人だろう。

「おう、ジャン坊か。そうしたんだ、あわてて」

そう声をかけたのは年寄りの男の人だ。その人もボウグスタッドさんだ。女のボウグスタッドさんの結婚相手の弟にあたる人になる。僕は鑑定中の女の人に断って居間に移動した。「お袋、帰るぞ。こんなところにいるな。叔父さんも早く帰ったほうがいいよ」

ジャンさんは客間にテレサ・ボウグスタッドさんとトーマス・ボウグスタッドさんを見つけ、険しい顔で叫んでいる。「どうしたの。マーちゃんに何かあったの？」

驚いた表情でテレサさんが孫、ジャンさんの息子の心配をするが、それは的外れだ。僕は子供たちと妹たちを部屋の奥に追いやり、ジャンさんとの間に分け入った。

興奮している人は獣と同じだ。いや、変に知能がある分、獣よりたちが悪い。魔物と同じくらい厄介だ。急に暴れ出さないとはい限らない。

僕はミカエラさんの騎士だ。偽物の騎士だがミカエラさんとミカエラさんの子供を守る義務がある。

「いい息子さんですね。テレサさんが怪しい男のところにい

るのが心配で駆けつけてくれたんですよ」

テレサさんに声をかける僕をジャンさんは睨みつけている。

鑑定に来るほとんどの人は僕のことを占い師だと思っている。そして占い師は一部の人に「胡散臭い人種」と思われている。ジャンさんは母親が胡散臭い男のところに入り浸っているのが心配なのだ。

その心配の本当のところは母が財産を巻き上げられることで、母親自体の心配ではない。だからテレサさんが元気なことが判っても僕を睨みつけているのだ。

「こんなところにいんなつ。帰るぞ」

廊下に入り込み、手を引っ張って外に連れ出そうとするジャンさんに、テレサさんはオタオタするだけだ。

「ジャンさん、テレサさんは手を引いてあげなくてもちゃんと歩けますよ。テレサさん、今日は帰ったほうがいいです。」

トーマスさん、トーマスさんも一緒に送ってあげてください」トーマスさんは苦笑しながら、テレサさんは引つ張られながら、ジャンさんは怒った顔でミカエラさんの家から出ていった。

「何なの、あれ」

妹が目丸くして三人の後姿を見ている。

「僕がお年寄りをだまして金を巻き上げていると思ったの

でしょう」

「兄さまはそんなことをしているの？」

「このお菓子もお茶も、鑑定に来たみなさんが持ってきてくれたのですよ」

「ごめんなさい。私、占ってもらったのに何も持ってきてませんでした」

ヴァイデストロームさんが頭を下げた。

六日後、ヴァイデストロームさんが「今、流行っているお菓子」と言って菓子折りを持って訪ねてきた。それをみんなで食べていたとき、ジャンさんも「先日はお騒がせしました」と言って同じ菓子折りを持って来た。

確かに小さくて丸い焼き菓子が流行っているらしい。

## ●九章 忘却と樂園

祖父、母の父が亡くなった。僕にその話が届いたのは、葬儀が終わった後だった。

風呼が死んだ。しばらく前から具合が悪く、変な咳をしたり、足を引きずったりしていた。だからドレイクさんに診てもらったり、クレッサに治療魔法をかけてもらったりしたが、効果なくあっけなく逝ってしまった。きっと、寿命だったのだろう。

風呼がミカエラさんのところに来てから十六年になる。馬の寿命として長生きなのか短命なのかは判らない。

馬を失った僕は、ミカエラさんの馬を譲り受けた。今度の馬には名前はなかった。僕も「馬」と呼んでいる。ミカエラさんは近所の人から古い小型の馬車をもらって使っている。子供が小さいので馬より馬車のほうが楽と言っている。

子供たちも大きくなった。上の子はいたずら盛りだ。いつも元気に走り回っている。ミカエラさんの広い家が狭く感じるほどだ。その様子を見たジャンさんとリサさんが近くの広い家を貸してもらるように動いてくれている。

鑑定をしてほしいと訪ねてくる人もかなり増えてきた。その場所としても使えるほどの広い家らしい。

今の僕の級位は六だ。裏山で魔物を狩るようになってから伸びが早い。級位の伸びは戦闘勝利に比例するようだ。

スキルも鑑定が六位、魔法が五位、乗馬は四位のまま。魅了が三位になった。剣技は相変わらず準四位のままだ。

働いている実技鍛練所の所長さんから、指導官として独立しないかと言われたが断った。剣技は準スキルしか持っていないから、教えることはできない。もしかしたら独立は名目で、いつまでもスキルアップしない僕に嫌気がさして、僕を

やめさせたいのかもしれない。

僕には守るべきミカエラさんと子供たちがいる。働き先を失ったら生活が苦しくなってしまう。これからも働かせてもらえるように頭を下げた。所長さんは笑っていたが、僕が働き続けることで不幸になるのなら、僕はやめなければならない。妖精憑きの僕は人を幸せにしなければならないのだから。実技鍛練所をやめたときのことを考えておいたほうがいいだろう。

生きていく上に絶対に必要なことは食べることだ。食べるという点では農作業が一番いい。この頃はジャンさんに教えてもらいながら、庭で野菜を育てている。オクブヘンさんは余った土地をいっぱい持っているらしいから、そこを借りることができるか聞いてみよう。

でも、僕は農作業に結びつくような資質を持っていない。他に僕に合う仕事がないか何人かに聞いてみた。ドレイクさんはドレイクさんの厩舎で馬丁をやらないかと誘ってくれた。でも、今はドレイクさんの厩舎は経営が苦しそうだ。そんなところに素人の僕が行ったら、迷惑をかけてしまう。

獣や魔物の肉を売ってもらっているハンターのジャグドさんはハンター登録をすすめてきた。正直な話、ハンターだけでは生計は立てられないらしい。だけど、狩ることができただけでも自分で売れば小遣い稼ぎにはなるだろう。

聞くと、ハンター登録は簡単な質問に答えればいいだけのようだ。登録しておいて無駄になることはないと言われたので、手続きの仕方を教えてもらった。

今は仲介を頼んでいるので「そんなことしたら取り分が少なくなってしまう。いいのですか」と尋ねたら、「もう歳だから引退するつもりなんだ」と返された。

「俺の後はフサトが継いでくれ」

そう言いながら淋しそうに笑っていた。

そんなとき、久々にエバートさんから連絡が入った。エバートさんも引退を考えているらしい。今後の打ち合わせに、後継者と共に来ると言った。

僕には打ち合わせることはないが、エバートさんが望むなら、会うのは問題ない。だけど、わざわざ来てもらうのは恐縮なので実技鍛練所に行く前に父の治療院に寄った。

父は治療院にいなかった。最近はまだ治療院に来ないらしい。

エバートさんは前にあったときよりかなり歳を取ったように見えた。僕の大叔父、父の父の弟の話をしてきたが、僕には何のことか判らなかつた。ひとしきり話を聞かされた後に意見を求められたが、話が判らないので判断のつきようがない。「よく判らないので、みんなが幸せになるようにしてください」とだけ答えておいた。

後継者の人はミカエラさんと同じくらいの歳の男の人だった。その人は僕の答えに嬉しそうな顔をしていたので、きつと、いいようにしてくれるだろう。

結局、実技鍛練所はやめずに済んだ。ただ、行く日は少なくなった。朝から夜までの日が二日。一日休んで、夕方から夜までが一日。三日休み。この繰り返しだ。

休みが増えた分、もらえるお給金は減った。その分はボアやディアを狩って得たお金でまかっている。

ハンターギルドに尻尾を持つていくとお金がもらえる。さばいた肉は食堂が買ってくれる。どちらもジャグドさんが紹介してくれたところだ。

実技鍛練所は七日周期。この七日周期のうちに二頭のボアを仕留めることができれば減った分のお給金を補える。でも、そんなに斃せることはまずない。そもそもそんなに魔物には出会わない。裏の山でボアを見かけるのは五日に一度くらいで、ディアを見かけるのは二十日に一度くらいだ。

ユーリイとカレンさんの間に二人目の子供が生まれて、鑑定希望の人がどっと増えた。鑑定の日は朝から夕方まで誰かしら来ている。鑑定の日は二日ともミカエラさんの仕事が休みの日だが、これではミカエラさんが休めない。

このごろ、よく来るようになったリサさんとジャンさんの奥さんがそれを見かねて鑑定希望の日との調整をしてくれている。

エバートさんや後継者の人を巻き込んで、坂の下の大きな家が借りてくれた。そのお金はエバートさんが出してくれるらしい。エバートさんが何故そこまでしてくれるのかは不明だ。エバートさんに聞いても「それが私の仕事です」と言うだけだ。

坂の下の家ではジャンさんの奥さんが、ミカエラさんの子供たちの面倒を見てくれることになった。子供二人だけだともったいないので、近所の子も同時に何人か見るとのことだ。鑑定もその家でやれば子供の面倒を見ながら過ごせる。だからそうすうよう勧められた。みんな僕のためにいろいろ考えてくれる。僕はそんなみんなを幸せにしなければならい。

坂の下の家の改装が終わったころ、エバートさんが亡くなった。僕はその話を妹と後継者の男の人から聞いた。お葬式は奥さんと子供だけで済ませたらしく、僕の知り合いは誰も参加しなかった。

人は死ぬ。馬も死ぬ。魔物も死ぬ。

祖父、母の父は図書館をつくった。多くの人がその図書館

の本を読んだり、勉強したりしている。祖父が亡くなった後もそれは変わらない。

エバートさんは僕のためにいろんなお金を出してくれた。今、僕が実技鍛練所で働いているのもそのおかげだ。これから、坂の下の家で子供の面倒を見ることができるようのおかげだ。エバートさんが亡くなってもそれは変わらない。

風呼は僕とミカエラさんを引き合わせてくれた。風呼がいなければミカエラさんと僕の間に子供が生まれることもなかっただろう。でも、今、ここにはミカエラさんと二人の子供が幸せそうに笑っている。風呼が死んでもそれは変わらない。

何年か前、サキュバスが死んだ。僕が斃した。淫魔が死んで父は元気がなくなった。父は変わってしまった。

人や馬が死んでも、幸せは残る。魔物が死ぬと不幸がやってくる。それが人や獣と魔物の差なのかもしれない。

僕は妖精憑きだ。人を幸せにしなければならない。僕が死んだ後も人が幸せのままにいるようにしなければならない。それは妖精憑きとして当然のことだ。人として当然のことなのだ。

全ての人が幸せに過ごす楽園。この世に楽園を作るのが僕の使命なのだ。

## ●十章 日常に潜む恐怖

ユーリイは代官になった。カレンさんは双子を産んだ。これでユーリイとカレンさんの間にできた子は四人になった。カレンさんが双子を産む一年前、ちょうどユーリイが代官になったときミカエラさんが三人目の子供を産んだ。

上の子供は基礎学習所に通い始めた。下の子供二人は、昼間は坂の下の家で、ジャンさんの奥さんとヴァイデストロームさんが面倒を見てくれている。そこには近所の子供が十人ほどきていて、僕の下の子供二人といつも一緒に遊んでいる。僕は実技鍛練所にはほとんど行かなくなった。五日休んで、二日行くだけだ。お給金は減ったが、鑑定希望の人がいろいろ持ってきてくれるおかげで、何とか生活はできている。鑑定希望の人はかなり増えた。その人たちの取りまとめをリサさんが手伝ってくれている。

実技鍛練所に行かない日は昼過ぎから夕方までずっと坂の下の家で人物鑑定をしている。ときどき夕方まででは終わりに切らずに夜までかかってしまうことがある。そんな様子を見て、セダーベルグさんやリサさんが鑑定のし過ぎを心配してくれた。そして二人の提案で、夕方にみんなの前で話をすることにした。

僕はみんなを幸せにしたいってことや、どうなったら幸せになるかみんなで探しましょうといった話だ。当たり前のこ

としか話さないのだが、みんなは喜んでくれる。中には鑑定を希望しないでその話だけを聞きに来る人もいた。

最近になって鑑定に使う魔素の量が少なくて済むようになった。全体の魔素量も増えて今では百を超えている。以前だったら魔素を使い果たして夜まで鑑定することはできなかっただろう。魔素に余裕ができたのは僕の級位が九に上がったことが影響していた。

鑑定をしているといろんな世間話が聞こえてくる。中で気になるのがコボルトとゴブリンの台頭だ。最近のコボルトやゴブリンは人間のふりをして街中に溶け込んでいるらしい。何匹かのグループで棲み家を構え、人目が少ないところで人を襲うとのことだ。

淫魔は人に化け、父に近づきたぶらかした。高位の魔物は人に化けることができる。僕はモンスター鑑定ができるので見破ることができたが、鑑定スキルがない人は騙されてしまうだろう。

スキルがなくても察しのいい人は怪しいと気づくらしい。そのことを衛兵に伝えても討伐はしてくれないそうだ。でも監視だけはしてくれるらしい。

なぜ討伐しないかと言うと、それは今の領主様が業突張りだから。そんな噂が出回っていると何人もの人が言っていた。領主様が恐れているのは年貢が減ることだ。

人に化けて暮らす魔物は、普段は人と同じような生活をしている。人として働き、買い物をし、年貢を納める。年貢が増えれば領主様は嬉しい。だから魔物を放置するのだ。

ところが魔物は陰で人を不幸にする。人が不幸になっても幸せになっても年貢は変わらない。領主様は人の不幸より年貢の総額を気にする。人の不幸で自分が不幸になることはないが、魔物分の年貢が減れば自分が不幸になるのだから。

僕は妖精憑きだ。領主様の幸せだけを見て他の人の不幸を見逃す訳にはいかない。領主様も他の人も、総ての人を幸せにしなければならぬ。どこかにみんなが幸せになる方法があるはずだ。それを探し、実行するのが僕の役目だ。

それからの僕は実技鍛錬所に行くときや帰るとき、行きかう人を注意して見るようにした。鑑定に来る人からも話を聞いた。魔物と接触があった人の鑑定はその人の未来鑑定のついでに、魔物のことも鑑定したりした。そうやって二匹のコボルトと三匹ゴブリンを特定した。

特定しても討伐はしない。今はやつらを観察し、領主様も人々もどちらも幸せになる手段を探るのだ。

コボルトとゴブリンはいがみ合っているようだ。どちらも魔物なのに種族が違っていると連携するどころか敵対視している。それは僕らにとっていいことだ。互いに攻撃しあって、相討

ちになって共に滅んでくれれば言うことない。

僕はその不仲を利用することにした。そのために判明しているコボルトとゴブリンを徹底的に調べ上げた。魔物たちのねぐら。そこからコボルトが集う巣を見つけた。ゴブリンが集まる河原の洞窟を見つけた。コボルトは全部で何匹か。ゴブリンは何匹か。普段何をしているか。それらを調べ上げた。その答えを基に二種属の確執を広げるのだ。

コボルトが巣にしている家に風魔法を放ち窓を壊す。ゴブリンが単独で歩いているところを見計らって遠くから風魔法で攻撃する。

まだ魔物を斃すことはしない。領主様を喜ばす手立てが見つかっていないからだ。斃さずに、腕がしばらく使えない、何日間か歩けない、そんな程度の怪我にとどめていた。そして、コボルトへの襲撃現場にはゴブリンの痕跡を、ゴブリンの現場にはコボルトの痕跡をわざと残しておいた。

そしてその後は僕の思惑通りコボルトとゴブリンは互いに互いを攻撃し始めた。

コボルトは短刀を使うことが多い。片手剣を使うやつもある。それと雷系の短杖だ。

ゴブリンはもっぱらナイフと棍棒だ。ゴブリンリーダーは雷を放つ魔道具を持っている。

そう、コボルトは魔法を使えるが、ゴブリンは魔法を使え

ないのだ。そこからも判るようにゴブリンのほうが低能で劣っている。戦闘方法も集団で取り囲み殴るだけだ。

一方コボルトは戦略を立ててくる。罠を仕掛けるか、待ち伏せの闇討ちが中心だ。それもゴブリンが集団にいるときは手を出さない。単体行動か、多くても二匹のときだけ襲い掛かるのだ。そして、自分たちは常に三匹以上の複数で行動していた。さらに、コボルトリーダーは巣の中に籠って、外に出ることは一切なかった。

戦い方の違いはリーダーの資質の違いだろう。戦略を立てることができるコボルト側が優勢だ。それが時がたつにつれ明確にあらわれてくる。共倒れを期待したが、そうはうまくいかない。

でも、作戦が失敗した訳ではない。ゴブリンはほぼ壊滅状態だ。コボルトも多少の被害を受けている。魔物が減ったのは人にとっていいことだ。

領主様も喜びそうなことを見つけ、僕は最終行動を起こすことにした。コボルトの巣に奇襲を仕掛けるのだ。

コボルトの級位は三か四か五。僕の級位は九。リーダーがいくつか判らないのが不安要素だが、手下には負けない。級位だけで勝負が決まる訳ではないが、持っているスキルを比べても僕の勝利は堅い。よっぽどの油断をしない限り負けな

い。僕は油断するつもりはない。だから僕は負けない。

「こんばんは」

坂の下の家での夕方の説法をおえた後、河原で馬を走らせた。そしてその後コボルトの巣に向かった。そこは街はずれにある四角い家だ。目立たないようにするため、馬は離れた共同馬留に繋ぎ、歩いて門の前まで来ている。胸の前でたすき掛けにした布のかばんには鉄の板が入っている。それは防具の代わりだ。武器として携帯しているのはナイフだ。ナイフはいつもゴブリンが使っているものに似たものを用意した。

「こんばんは」

返事がないので二回声をかけた。それでも返事はなく三回目声掛けを行おうとしたとき、ガチャリと門が開いた。

「何の用だ」

背の高いオスのコボルトが門の中から尋ねてくる。その後ろにはもう一匹いて僕を見ている。ここにいるのはコボルトだ。だけでも念のためモンスター鑑定をかけた。

鑑定結果は二匹とも級位三のコボルトだ。

僕はにっこり笑いお辞儀をした。

ブスッ。

僕はお辞儀をしたままコボルトにとびかかり、左胸にナイ

フを突き刺した。そしてスルツと回転し、ただ茫然と立っているだけの後ろのコボルトの喉を突き、刃を右に滑らせた。

コボルトの心臓は人と同じで左胸にある。そして、コボルトにとっても心臓は急所だ。喉も急所で、さらに言えば首の左もそうだ。

二匹のコボルトは声も立てずに斃れた。僕は急いで門を閉めた。

なるべく音を立てないようにしたつもりだったが、それでも中のコボルトは異変に気付いたらしい。何匹かがキャンキャンと吠えている。

今日はコボルトたちの集まりの日だ。七日に一度、コボルトたちは全員、この巣に集まる。この二十日間でゴブリンに三匹斃されたから、今日、ここにいるのはコボルトリーダーを入れて九匹になる。二匹は僕の足元で血を流している。残り七匹だ。

僕は巣の中へと侵入した。

巣の部屋は広かった。その分、部屋数は多くないようだ。机と椅子が四つとソファアがある、その周りで五匹が入ってきた僕を見て目つきを陰しくしている。

「モンスターステータス」

顔つきからコボルトであることは明らかだが、ここでも鑑定をしておく。

級位三が一匹。四が三匹。五が一匹。

「なんだお前は」

部屋の奥にいる級位五がしゃがれ声で叫んでいる。

「みなさんにお願いがあつてきました」

僕はにつこり微笑んだ。隣でクレツサもニコニコしている。

だが、クレツサの手は風魔法の印になっていた。

「おねがいだと。血だらけの服でふざけたことをほざくな」

級位五が短杖を僕に向けた。

ドンッ。

短杖が向けられると同時に雷攻撃魔法が放たれた。無詠唱だ。もしかしたら僕みたいに関心の中で唱えているのかもしれないが、そうだったとしたらものすごい高速詠唱だ。

ドン。ドンッ。

級位五が立て続けに魔法を放つ。僕はそれをよけながら、一番近くにいる級位四のコボルトにとびかかり、目にナイフを突き立てた。

雷は音よりも速く進む。音を聞いてから動いたのでは間に合わない。光った瞬間に避けないと当たってしまう。それが雷魔法の恐ろしいところだ。

僕がよけ続けられるのは、門に入る前にクレツサが掛けてくれた俊敏性上昇の風補助魔法のおかげだ。それと、雷をもそれら高度な風防御魔法を放ってくれているからだ。そのど

ちらがなかったら雷は僕に当たっているだろう。

目のナイフを引き抜く。目玉が刃についてきてしまった。それには構わず右に飛んで級位三の足のつけねを切り裂く。それと同時に左手で風魔法の印を切る。

「破ッ」

三日月型の風の刃が左の級位四の首にめり込む。

ドン。ドン。

級位五は雷魔法を放ち続けている。三匹目の級位四も、それを見て短杖を取り出そうとしている。

「破ッ。破ッ」

級位四に向かって風の刃を二連発。一発は外れて一発は右肩に当たる。

「破ッ。破ッ」

一発は級位四の顔に向けて。もう一発は級位五に向けて。四への刃は四の右目に当たり目を傷つける。四までは少し距離があるせいだろうか、それとも四にかけているゴーグルの防御力が高かったのか、切り裂くまではいかなかったようだ。そして、五への刃も頬をかすめただけだった。

「ぐぬぬぬ」

級位五は籠った笑い声を発しながら、左手の甲で頬の血をぬぐった。

「ぐぬぬ」

そして、その血を見てもう一度笑った。

僕はその隙を見逃さなかった。僕から目を離すとは、賢そうに見えてもやはり魔物は愚かだ。僕は級位四にとどめを刺すべく空中を跳んだ。

グサッ。ドン。

ナイフが心臓に突き刺さる音と共に、雷魔法の音が聞こえた。

僕も愚かだ。背後で雷の音を聞いてしまった。雷は音より先に届く。光ったのを見てよけなければならない。それに空中ではよけることはできない。

級位四にとびかかるとき、僕は五から目を離してしまった。五はその隙を見逃さなかったのだ。

クレッサが雷をはじめてくれなかったら、太腿の肉が焼けただれる程度では済まなかっただろう。

ナイフで心臓を刺された四は力なく僕にのしかかってきた。その四を楯代わりにして僕は五に正対した。

五は続けさまに雷魔法を撃ってくる。でもすべての雷は四の死骸が受け止めている。クレッサもわざわざそらすことはしていない。死骸が雷を受けるたびにまるで生きているかのようにピクツと動くのが気持ち悪い。

僕は死骸を肩で担いで一步一步、五に近づく。五も楯の隙間を狙うように回り込むようにして近づいてくる。もう少し

で手が届くというところで僕は死骸を手放し宙に舞った。

それを見た五が嗤ったように見えた。空中では方向を変えられない。僕が同じ間違いをしたと思ったのだろう。そして口元に嘲りの色を残したまま僕に短杖を向けた。

「跳ッ」

ドン。

足元に向かって浮遊跳躍の風魔法を放つ。雷は体の下を通り抜けていく。僕の体は速度をあげて宙を跳び、くるっと回って五の背後に降り立つ。

グザッ。

ナイフが五の左首を切り裂く。五の首からは噴水のように血しぶきが飛び散った。

この巢にいるコボルトは九匹。門に二匹。この部屋に五匹。残りはあの奥の部屋にいるコボルトリーダーとコボルトウォーリアーだ。

足のつけねを切った級位三は傷が浅かったのかまだビクビク動いている。僕は音もたてずに近づいた。そして首の上からナイフをあて、そのナイフを踏み、体重をかけて首を切り落とした。

その首を持って奥の部屋への扉の横の壁にはりつく。ノック。しばらく待つが返事はない。だが、扉に近づく足音は聞こえる。再びノック。

「状況は？」

こもった声がする。

「斃しました」

しゃがれた小声で返事をする。と、扉が少し開いた。僕はその隙間から見えるように切り取った首を突き出し、すぐにひっこめた。

「ウイグリーイルか。他の奴は？」

扉がもう少し開き、つま先が見えた。

『モンスターステータス』

やはり級位五のコボルトウォーリアーだ。

「他は、だい、やられ、ま、した」

息も絶え絶えを装って答える。扉がさらに開いた。僕は再び首を前に突き出し、そして手を離れた。

目の前の見知った顔が急に倒れる。そのときの反応として、ほとんどの人は固まるだろう。その隙を利用して攻撃しようとしたのだが、コボルトウォーリアーは違った。扉を開けて、前に飛び出してきたのだ。

「ウイグリーッ」

そう叫びながら落ちる首に手を伸ばし、そこで級位三のウイグリーイルが首だけであることに気がついたのだ。

グザッ。

左脇から心臓に向かってナイフを刺す。

ズッ。ズバツ。ガツ。

ナイフは短い。心臓に届かないかもしれない。すばやく引き抜き、首の左を切りつける。だが、頸椎にあたってしまったらしく、切り裂くことはできなかった。

僕は首からナイフを抜き取り、級位三に向かって手を伸ばしているコボルトウォーリアーをまたいで、奥の部屋に入った。広くないその部屋には、それがいた。

それは左手に鞘に入った剣を持っていた。そして、部屋に入ってくる僕を見て薄ら笑いを浮かべていた。

『モンスターステータス』

名前…シヨーゼイ・ゲルトホルツ 級位…7 体素…79

魔素…69 資質…武術、治術、魔術、話術 スキル…剣技

二位、雷攻撃魔法一位、威圧五位 恫喝六位 ???

人だ。コボルトではない。何故ここに人がいるのか。コボルトリーダーはどこへ行ったのか。

「ステータス」

名前…シヨーゼイ・ゲルトホルツ 級位…7 スキル…剣

技二位、雷攻撃魔法一位、威圧五位 恫喝六位 偽装七位

構成情報…常に人を欺き恐怖で支配する

偽装。欺く。

「モンスターステータス・レベルナイン」

名前…グノエスグナファスミク 種族…コボルト（地位…

リーダー） 級位…7 スキル…剣技二位、雷攻撃魔法一位、

威圧五位 恫喝六位 偽装七位 擬態七位 構成情報…常に

人を欺き恐怖で支配する

サキュバスもそうだった。魔物の中には人に擬態し、ステータスを偽装するやつがいる。それを見破るには魔素を大量に消費し、偽装より高位の鑑定をしなければならない。

「俺の仲間に斬りかかっておいて、俺をモンスター扱いかつ、ためえのほうがよくばどモンスターだろうがっ」

その声に部屋がふるえる。威圧スキルと恫喝スキルの効果だろう。その力に委縮してしまう。きつとそれがコボルトリーダーの戦法なのだ。委縮させひるんだ隙に攻撃してくるのだ。

僕はどうか立て直し、ナイフに迅風の魔法をまとわせる。普通の人なら恐怖で動けなかったかもしれないが、僕は事前に威圧と恫喝を知っていた。不意打ちにはならない。

その立て直しの早さが予想外だったのだろう。剣を鞘から抜き取るうとしていた動きが止まり、驚愕の表情で固まった。僕は当然ここでもその隙を逃したりしない。リーダーに向けてナイフを振りかざした。

『ダメっ』

『やめてっ』

ナイフを振り下ろすことはできなかった。それどころか

リーダーに近づくことさえできなかった。原因は後ろから服を引っ張るクレッサだ。そしてリーダーの前で行く手を阻むように両手を広げているクレッサだ。

この部屋にクレッサは二人いた。一人は僕の後ろでもう一人はリーダーの前だ。先ほどの『ダメ』は後ろのクレッサで『やめて』は前のクレッサが発した言葉だ。

僕は瞬時に悟った。コボルトリーダーも妖精憑きなのだ。判らないのは妖精憑きなのになぜリーダーは人を幸せにしようとしなのかということだ。

「妖精様がいるのに、何故、不幸を撒き散らかすのですか」ナイフを構えたまま僕は問う。

「お前にそれが見えるかっ」

「当然です。そっちも妖精様が見えてますよね」

妖精様に守護されてる者は妖精様を見ることが、声を聞くことも、触ることもできる。僕は妖精様に守護されている。だから妖精様を見ることができ。自分を守護してくれているクレッサだけではなく、コボルトリーダーを守護している妖精様も見ることができらしい。

コボルトリーダーが固まったのは立ち直りの早さに驚いたのではなく、僕の後ろのクレッサを見て、僕も妖精様に守護されているのを知ったからかもしれない。

「グニョソエオグエンアグウマダ」

コボルトリーダーは答えたのだろうか、それともただ唸っただけなのか。

と、甲高い不快な音が部屋の中に響き渡った。蟲が飛び交うようなその音は気持ちが悪くなる。でも、コボルトリーダーは気にならないらしい。僕は耳を押さえた。あの唸り声は音攻撃魔法の呪文だったのだ。

『話をついたから、あれは見逃して』

後ろのクレッサが言う。不快な音はいつの間にか消えていた。

「不幸の元凶を見逃せっていうの？ それじゃあ、みんなを幸せにできないよ」

『ここからいなくなる。コボルトの国に帰る。ここにあるものは全てあなたのもの』

僕の反論に前のクレッサが答える。リーダーはその提案に納得したのか、鞘ごと剣を床に投げた。僕は構わず斬りかかろうとしたが、後ろのクレッサは僕の服を離さない。

クレッサの今の級位は七十四。僕はクレッサの手を振りほどけない。

『ステータス』

僕は前のクレッサを見た。

名前…ク・レイサ 級位…81 資質…武術、心術、魔術、  
智術 スキル…雷魔法十位 恐怖支配十位 剣技十位 情報

収集十位　???　???

『ここで死ねば、もうみんなを幸せにすることはできないよ』

後ろのクレッサが損得の話をしてくる。クレッサでもク・レイサには負けてしまう可能性がある。でもここでコボルトリーダーを見逃して、不幸の素を放置するのは嫌だ。

多くの人は損得を考えて行動する。鑑定依頼の人にも「どうすれば得をしますか」と聞いてくる人がかなりいる。でも、僕は損得が判らない。興味が無い。僕の行動基準は損得や善悪ではなく、人が幸せになるか不幸になるかだ。だから不幸の種になるコボルトリーダーは今、斃さなければならぬ。そう考えるのだが、クレッサの考えは違うようだ。

僕はクレッサに従うことにした。級位差からしても、クレッサに服をつかまれたら、動くことはできない。どのみちクレッサに従うしかない。

ナイフを振ってまとわせていた風の刃を床に叩きつけた。そして魔法がなくなったナイフをたすき掛けのかばんの中に入れた。

『ありがとう』

ク・レイサがそう言ってリーダーを先導しながら部屋から出ていく。コボルトリーダーは悔しそうな表情を隠すことなく、僕らを睨みつけて、棲み家から消えていった。

血の匂いが立ち込める巢の中で、僕は予定していた作業を進めた。

コボルトたちが隠し持っていた三つの宝箱の蓋を開けてテーブルの上に並べる。そして、領主様に宛てた譲渡の手紙を入れる。

コボルトは金のため込んでいた。その総額はコボルトたちの年貢の百倍以上だ。それほどの収入が一度に得られるのならコボルトがいなくなっても領主様は喜んでくれるだろう。

その金は主に特殊な回復ポーションを売って儲けていたらしい。それは高位のポーションで普通の薬屋では扱っていない。製法も流通経路も極秘でこの辺ではコボルトとゴブリンしか売っていないかった。

宝箱の中にはそのポーションがあった。問屋の連絡先もあったので、それも領主様宛の手紙に入れておいた。コボルトに代わって領主様がその販売を受け持てば、領主様の大好きなお金をもっと手に入れることができるだろう。

ここまでは領主様向けの作業だ。残りはゴブリン退治に向けた作業になる。

たすき掛けのかばんから血の入った袋を出し、ところどころに撒く。コボルトリーダーが落としていった鞆付き剣を拾う。当初の予定では死骸から適当な剣を奪うつもりだったが、鞆付き剣のほうが高位の剣だ。ク・レイサもここにあるもの

は自由にしていいと言ったのだ。剣くらいは僕がもらってもいいだろう。

剣を手にはコボルトの巣を出て、目立たないようにしながら袋の血をこぼしつつ、ゆつくりと近くの小さな祠の裏まで来た。

コボルトの巣に来る前、河原で仲間のところに向かうゴブリンを一匹さらってきていた。風魔法を使ってゴブリンの周りの空気を薄くして気を失わせた。そして、縄で縛った後に左手首を切り、血を搾り取っていたのだ。

何故そんなことをしたのか。それは衛兵を惑わすためだ。そして、全てのゴブリンを退治させるためだ。

僕の計画はこうだ。コボルトの巣を襲い全滅させる。襲撃はゴブリンが行ったことに見せかける。それを理由にして衛兵にゴブリンを退治してもらう。

衛兵の中にはアイテム鑑定にたけている者がいるらしい。残された血を見て、それが誰の血か鑑定できたり、傷の形から、それがいつどこでどの剣で攻撃されたかが判るとのことだ。

だからナイフはゴブリンが使うのと同じものにしたのだ。コボルトの巣にゴブリンの血を撒いたのだ。今ここでコボルトリーダーの剣でゴブリンを斃すのもそうだ。僕の履いていた靴をゴブリンに履かせるのだって、全ては衛兵の鑑定を逆

手に取るための細工だ。

僕は風魔法で空を飛び、馬のところへ戻った。これで衛兵は、コボルトの巣を襲撃したゴブリンが祠まで逃げ、そこで息絶えたと思ってくれるだろう。

コボルトはいなくなった。ゴブリンも退治される。これでみんなは幸せに暮らせるだろう。

僕は馬を走らせながら笑顔になった。後ろではクレッサがニコニコ笑っていた。

## ● 十一章 静かな山

コボルト八匹とゴブリン一匹を斃しても級位はあがらなかった。淫魔のときは一匹で級位があがった。今回九匹であがらなかったのは魔物の級位が低かったせいだろう。それでも、それから一年たたないうちに十位にあがったので、それなりの効果はあったのだろう。

コボルト退治から一年で僕の生活は大きく変わった。剣技のスキルが準五位（一位）になった。ずっと準四位でとまっていたのだが、風魔法での身体強化と風魔法攻撃を併用する鍛練をつづけたことにより準級位をあげることができた。それと同時に（一位）が付き、人にも教えることができるよう

になっていた。

（一位）はいいことばかりでない。準五位（二位）を知った実技鍛練所の所長さんが僕を雇うのをやめた。名目は独立だが、一位になるまでの時間の長さで、なってもカッコ付き一位だったことにあきれ果てたのが真実だろう。

実技鍛練所の職を失っても、僕にできることは多くない。仕方なく所長さんの勧めどおり坂の下の家で剣技鍛練所を始めた。

坂の下の家は幼児鍛練所で、剣技鍛練所で、鑑定所となつたのだ。そして、僕の一日は朝、坂の下の家で始まり、夜、坂の下の家で終わるようになっていた。

朝、起きると山に登り風魔法の鍛練をする。ついでに獣狩りをするときもある。昼は幼児鍛練所の子供たちと遊ぶ。幼児鍛練所を手伝ってくれるキャナリーさんたちと話したりもする。鑑定も昼から夕方にかけて行っている。それとみんなの前で話をする。夕方からは剣技を教えている。そして、夜、僕は坂の下の家で寝るのだ。

僕は今、ミカエラさんの家に住んでいない。それはミカエラさんが鑑定所を手伝ってくれるようになったクラインクヴァズさんと結婚したからだ。今、ミカエラさんの家に住んでいるのはミカエラさんと三人の子供とクラインクヴァズさんだ。

僕はミカエラさんとミカエラさんの子供を守る偽の騎士だが、今のクラインクヴァズさんは悪人ではないのでミカエラさんと結婚しても何の問題もない。もし、未来が変わってクラインクヴァズさんがミカエラさんやミカエラさんの子供たちを害するようになったら、僕はミカエラさんとミカエラさんの子供たちを守るため、クラインクヴァズさんを斃すだろう。

ミカエラさんの子供の中では二番目の子が僕の資質を強く受け継いでいるようだ。どうやらその子はクレッサが見えるらしい。ただ、いつも見える訳ではなく、見えたり見えなかったりするらしく、気まぐれに時々話しかけては無視されている。

コボルト退治以降、コボルトリーダーの姿はなくなった。ク・レイサの言葉通りコボルトの国に行つたのかもしれない。河原に巣くっていたゴブリンも衛兵によって排除された。ただ、まだ人に化けて生活しているコボルトやゴブリンはいる。この頃はオークも混じっていると聞いた。

ゴブリンは土着だが、オークはオークの国からやってきて人のふりをする。コボルトはコボルトの国からくる。親がコボルトの国から来て、子を産み、仲間を増やし、僕たちの国をひそかに侵略しているらしい。

オークの国もコボルトの国も海の向こうにあると言う。ここではオークが住み、オークの言葉を話している。コボルトが住み、コボルトの言葉を話している。コボルトの国をなくさない限りコボルトがいなくなることはない。

今残っているコボルトが全部いなくなると領主様は年貢が減ってまた困るかと思ったが、つい最近、領主様が変わったらしい。今度の領主様は年貢よりみんなの幸せを考えてくれる人だといいのだが。

前の領主様は僕が斃したコボルトの百年分の年貢で満足したのかもしれない。きつとそれを元手に特殊な回復ポーションの販売を始めたのだろう。特殊な魔法の薬はかなり儲かるらしいから。

前の領主様はその変化を喜んだだろうか。もし、転職で幸せになったのなら、きつかけを作った者として僕は嬉しい。

魔物は人に害をなす存在だ。人を不幸にする存在だ。そんな魔物の国が海の向こうにあると思うと心配だ。きつとコボルトの国はいつか僕たちの国を滅ぼそうと攻め込んでくるだろう。

戦争となれば多くの人が不幸になる。僕はそれを防いでみんなを幸せにしなければならない。そのためにはまず、コボルトの国について知らなければならない。僕は祖父、母の父

の図書館に行った。

図書館で本を読んでも、前は何も言われなかった。けれど、今回は本を読むことを断られた。きつと祖父が亡くなったことが原因に違いがない。生きていたときは孫ということで認めてくれていたのだが、亡くなったことにより図書館は誰か別の人の手に渡ってしまったのだろう。

僕の周りには多くの人がいる。リサさん、セダーベルグさん、ドレイクさん、クラインクヴァズさん、キャナリーさん。他にももっと多くの人がいる。ほとんどの人が上級総合鍛練所を出ていてみんな僕より物知りだ。

キャナリーさんは妹の友達のキャナリー・ヴァイデストロームさんだ。坂の下の家で子供たちの面倒を見始めたときから、それを手伝ってくれている。最近は泊っていくことも多い。ある日「二人きりのときは名前前で呼んでください」と言われ、僕の中ではヴァイデストロームさんからキャナリーさんに変わった。

キャナリーさんはコボルトの国のことを知っていて、いろいろ教えてくれた。挨拶の言葉も知っていて教えてくれた。やはり上級総合鍛練所を出た人は違う。

幼児鍛練所は全部で二十人ほどの子供の面倒を見ている。

子供たちは朝、親に連れられてやってきて、夕方前に迎えに来た親と一緒に帰っていく。

鍛練所なので子供の親からお金をもらっている。ミカエラさんの三番目の子もここに通っていて、ミカエラさんからもお金をもらっている。子供の親からもらったお金は幼児鍛練所を手伝ってくれている人のお給料になっている。僕もときどき子供の相手をするので、お給料をもらっている。そのお金は子供たちを育てる費用としてミカエラさんに渡している。

ミカエラさんからのお金が幼児鍛練所に入り、そこから僕に渡り、ミカエラさんに戻される。無駄な流れだと思うが、そういうことが大事なんだそうだ。

剣技鍛練所もそこに来る人からお金をもらっている。ミカエラさんの一番目の子は剣技鍛練所のほうに通っている。剣技鍛練所に来る人からもらったお金は剣技鍛練所を手伝ってくれる人のお給料になっている。僕はそこからお金をもらっている。

ミカエラさんの一番目の子は武術の資質を持っている。剣技鍛練所にも小さいころから来ていて、すでに剣技一位のスキルがついている。準一位ではなく本物の一位なので、まだスキルを持っていない子供に、どう動けばいいかを教えてい

たりする。魔法の資質もあるから、いつか風魔法を教えたい。

鍛練所はお金をもらっているが、鑑定所はお金をもらっていない。そのかわり、お米やパンをもらっている。野菜をもらうこともある。

今は一日に何人も鑑定しているので僕が食べる分には十分だ。逆に余ってしまう。余ったものは幼児鍛練所で使っている。

鑑定所にはお金は入ってこないが、余ったものを幼児鍛練所に売ったことにして、そのお金を鑑定所を手伝ってくれるひとのお給料としているみたいだ。

それに、鑑定所を手伝ってくれる人はお給料を受け取らない人も多くて、どうにか回っているらしい。みんな生活があるのに無償で働いてくれるなんてありがたい限りだ。

キャナリーさんはコボルトの国について書かれた本を何冊か持ってきてくれた。コボルトの言葉を話せる人も紹介してくれた。

リサさんは図書館の人と話してくれて、また祖父の図書館を使えるようにしてくれた。

コボルトは人に害をなす存在だ。人が幸せになるためには滅ぼさなければならぬ。一匹や二匹ならその個体を鑑定し

て対策を練ればいいが、相手がコボルトの国となるとそういう訳にはいかない。相手の国を知り、歴史を知り、言葉を知らなければやつらの考え方は判らない。

コボルトは人に化けられる。なら僕もコボルトに化けられるはずだ。コボルトはここで人のふりをして人を害している。同じように僕がコボルトに化けコボルトの国でコボルトを斃すこともできるはずだ。

そのためにもコボルトのことをもっと知って、コボルトの言葉を話せるようにならなければ。

コボルトの言葉はすぐに覚えることができた。きつと僕に話術の資質があつたからだろう。毎日夜にコボルトの言葉の鍛練をしていたおかげで、一年もたたないうちにコボルトと同じくらい上手に話すことができるようになっていた。コボルトの言葉にも方言があるようで、最近は方言の鍛練もしている。

コボルトリーダーはコボルトの国に帰つたが、ほかにもコボルトはまだいる。人に紛れて暮らしている。領都の近くにはコボルトが多く住む地区まであるらしい。

その地区までは馬で半日もかからない。朝、出れば昼前には十分着く。僕はときどき、朝の山での鍛練を休んで、そこに出かけるようになった。そして、コボルトのふりをしてや

つらに近づいた。

はじめは胡散臭いものを見るような目で見られた。それは僕のちよつとした言葉遣いや仕草がコボルトと異なつていたからだ。怪訝な目で見られるたび、僕は何が悪かったのか考え、相手のしゃべり方、体の動かし方を観察した。そして僕は偽装のスキルを手に入れた。

コボルトに偽装してコボルトと付き合ってみて、つくづくやつらのあくどさが判つた。やつらは常に人から物を盗むことを考えていた。女の人を強姦することを考えていた。

コボルトたちは言う。ずっと昔、人がコボルトの国に攻め入り、コボルトたちを斃し、虐げた。だから、今、人から物を盗んでも問題ないと。人を犯しても問題ないと。問題ないどころか、むしろ、すすんで人に害を与えるべきだと。

その言葉で僕は知つた、昔コボルトの国に乗り込みコボルトを斃した勇者がいたことを。その勇者も妖精憑きだったのだろうか。みんなの幸せのためコボルトの国に行つたのだろうか。

僕は本物の騎士になれない偽の騎士だ。勇者になんかともなれない。でも僕は妖精憑きだ。人を幸せにしなければならぬ。人に害をなすコボルトを斃さなければならない。

今はまだ偽装は二位だ。それは三位以上の鑑定を持つ者に

は見破られてしまうことを意味している。

僕は鑑定十位だ。鑑定所で毎日のように鑑定させてもらっているおかげでこの前十位にあがった。十位だから九位の偽装まで見破ることができる。十位の偽装を完全に見破ることはできないが、それでも偽装が使われていることは判る。

僕以外で鑑定が十位の人は見たことがない。最大は六位で、それは占いの仕事をしている人だった。

そもそも鑑定スキルを持つている人は少ない。百人に一人もない。いたとしても三位がいいところだ。だからコボルトが人に紛れ込めてしまっているのだ。

逆に言うと偽装スキルを四位まで上げてしまえば、コボルトの国でコボルトに偽装してもほぼ見破られないということだ。

僕はコボルトを斃すためにコボルトの国に行く。そのために偽装を四位、できれば五位にあげたい。そのための鍛練をする。コボルトの国でコボルトを斃すために剣技の鍛練もする。風魔法の鍛練もする。すべては努力と鍛練だ。

## ●十二章 すべき十のこと

ミカエラさんの家を出て数年がたった。一時期つきまとうように僕を見張っていた衛兵も最近が姿を見せない。きつといつまでもコボルト退治の犯人探しをしていられないのだ

ろう。コボルトやゴブリンの保護より重要なことはいっぱいある。そもそも衛兵が人に害なす存在を守ろうとすること自体おかしいのだ。

僕は今でも坂の下の家に住んでいる。子供達はミカエラさんの家で暮らしているが僕は毎日のように三人と会っている。

子供の頃は一年が長かった。今は一年があつという間に過ぎ去っていく。子供はすぐに大きくなりどんどん成長していく。

子供の成長に比べて僕は全然成長がない。すべての人を幸せにしなければならぬのに、幸せにできているのは僕を訪ねてくる一部の人だけだ。鑑定所を始めた頃からすると訪ねてくる人は何倍にもなったが、訪ねてこない人はその何十倍も、何百倍も、何千倍もいる。今の暮らしのままでは全ての人を幸せにすることはできない。僕自身が大きく変わる必要がある。坂の下の家に閉じこもっているだけでは駄目だ。でも大きく動き出す前にやらなければならないことがある。いくつかある。それもしないで動き出してしまえば今僕の周りにいる人が困ってしまう。

上の子は総合鍛練所に通っている。クレッサが僕のところに来た歳はもう超えている。けれど息子の所に妖精様は来て

いないようだ。

彼の剣技は素晴らしい。鍛練も毎日している。資質がある上に毎日鍛練を行っているから伸びも目を見張るものがある。剣技だけなら僕を超えている。

僕に剣の資質はない。人の三倍鍛練して辛うじて剣のスキルを得た。でも一番上の子は資質を持ったうえで厳しい鍛練をしている。スキルもすぐに上がる。

でも実戦となると彼は僕にかなわない。なぜなら僕は風魔法を併せて使うからだ。風補助魔法で体を軽くし、剣を軽くし、体と剣を早く動かせるようになるからだ。そして剣に風刃をまとわせ、剣の振りと共に風の刃を飛ばすからだ。

一番上の子には魔法の資質もある。僕がクレッサと会い、魔法の鍛練を始めたのは総合鍛練所に入った年だ。それに合わせて上の子には一年前から風魔法を教えている。資質を持っているからちゃんと鍛練さえすればすぐにスキルは上がりそうだが、風魔法はずっと一位のままで、なかなか上がらない。僕はクレッサに教えてもらった。彼のスキルが上がるのは僕の教え方のせいかもしれない。

それなら剣技も上がらなそうだが実は剣技鍛練所は少し前から人に来てもらっている。昔僕が通っていた実技鍛練所にいた人でちゃんと剣術の資質を持った人だ。剣技も四位でもうすぐ五位に上がりそうだ。

剣技鍛練所の運営はほとんどそのアルタラストさんに任せている。僕はミカエラさんの子と小さな子供だけに教えている。この前上の子に風魔法を教えていたらそれを見ていたアルタラストさんが僕も教えて欲しいと言ってきた。でもアルタラストさんに魔術の資質はない。かなり苦労することになるがそれでもいいかと聞いたところ構わないということだったので次からは上の子と一緒に教えることになった。

二番目の子と三番目の子は初級鍛練所に通っている。二番目の子を見た目が可愛らしい女の子だ。話もうまく表向きはいつも笑顔見せているので周りからも好かれている。初級鍛練所でも人気者らしい。

小さな頃はクレッサに話しかけてたりしていたが今ではそのようなことは一切しない。クレッサが見えなくなったのかそれとも返事をもらえないことはないかと悟ったのかは判らない。

僕は父に「妖精様のことは人に話すな」と言われた。だから彼女の行動の変化を聞くことはしない。

二番目の子には剣技を教えていない。資質がないのも一つの理由だ。だが第一の理由は何より本人に剣に対する興味がないことだ。鍛練所にはときおり来るのだが隅で見ているだ

けだ。ただ彼女が見学している日は男の子たちの気合が違ふ。彼女に認められたいと思うのか、来ていない日より熱心に鍛練に励む子が多い。彼女は鍛練後に特に熱心だった子に近寄り見上げるようにして声をかけたりしている。声をかけられた子は皆顔を赤らめ嬉しそうに話をしている。

彼女は生まれた時から魅了のスキルを持っていた。常に皆から「可愛い」と言われちゃほやされていた。

僕はサキュバス戦で魅了された。その轍を二度と踏まないように魅了耐性の鍛練もしている。だから多少の耐性がある。ミカエラさんにもなぜか二番目の魅了が効かないようだ。そのため客観的に見る事ができる。だから三人の子は分け隔てなく、叱るときは叱る、褒めるときは褒めている。だが多くの人は上の子や下の子に比べて二番目の子を甘やかすことが多い。そのため二番目の子はわがままに育ってきた。

単なるわがままはミカエラさんに叱られる。そこで魅了を使い自分の希望を叶えている。鍛練所に来るのも、毎日のように鑑定所に顔を出すのもそのためだ。鍛練所や鑑定所にやってくる人を魅了し、人々を手なずける。笑顔で話しかけ褒め称え、気をよくさせて自分の願いを叶える土壤としているのだ。

表面だけ見れば彼女は人の気分をよくさせ、人を幸せに導いている。それは妖精憑きの僕が行つてのと同じ事だ。だ

からよく鑑定所に来ている人は彼女の事を鑑定所における僕の後継者と思つていようだ。

三番目の子はおとなしい子だ。特に人より優れているところはない。スキルもまだ何も持っていないようだ。でも、それはまだ小さい子供だからだろう。

僕が小さな時は何も出来ない体の弱い子だった。頭も悪く臆病者でそのことで大叔父、父の父の弟から、罵られていた。咳をするたび母から蔑むような目で見られ、父は僕から目をそらした。

そんな僕でも今では多くの人と話ができるようになった。人の前で話すこともできる。多くの人が僕のところに来て訪ねてきてくれるようになってきた。

それはクレツサのおかげだ。クレツサが来てくれたから僕は変わったのだ。人を幸せにするには弱くては駄目だった。僕自身が変わる必要があった。だから今があるのは全てクレツサのおかげだ。

上の子は剣技に秀で同世代の子達からも慕われている。二番目の子は愛くるしく全ての世代の人気者だ。三番目の子はそんな二人に隠れて目立たない。まるで元気で可愛い妹の影で病弱だった僕のようなだ。

だから妖精様が来てくれるとしたら三人の中では三番目

の子になると僕は思っている。

本当に子供の成長は早い。あつという間に月日は過ぎ、上の子も中の子も高等鍛練所に通い、下の子はもうすぐ総合鍛練所にあがる。

今や、剣技鍛練所はアルタバラストさんと上の子が中心になって動いている。僕は時々口を出すだけだ。上の子は高等鍛練所にも通っているの、実質はアルタバラストさんが鍛練所の所長だ。名目上の所長は僕になっているのだが、実力もアルタバラストさんや上の子の方が僕より上だ。近いうちに正式に所長の譲渡をしよう。それは僕がすべきことの一つだ。

上の子の剣技は僕をはるかに超えている。正式級位はまだ二位だが、準級位は準五位になっていて僕より上だ。

風魔法は三位で僕より低い。だが、実戦では風補助魔法をつかわなくても、風魔法つきの僕に余裕で勝っている。彼の年齢でここまで強ければ一人前と言っていいたいだろう。

上の子に剣技を教えるのは僕のすべきことだった。風魔法を教えるのも僕のすべきことだった。

二番目の子が剣技鍛練所に来ることはだいぶ少なくなった。だが、鑑定所には毎日来ている。夕方の集団鑑定のとき、僕が話す前に、集まったみんなの前で話をすることもある。一部の人は僕の話より、彼女の話のほうが嬉しそうだ。

二番目の子も鑑定スキルを得た。スキルを得たとたん鍛練をないがしろにした。だから長い間その級位は一位だった。どうも鑑定よりも魅了スキルを上げることに興味があるようだ。

魅了は一時的な幸せを与えるだけだ。鑑定は今までを分析し将来を幸せに導く。魅了と鑑定では鑑定のほうが面白いと思うのだが、彼女はそう思わないらしい。

それは彼女が選んだことだ。その選択に口をはさむつもりはない。やりたいことをやらせず、やりたくないことを強いては本人の幸せにならない。

そう思って放置していたのだが、先日、急に鑑定に興味をわいたようで、また、鑑定の鍛練を開始した。

どうやら、人の性格によつて魅了の効果が変わること気づいたらしい。性格を知るには人物鑑定が役に立つ。人物鑑定で相手の性格を知り、それに合わせた最適の魅了を発動する。そうすれば、より深く魅了させることができるのだ。

魅了はしぐさ、表情、距離感、口調を駆使して行う。だから彼女が会話もうまい。声の高さ、話す速度、選ぶ言葉、

話しの間。それらを場所や相手、そして周りに何人いるかによつて使い分けている。それは僕やつているのを見よう見まねで覚えたようだ。

僕も時と場合によつて話し方を変えている。鑑定所の大広間で大勢を前にして話をするときと、ベッドの中でキャナリーさんに囁くときとは発声の呼吸法を変えている。それはそのほうが相手がより喜び、幸せになるからだ。

僕がベッドの中でどう囁いているかは二番目の子は知らないはずだ。でも、ときおり同じような囁きを同世代の男の子にしている。僕は話していないが、キャナリーさんが二番目の子にベッドでの僕の様子を話しているのだろうか。

それとも僕が独学でその話術を習得したように彼女も独自に手に入れたのだろうか。どちらにしても人を幸せにするスキルを手に入れるのはいいことだ。

二番目の子は鑑定所に興味があるようだ。でも今の彼女の實力では鑑定所に来る人たちを十分に幸せに導くことはできないだろう。だけど彼女は妖精憑きではない。僕のようにみんなを幸せに導く必要はない。ある程度の人を幸せにできればそれで十分なのかもしれない。

僕は二番目の子に鑑定スキルへの道を開いた。それは僕のすべきことだった。今後、彼女がそのスキルと鑑定所をどうするかは彼女しだいだ。そこに口を出すのは僕のすべきこと

ではない。

ただ今の鑑定所には別の問題がある。二番目の子とは別にその問題をどうにかするのは僕のすべきことだ。

三番目の子はもうすぐ僕がクレッサと出会った年齢になる。でも妖精様が来ている様子はない。ずっと変わらず大人しい性格で自分を表現するのが苦手のようなうだ。でも僕が見るに医療の資質を持っている。本人もそちらに興味があるようだ。僕の妹にも懐いていて二人でよく話をしている。

妹は父の診療所で働き始めた。将来的には父にかわつて診療所を任せるための準備だろう。妹に診療所への道を示すのは父のすべきことだ。それは僕のすべきことではない。でも三番目の子が診療所の仕事に興味があり、妹と一緒に働きたいと思うならその道を示すのは僕のすべきことだ。

資質は別としても三番目の子は今の環境から出て妹と生じた方がいい。それは三番目の子はクラインクヴァズさんと折り合いが悪いからだ。

ミカエラさんとミカエラさんの三人の子はクラインクヴァズさんと暮らしている。五人が一緒に暮らし始めた頃は何の問題もなかったが、このところクラインクヴァズさんの様子がおかしい。ミカエラさんや子供たちに対して乱暴な振る舞いを見せるようになってきた。

特に三番目の子は大人しいのでクラインクヴァズさんにきつく当たられているようだ。本人は何も言わないが、今の状況は三番目の子にとっても幸せから離れている状況に見える。

僕はミカエラさんとその子供を守ると誓った。だからクラインクヴァズさんとミカエラさんと子供達が幸せに向かうように関係を正すのは僕の全てことだ。

クラインクヴァズさんに関しては鑑定所の問題もある。

クラインクヴァズさんは鑑定所の仕事を手伝ってくれている。坂の上の家で鑑定をしていた頃は人の手を借りなくてもやっていけたが、今は鑑定所に多くの人が来る。無節操に来られると待つてもらうことになる。来てくれた人が無駄に待つのは申し訳ない。誰がいつ来るか、来てから順番が来るまでの対応、そういったことをクラインクヴァズさんがしてくれている。

鑑定は僕自身の鍛練のためにしている。今では鑑定も十位になっているのでこれ以上は伸びないが何もしないでいるとスキルはさび付き級位が下がってしまう気がして怖い。

自分のための鑑定なのでお金はもらっていない。それは初めからそうだ。でも中にはどうしてもお金を払いたいという人がいる。そんな人のために鑑定の時には食事一回分のパンをもらっている。パンではなく一食分の野菜をくれる人もい

る。

一日にする鑑定は五人ほどだ。僕一人では余ってしまう。余った分は手伝ってくれているクラインクヴァズさんに分けている。

ずっとそうしてきたのだが、最近クラインクヴァズさんは鑑定に来る人からお金や高価なものをもらっているらしい。お金をいっぱい払った人は順番を前の方にするとかしているようだ。一度論じてその時はおさまったのだがまた始まったらしい。

僕はクラインクヴァズさんをお金持ちにするために鑑定をしている訳ではない。理由があつて早く鑑定して欲しい人がいれば、お金など関係なくすぐに鑑定するようにしている。僕は全ての人を幸せに導きたいのだ。一部の金持ちだけを幸せにしたいのではない。

全ての人を幸せに導く。これは僕のすべきことだ。ミカエラさんとミカエラさんの子供を守る。これも僕のすべきことだ。その二つの実現のためにすべきことがあれば、それも僕のすべきことだ。そしてその二つの実現の障害になるものの排除も僕のすべきことなのだ。

### ● 十三章 旅立ち

ミカエラさんの子たちはそれぞれ自分の道を見つけた。一番上の子はアルタパラストさんと一緒に剣技鍛練所をきりもりしている。一番下の子は僕の妹や僕の父と一緒に暮らし、治療院の仕事の勉強をしている。二番目の子は特に何をしている訳ではないが、いつもちやほやされることを目指している。鑑定級の位も上がってきたので気が向けば鑑定所の手伝いをするだろう。

僕の計画も進んでいる。幼児鍛練所はリサさんとボウグスタッドさんにすべて任せて、僕はもう何もしていない。剣技鍛練所も一番上の子とアルタパラストさんに風魔法を教えるくらいだ。鑑定所はまだ続けているが、夕方に大勢の前で話するのは月に一度ぐらいだ。

今の日々の生活は鍛練が中心だ。朝、山に入ってボアやディアを狩りつつ剣技と風魔法の鍛練。昼は鑑定の鍛練。夜は偽装の鍛練だ。

剣技は準は準五位のままで、正規は二位まで上がった。攻撃魔法も防御魔法も九位になっている。鑑定はすでに十位になっていてこれ以上は上がらないが、鍛練を続けることによって総合級位が上がる。それにより最大体素数と最大魔素数が上がっている。一番級位が上がったのが偽装だ。当初の目標を超えて今は七位になっている。領都近くに巣食っているコボルトの中に入っても人だとは気付かれないほどだ。コ

ボルトの言葉は完璧だ。コボルトの南の方言も話せるし、北の方言も話せる。一度、北のほうの言葉をこそつと混ぜたら「北の出身か」と聞かれたので「父方がグナヤグノイプの出だ」と答えたら、何の疑いもなく信じてもらえた。これならコボルトの国に行っても人間だとバレないだろう。

名前…フサト・フンフリヒト 級位…21 スキル…鑑定十位、魔法九位、偽装七位、魅了六位、乗馬五位、狩猟五位、鍛練効率三位、剣技準五位（二位）、偽証二位、体技準二位

ボアやディアを倒してもなかなか上がらなかった総合級位もクレッサ相手に鍛練したらぐんぐんと上がるようになった。今の級位は二十一だけど、他の人で二十を超えている人はまずいない。僕が鑑定した中で二十を超えていたのはクレッサとコボルトリーダーの所にいたク・レイサだけだ。

ずっとクレッサは鍛練の相手をしてくれなかった。魔法のことを聞いてもはぐらかすように答えるだけで、的確な教えはしてくれなかった。でも、ある日突然それが変わった。僕の相手をしてくれるようになり、教え方も丁寧に判りやすくなったのだ。

クレッサも思うところがあつたのだろう。きつとそれはク・レイサとの級位差に関係しているはずだ。

あのとときのク・レイサの級位が八十一。コボルトリードーは七。今のクレッサは七十四。僕二十一。

合計で見ると八十八と九十五。単体では敵わなくても合計では上回ることができる。

合計で考えることに意味があるのか判らない。さらに言えば、今のク・レイサとコボルトリードーの級位も正確には分からない。遠隔鑑定で見た限りではク・レイサが八十二でコボルトリードーが八だった。

遠隔鑑定は直接見ないから誤差が大きい。そんな不確定な状態だけどそういう計算でもなければクレッサが僕の相手をしてくれることはなかっただろう。

僕の剣技は正二位、準五位だ。でも正五位のアルタパラストさんと戦っても勝つのは僕だ。剣技で劣っていても最大体素の差は大きい。僕はどんなに傷を受けても耐えることができる。少しずつアルタパラストさんの体素を削ってゼロにすれば戦いは僕の勝ちだ。

そう僕に勝てるのはクレッサかク・レイサか、もしくはそんな妖精様と同じような級位を持った特別な存在だけなのだ。

馬の寿命は人より短い。それでも常に体調に気遣ってやれば二十年は乗ることができる。ミカエラさんから譲り受けた

二代目の馬も、もう高齡だけどまだ走ることができる。いつでもどこかしら具合が悪そうにしているが、僕は乗り続けている。

「新しい馬にしたら」と言ってくる人もいるが、そんな人はつぶした馬の肉のおこぼれにありつきたいからそう言うてるのだ。

でも僕は馬をつぶしたりしない。偽とはいえこれでも騎士のつもりだ。生活を共にした馬を食べる気はない。乗れなくなっても馬丁のドレイクさんの所で静かな余生を過ごさせるつもりだ。

「僕が急にいなくなったら、馬はドレイクさんの所へ連れて行ってください」

一番上の子にもそう伝えてある。

ミカエラさんの三人の子のうち、乗馬のスキルを持っているのは一番上の子だけだ。彼は初めから準ではない乗馬と剣技のスキルを手に入れた。まだ守るべき人に巡り合っていないようだが、そういう人と出会えば本当の騎士になれるだろう。

性格的にもまっすぐな子だ。本人も一部の人だけではなく多くの人を守る本当の騎士を目指している。

一番上の子。二番目の子。そう言ってしまうが、彼らは既に一番目の子が生まれた時の僕の年齢を超えている。もう十

分大人だ。だから彼らからすれば僕がいろいろな意見するのは嫌だろう。彼の生き方は彼らに任せるべきなのだ。

僕が僕のことを自分で決め、行動しているように彼らも彼ら自身で考え行動すべきだ。

古の勇者はコボルトの国に攻め込み多くのコボルトを斃した。歴史を聞くと全滅させることはできず、復興をを許してしまったようだ。

国を復興させたコボルトは人に化け、僕たちの国で悪さをしている。誰かが再び大規模なコボルト退治をしないと、コボルトはもっと増えるだろう。そして人々を不幸にするだろう。

僕は妖精憑きだ。妖精憑きは人を幸せに導かなければいけない。僕は勇者ではない。騎士を気取っているが本物の騎士はなく偽騎士だ。勇者でさえ殲滅できなかったコボルトを偽騎士の僕が殲滅できるとは思わない。でも誰かがやらなければいけない。それなら最善の結果は得られないとしても、僕がすべきなんだ。僕は人を幸せに導かなければいけないのだから。コボルトが減れば人は幸せになるのだから。

だから僕はコボルトの国に行きコボルトを斃す。殲滅は無理でも一匹でも多くのコボルトを退治する。そして可能なら

コボルトの国に逃げたコボルトリーダーとク・レイサを斃す。そのために僕は鍛練を続けてきた。クレツサも僕に付き合っ  
て総合級位をあげている。彼女は何も言わないが、思いは僕  
と同じなのだろう。

コボルトの国は海の向こうにある。そこへ行くには乗合馬  
車を持ち継いでさらに船を乗り継げば行ける。

僕はクラインクヴァズさんを言葉巧みにコボルト国行き  
に誘った。今やクラインクヴァズさんはミカエラさんと子供  
たちに害をなす存在になってしまっている。このまま残して  
いく訳にはいかない。本来の目的のコボルト退治を知らせな  
いまま誘ったので、クラインクヴァズさんは観光気分である。  
しばらく観光を楽しんでもらった後、コボルト退治に役立っ  
てもらおう。人を害するようになった彼だが、そうすれば少  
しは人の幸せに貢献したことになる。

コボルト退治は熾烈な戦いになるだろう。再びここに戻っ  
て来られる判らない。コボルトの国に行く前、僕は知り合い  
みんなの顔を見に行った。それが別れの挨拶になるかもしれ  
ないと気付いたのは、妹と一番上の子と一番下の子の三人だ  
けだった。

明日、僕は旅立つ。良い狩りを願いながら。それが人を幸

せにするために僕がしなければいけないことなのだ。

(本編完)

●●●●●●第二章の後

三嶽《みたけ》奈波《ななみ》(ナナ・ドライヘレ)

私の物心がつき始めた時に母と兄が家を出ていった。私はずっと、父の家で、父と祖母と三人で暮らしている。家のことは通いのハウスキーパーさんがしてくれている。ずっと、そういう状況なので、そのことが当たり前で、普通のことだと思っていた。

仕事優先で家にあまりいない父と、宗教に生活の重みを置き部屋に閉じこもり気味の祖母との三人の生活は子供の私にとって楽しいものではなかったが、それしか知らない私にとってはそれが普通の暮らしだった。

母がいないことにも違和感はなく、淋しさもなかった。ただ、子供ながらに私は母と兄に捨てられたと思っていた。自分では連れていってもらえず、父の下に残されたのだと思っていたのだ。

小学校に入り、徐々に学習して、周りの会話が理解できるようになって、物事が判ってきた。捨てられたのは私ではなく、病弱な兄だということに。

兄と会うのは年に数回だ。父が兄と会うときに連れて行ってくれたときだけだ。父は兄と月に一度会っているようだが、私を連れて行ってくれるのはそのうちの何回かに一回だった。

兄との面会はいつも高級そうなレストランで行われた。フランス料理店のときもあったし、料亭とおぼしき和食料理屋のこともあった。私と父はいつも定刻の十五分前には個室の中で席に着き、兄を待った。兄はいつも定刻通りに店に入つて、父の前の席に座った。

父と兄の会話はぎこちない。「元気か」「寝込むほどではありません」そんなやり取りしかない。

そして料理が運ばれてくると、二人とも無言で料理をつまんでいる。

「学校はどうだ」

「今月は二日休みでしたが、それ以外は楽しく登校しています」

皿の上のものを食べ終わり、次の料理が運ばれるまでの間に交わされる会話もそんな内容だけだった。

そんな二人を見て私は兄と会うときはつとめて明るくふるまうようにしていた。兄は捨てられ、自分は残されたことの罪滅ぼしとして。

そんな私に兄は優しく接してくれた。「今、奈波は学校で

何を習っているの?」「遠足はどこに行ったの?　そうか、あの山に登ったのか。あの山の展望台からは父様の病院が見えるの知ってる?」「最近はお友達との間ではどんなことがはやっているの?」

いろいろなことを私に尋ねる。まるで、父との間の気まずさをごまかすかのように。私はそれに応じるかの如くより一層明るく返事を返していた。



私が小学校の一年、二年のころは面会日に父から私を誘ってくれていた。最近はお父さんに行きたいと言わないと連れていかれてくれない。連れて行ってほしいというお父さんは不機嫌になる。不機嫌になるのだけれど、それを悟られないようにしているつもりらしい。だが、父は隠し事が下手だ。

私は兄に会うのを我慢して、お願いの回数を減らしている。



三月の面会日は三十日だった。兄は今年小学校を卒業し、中学に入る。おめでとうを言いたかったのですが、今回ばかりは父の不機嫌を無視して連れていかけてくれるようにお願いし

た。

兄と会う前日、ずっと具合が悪かった祖母が父の病院に入院した。そして、当日、兄が熱を出して寝込んでいると連絡が入り面会は中止になった。それでも、父は兄を診に、兄と母が住む家に向かった。その二日後も兄の様子を見に行ったらしい。そして、その日、父は帰宅しなかった。

どちらの日も私は誘われなかった。父が徹夜で看病するほど兄の具合は悪いのかと心配したが、朝、家に戻ってきた父は、いつもあの女のつけている香水の匂いをプンプンさせていたので、朝帰りはそのことなのだろう。

春休みだったこともあって、祖母が入院してから私は毎日お見舞いに行っている。それは四月になって、新学期が始まる二日前だった。病院のCT検査室の前でベンチに腰かけている兄と出会った。兄は検査のため病院に来ていたらしい。

どこが悪いのか尋ねると、高熱が出たがもう熱は引いて、念のための検査だという。私は兄に祖母の入院を伝え、病室を教えた。

祖母は病院で二番目にいい個室に入っている。寝たきり状態で、今は意識もほとんどない。

祖母の病室で兄を待っていたら、いつの間にかウトウトしてしまっただけ。気が付くと兄が病室に来ていて祖母の耳元で何かしゃべっている。祖母の口元がかすかに動いている

が声は出ていない。それでも兄には何を言っているのか判るようで二人で会話にならない会話をしている。

ずっと一緒に暮らしていた私が話しかけても反応しない祖母が、もう何年も会っていない兄と意思疎通している。私は兄に負けた気分だ。いや、私が負けたのではなく、兄がすごいだけなのかもしれない。



学校が始まってすぐの金曜日の朝、祖母が亡くなった。

土曜日が通夜で日曜日が告別式だった。兄は土曜日の夕方になって来た。そしてその夜、兄と親戚たちの間で一悶着あったらしい。でも、何があったか誰も私には教えてくれなかった。



兄が中学に上がって以降、父と兄の面会日は消滅した。そこにながかったのかどのようなやり取りがあったのかは私には判らない。お互いに話があるときは、病院の弁護士の間江波戸先生を介して行われている。

父と兄の面会日がなくなったということは、私も兄と会う

ことがなくなったということだ。

兄からは年に一回、私の誕生日に手紙が届く。封筒の中にはバースディカードと封筒に入るほどの小さなプレゼントが入っている。差出人はどこで調べたのか私の友達の住所と名前になっていた。こちらから連絡を取ろうにも、私は兄の住所も電話番号も知らない。同じ市の西側にいると聞いているだけだった。父に聞けば教えてくれるだろうか。それとも江波戸先生に頼らなければいけないのだろうか。

別段用事がある訳ではないのだが、時折無性に兄の顔を見たくなる。同級生の友達にそう話したら、ブラコンだと笑われた。



祖母が亡くなってからは、私は父と二人で暮らしている。二十四時間三交代のハウスキーパーさんがいるので、二人きりという訳ではないが。

私が父と顔を合わせるのは、朝食のときぐらいだ。いつもなら、そこでも会話はほとんどない。

「兄さまは今年高校受験だよね。どこの高校行くのかなあ。進学のお祝いしたいから、連絡先教えて欲しい」

祖母が亡くなってから三年たった春休み、葬儀以来兄に会

っていない私は思い切って父に聞いてみた。

「総人《ふさと》は高校へは行かない。就職するそうだ」

はじめ、父が何と言ったのか理解できなかった。私の中では、中学を出てすぐに就職するのは、学力が最底辺の人だけだ。最底辺の中の最底辺、特殊学級に通う特殊な人だけが進学をせず、特殊な施設に就職するだけだ。

知っている限り、兄は優秀だった。体は弱かったがその分勉強はできた。勉強はできるが進学せず就職するというのは、それほど生活が苦しいのだろうか。大叔父の遺した学資信託が兄にもあるはずで、学費には困らないのではなかったのか。『なぜ進学しなかったの』と聞いたら、父は答えてくれるだろうか。

「じゃあ、就職のお祝いしたい。ダメ？」

「あまり勧められないが。好きにしなさい」

「私はお兄さまの連絡先、知らないのだけど」

「江波戸が知っている」

父はそれきり、それ以上の会話を拒むように、横に置いてあった朝刊を広げた。



平日だったが、春休みということもあって、朝から病院に

行く。病院に着いたときは九時をまわっていたので、受付や待合室はすでに混雑していた。その混雑を横目に診察棟、入院棟を通り過ぎ管理棟まで来る。そして、二階に上がり事務室のドアをノックする。

江波戸先生は病院に常勤している。最近はモンスターパーペイシエントも多いため、常駐してもらっているのだ。受付や病室で怒鳴り散らす患者が出ると、警備から連絡が入り、江波戸先生がその現場に顔を出す。弁護士バッジと名刺を出すと、ほとんどの迷惑患者は怒鳴るのをやめてくれる。

現役バリバリの弁護士の先生だったら、そんな便利屋みたいな仕事はいやかもしれない。だが、江波戸先生は七十を過ぎて第一線から退いている弁護士だ。さらに、自身も定期的に透析を受けている身なので、病院詰めも抵抗ないのだろう。家を出る前に電話連絡していたので、江波戸先生はすぐに対応してくれた。応接セットのところまで案内され、ソファに腰を掛けると、事務の女性職員がすぐに紅茶をだしてくれた。おそらく紅茶もすぐに淹れられるよう、あらかじめ準備されていたのだろう。

「兄は高校進学をしないと聞きました。理由をご存知ですか」私は開口一番、単刀直入に尋ねた。江波戸先生はそういった質問を想定していたようで、笑顔を変えずに対応してくれた。

「お兄様の意思です。なにやらやりたいことがあるとか」

「資金的な問題ではないのですか」

「高校進学のための学資であれば、どれだけ高い授業料であっても私は許可します」

私の分も兄も分も学資信託は江波戸先生が管理している。それが大叔父の遺産を私と兄が相続する条件だった。江波戸先生が「うん」と言わなければ、私も兄も一円たりとももらえない。江波戸先生は公正かつ厳密にそれを守って運営している。その運営費用としてかなりの額を受け取っているとの噂だ。厳格に守りたくなるほど、もらっている管理費は魅力的な額なのだろう。

「就職先はどこなのでしょう」

「それは直接お兄様からお聞きください。こちらが連絡先です。奈波様から連絡がいくことはすでに私からお兄様にお伝えしてあります」

江波戸先生は、応接セットのテーブルの上に置かれた黒くて分厚い手帳をめくり、折りたたまれたメモ片を私に向けて差し出す。

「ありがとうございます」

私は受け取ろうとするが、江波戸先生はメモをつかんだまま離さない。

「私が言うべきではないのですが」

江波戸先生はメモも離さず、そう言いよどむ。私はメモから手を離し、江波戸先生の目をじっと見る。やがて、観念したように江波戸先生が口を開く。

「お兄様は三年前、高熱を出して寝込まれたことがあります」三年前というと、面会日がキャンセルされたときのことだろう。あのときは兄の具合がとても悪くてキャンセルされた父が言っていたので。

「その後のMRI検査で脳症を発症していることが判明したそうです」

「脳症？」

「もし、お兄様が変な事を言われましても、驚きませんように」

「そんなに悪いのですか」

江波戸先生は答えをためらうように間を置く。

送られてきたバースデイカードにおかしなところはなかった。多少他人行儀な文章だったが、それでも不自然な内容ではなかった。唯一の不自然な点は、封筒の裏の差出人が兄ではなく私の友人の名になっていたことだけだ。

「私の見た限りでは、おかしいところはありませんでした。が」

それきり、また言いよどむ。

「が？」

「診察された院長は、お兄様の言動に不安があるようでした」  
父が診察して、そう判断したのなら、そうなのかもしれない。

家庭人としての父は尊敬に値しなくても、医師としての父は十分に尊敬できる存在だ。事実、父を頼ってこの病院を訪れる患者も多いし、父を慕ってこの病院に勤めだした医師や看護師は何人もいる。

その父が出した診断であれば、兄の脳症は程度の差はあれ、精神に異常をきたす類のものなのだろう。だが、江波戸先生の見聞も私への手紙も異常はなかった。

「兄に私の友達の事を聞かれたことがありますか」  
「はい？」

話の展開についていけなかった江波戸先生が首をかしげる。

「以前に、兄に、私の友達の、名前や住所を、聞かれたことは、ありますか」

判りやすいように、一言一言を区切って質問する。

「いえ、ございません。そもそも私は奈波様のご友人のフルネームも住所も存じ上げません」

兄が私について聞くことのできる相手は江波戸先生と父ぐらいだろう。父は私の友達には一切興味がなく、私が誰と親しいのか全く知らない。

家事をしてくれているハウスキーパーさんたちは、派遣元が個人情報セキュリティ管理にうるさいところなので、そこから漏れることはないだろう。

兄からの手紙はまともだった。兄には私の友達の名前や住所を知るすべはない。兄からと思っていたバスディカードとプレゼントは、友達たちがみんなして、私のブラコンをかわらかっただけなのだろうか。

「ご忠告ありがとうございます。心しておきます」  
私は江波戸先生からメモ片を受け取った。



久々に顔を合わせた兄は普通だった。いやな表現になるが「まとも」だった。三年ぶりに会った私を前と同じようににこやかに迎えてくれた。中学校を卒業したばかりとは思えないほどの落ち着いた雰囲気で、大人びた話し方だった。

「兄さまはどこに就職したの」

「就職というほどのものではないのですけどね。四月からは剣道場の手伝いをするようになっていきますよ」

「剣道場？ 道場の事務員をするの？」

「事務員ではなく指導員です。そうか、奈波は僕が二段を取ったの、知らなかったんですね」

体の弱かった兄が剣道をしているのは想像つかない。いや、剣道に限らず全ての運動系が兄には似合わない。確かに体つきは最後にあったときから比べると大分逞しくなっている。けれども、剣道を「教える」人には到底見えない。

「本来なら二段では指導するに不十分なのです。三段の受験資格は来年にならないともええないので、それまではあくまで『指導の手伝い』です」

私の沈黙を誤解したのか、兄が補足説明をする。

「そうじゃなくて、剣道二段ってすごいなって」

「二段なら誰でも取れますよ」

私は兄が剣道をしているのを知らなかった。最後に兄と会ったのは三年前の祖母の葬儀だ。そのとき、そんな話は出なかったから、剣道を始めたのはそれより後だろう。

「兄さんが剣道を始めたのは中学に入ってからでしょ。たった三年で二段になるなんて、剣道の才能があるんだね」

兄は一瞬悲しそうな目をする。が、すぐに何もなかったがごとく笑顔に戻る。

「僕に剣道の素質はありません。ですから、人の三倍練習しました。三倍の時間をかけても素質のある人にはかないません」

「兄さまは努力家なんだ」

「必要な努力はしないといけませんから。奈波も努力してい

ますか。医者になるのですよね」

父をはじめとして周りからは医師になるように言われている。医師が嫌な訳ではないのだが、まだその決心はしていない。ただ漠然と「結局のところ医師になるんだろうな」と言う思いがあるだけだ。

「なるとは決めてない。まだどうするか悩んでいるところ」  
「奈波には医師の素質があります。今から鍛練していけば、すばらしい医者になれます」

「素質があっても努力しないと駄目なんだ」

「素質を持った奈波が努力をすれば、素質のない人は追いつけません。奈波が努力すれば普通の人の方がたどり着けない高みにたどり着くことができます。その高みの力を以って人々を幸せにしてください。幸せにするために努力してください」

私は兄の言葉にショックを受けた。いままでそういう考え方をしたことがなかった。医師は人を幸せにするための職業だ。にもかかわらず、そう意識したことはなかった。

病院の家に生まれたから医師になる。ただそれだけの思いしかなかった。

今までの私の周りの人もそうだった。「お父さんが病院の院長だから奈波ちゃんもお医者さんになるんでしょ」「奈波は跡取り娘なんだから、今のうちからしっかり勉強して、ちゃんと医大に行きなさい」「中学のときからちゃんと勉強し

ないと医師試験には合格できないよ」「将来自分のために  
なるから、今、勉強しておきなさい」

目的は医師になること。勉強は医師になるために必要な  
こと。みんなそう言っていた。

それを兄は「人様のために、今、勉強しなさい」と言っ  
ているのだ。

脳に障害がある人間はそんなことを言わないだろう。

「お誕生日のカードとプレゼントありがとう」

あのバースデイカードは兄からのカードのはずだ。兄から  
のカードであってほしい。

「あんなものしか送ってあげられなくてごめんなさい」

「うん。とつてもうれしかった。でも、どうして差出人が  
私の友達の名前だったの」

「ある方に助言されました。僕の名前では奈波の手に届く前  
に廃棄されるかもしれないと」

手紙の検閲を受けるほど私は過保護にされていない。苦笑  
いと送り主が兄であったことの安心感から来る笑顔が同時  
に出てしまった。

あの「まとも」な誕生日の手紙は兄からのものだった。そ  
し、脳症を患ったことがあったのだとしても、あの「まとも」  
な文章を書ける程度のまともさはあるということだ。

「私からはプレゼントできなくてごめんなさい」

「こうして就職祝いの挨拶に来てくれるだけでうれしいで  
すよ」

「あっ」

私は思わず大声をあげてしまった。

しまった。今日は兄の就職祝いだった。それなのに私はプ  
レゼントを持ってこなかった。

「ごめんなさい。今日もプレゼント、忘れた」

私がそう言うと、はじめて兄が声に出して笑った。兄の笑  
い声を聞くのは生まれて初めてかもしれない。

「奈波はまだ中学生なのだから、プレゼントなんていりませ  
んよ」

そう言って笑う兄の笑顔はとても素敵だった。



「さつき、私に医師の素質があるって言ってたけど、それは  
父様が医者だからなの」

「剣の素質がない僕が剣道の指導者をやるように、医術の素  
質がない医者もいますが、父様には医術の素質があります。  
母様には医術の素質はないので、奈波のは父様からの遺伝で  
しょう」

「遺伝するんだ。素質もメンデルの法則なんだね」

「メンデルほど単純ではなくて四因子の組合せですけどね」

「四因子ってことは血液型みたいなものね」

「違います。素質は四因子でひとつの因子に十二パターン。血液型は二因子で一因子にパターンが三つあるだけです」

「A、B、O、ABの四パターンじゃないの」

「一因子にA、B、Oの三パターンがあつて、父側から一因子、母側から一因子を受け継ぐのです。血液型はそのときの組合せで決まります。AとA、AとO、OとAはA型。BとB、BとO、OとBがB型。AとB、BとAがAB型。OとOがO型です」

「血液型の遺伝ってそういうことだったんだ」

「メンデルの法則は中学三年で習うのですよね。中学一年の奈波が知らなくても当然です」

兄の脳に障害などない。脳障害を持った人がここまで理路整然と話せるとは思えない。

「兄さまはものすごく物知りなのね。今度、勉強で判らないところ教えてくれる？」

「僕が判るところならよこんで教えますよ。でも、僕が奈波に教えることを父様や江波戸先生は反対するでしょう。まづ父様と話してください」

「何故父様が反対するの」

「父様は奈波のことを大事にしています。奈波のことを色々

心配しているのです」

兄が父と面会しなくなつて三年になる。兄は今の父を知らないらしい。私は大事にされるポジションから脱落しているのだ。

「父様と江波戸先生に話してみます」

父も江波戸先生もノーとは言わないはずだ。私の勉強のためだと言え、江波戸先生は、そのときのおやつ代ぐらいは学資として認めてくれるかもしれない。それどころか、兄へ家庭教師代としていくばくかを支払ってくれるのではないか。

就職するといつても手伝いのようなものであれば給料も少ないはずだ。家庭教師代は生活の足しになるだろう。

「兄さまのやりたいことは剣道だったのね」

「違いますよ。剣道は手段の一つに過ぎません。素質のない僕が剣道に人生をかけるのはもったいないことです」

「では、兄さまの本当にやりたいことは何なの」

兄はにっこりと笑つて答えた。

「人を幸せに導くことです」



このとき私は気づくべきだったのだ。

素質の遺伝子が十二パターン四因子によるものだという理論はどこにもないことに。

そして、まともな社会人は堂々と「人を幸せに導きたい」などとは言わないことに。

このとき兄がまともでないことに気づいていれば、兄の進む道は、異なったものになっただろう。

●●●●●●●● 四章の後

原田《はらだ》公平《こうへい》(コッフェン・フェルド)

「五明総人を知っているか」

私はダイニングテーブルで宿題をしている息子に尋ねた。妻がここにいれば「そういう威圧的な言い方をするところがあるの悪いところよ」とすかさず言っただろう。だが彼女は今、この家にはいない。地域の集まりで今日は夜遅くまで二軒隣の集会所にいる。

結論の出ない話やただの莫迦話のために、近いとはいえ夜遅くまで家をあける必要があるのか、はなはだ疑問だ。だが、それを言ったところで「支持者の方々との会合は必要でしょう」とビジネススマイルで返されるだけだ。

何が支持者なものか。あんなやつらはタダ酒が飲みたいだけ

のただのタカリだ。

そもそも今、我が家は誰も政治にかかわっていない。父は引退し次の選挙も出る気はない。息子はまだ中学生になったばかりだ。弟はここを離れ、東京で働いている。妹の旦那は市議会議員だが、義弟のめんどろまで本家が見なくてはいいいののか。

「勇利、五明総人を知らないか。お前と同じ中学だと聞いたが」

「ああ、おかえりなさい。総人がどうしたって」

二回目の問いかけでやっと息子が顔を上げる。

「どんな奴だ」

冷蔵庫から缶ビールと刺身を取り出し、息子のはす向かいに座る。息子はやおら立ち上がって電子レンジのスイッチを入れる。

「父さんがそう聞いてくるってことは、人助けでもしたんだな、総人」

息子の通う市立中学の名前を聞いたのは隣の課からだ。それはいわゆる不良のケンカだった。防犯ブザーが鳴らされ近所からの通報で警官が駆け付けたときは、相手は消えていて、袋叩きにされた五明総人とおびえる小学生が残されていた。

五明総人はダメージが大きく病院に運ばれたが、小学生はかすり傷程度で、その場で聞き取りが行われた。

その証言から逃げた相手もあたりがついている。相手は別の中学の三年生グループだ。札付きのワルで以前から隣の課では要注意グループとしてあがっている。補導の回数も一回や二回ではない。あと二三年もすれば立派な反社会勢力の準構成員になっているだろう。

簡単な事件で、不良中学生同士のケンカ。それで済むはずだった。

だが、助けられた小学生の話は違う。悪いのは相手方で五明総人は一切悪くないという。

当事者の一方だけの証言で決める訳にはいけないが、目撃者の話や防犯カメラの映像でもそれは確認されている。

さらに今の息子の言葉だ。

警察関係者からの照会なら、普通は「何をしたの」と返ってくるはずだ。それでなければ「何があったの」だ。決して「人助けをしたんだね」ではない。

電子レンジがチンと鳴り、勇利が中からコロツケと肉じやがを取り出す。そしてそれらをこっちによこした。

「私はどんな奴か聞いたのだが」

我ながら言い方がよくないのは承知している。

「セイジンだよ。飯は？ 食う？」

セイジンとは何だ。きつと若者間のはやり言葉なのだろう。他人に伝わらない言葉をわざと使う若い連中には苛立ちを

覚える。だから私自身も隠語は極力使わない。

苛立ちから心を落ちつかせるため、マグロの切り身を口に放り込み、残っていたビールをグツと飲みほした。

「飯は軽くもらう。セイジンとはどういう意味だ」

「セイジンって、ほら聖人君子の聖人。おない年であそこまでの聖人ぶりはみたことないな。で、総人は誰を助けたんだ」

「違う。ケンカだ。五明総人は他校の生徒と殴り合いのケンカをした」

「ありえないね」

そう言うとき息子は米をよそった茶碗を渡してきた。

「総人は聖人で正義の人だから」

「正義だと」

息子は元の席に戻ってシャーペンを取った。

「父さんも正義の人だけど、それは悪を許さない正義だよ。でも総人の正義は人を幸せにする正義。種類が違うんだ」



父が手を回したのだろう。中学生が小学生を助けた美談として、地元のケーブルテレビが五明総人をもちあげた。五明総人の人柄を語る同級生として息子の勇利がカメラの前に立ち「僕も五明君と共にこの街の未来をつくっていきます」

と宣言したのはやりすぎだ。



正直に言おう。自分の子供に警察官としての正義を揶揄されたからだ。それに対して、言い返せなかったのが悔しかったからだ。

徹底的に五明総人のことを調べ上げた。

搬入された三嶽病院は五明総人の父親の病院だった。市立病院や桜徳会病院ほどではないが、この街ではそれに準ずる大きさの総合病院だ。その三嶽義治は五明総人の実父だった。

六年前に離婚し、親権は母親に渡ったため同居はしていない。離婚の原因は不明で財産分与や慰謝料は判らないが、養育費はきちんと支払われているようだ。

三嶽病院の関係者に五明総人の人柄を聞いても「聖人」のイメージは出てこない。影が薄く病弱。かわいそうな子。それが皆の評価だ。

その聞き込みの中で興味深い話を聞いた。

二か月ほど前の祖母の葬儀で、五明総人が親戚の年寄りに首を絞められたというのだ。

大叔父に当たるその人物は現行犯逮捕されたが、被害届が

出されなかったこともあり、拘留後、起訴猶予で釈放された。そしてその三日後、愛人宅のマンションで首をつって自殺している。

二か月で二回も暴行の被害者になるというのは尋常ではない。被害者側にも問題があるはずだ。

直接五明総人と会って話を聞く権限はない。無理に会ってそれが発覚すれば、相手が中学生ということもあって問題になりうる。だが、発覚しなければ問題にならないし、もし発覚したとしても何らかの理由をつけてごまかすことはできる。



偶然を装い、勇利の父として接触を果たす。

五明総人はおとなしくていねいに話す普通の少年だった。斜に構えたものの見方をし、見透かしたような発言もあるが、それは中学生という年代の特性だ。連続して被害者になるような危険性は見えない。話しぶりからしてどちらかという人に好かれるタイプだ。

だが油断はしない。犯罪者の中にもまれにこういう奴がいる。彼らは顔色を一切かえない。それでいて重篤な犯罪を犯す。彼らにはそれが悪という認識がないのだ。



美談をきっかけにケーブルテレビと接点を持った勇利は山口の娘と共に「中学生から見た市政」という番組に参加するようになった。許婚同士を公言する中学生などケーブルテレビにとってはいい見世物なのだろう。

父の戦略が次々と型に収まるのを見て、それに反発してきた身には苦笑いしかなかった。



五明総人に注意をはらいはじめて二年。街の不良グループが逮捕された。今回は補導ではなく逮捕だ。街中で二人に重傷を負わせ現行犯逮捕されている。その際に違法薬物も見つかっている。叩けばホコリはもつとでるはずだ。

逮捕時に「未成年だから逮捕なんかされない」と叫んだそうだが、もちろんそんなことはない。裁かれる場所とその後収監される場所が成年と未成年では異なるだけだ。

成人年齢の引き下げにともなって少年法の対象年齢もさがった。それでもまだあいつらには一年足りない。未成年への判決は甘くなりがちだ。だがあんな奴らを野放しにするの

は危険だ。少しでも重い判決になるよう余罪を厳しく追及している。

その一つとして状況証拠から関与が明らかな五明総人の事件も立件すべく、面通しをさせたのだが、五明総人はあの丁寧な口調で「判りません」と言った。

二年は長いが、自分がこうむった痛みを忘れ去るほどではない。おそらく報復を恐れているのだろう。その証拠に一人一人の名前を口にし「僕の件はあれらが関与したのかは判りませんが、巢を調べれば有罪は明らかです」と言い放った。果たして、その二日後。奴らのたまり場が新たに見つかった。そしてそこには少女の遺体が残されており、複数人で強姦した後、少女を殺害する奴らの姿が映った動画が発見された。

そのことを知っていたかのような五明総人の発言に、今度は被害者ではなく参考人として呼び出した。何故奴ら全員の名前を知っていたのか、なぜ少女のことを知っていたかとの問い詰めに五明総人は感情なく返答した。

「その少女のことは知りません。あれらがいままで何をしてきたかも知りません。ですが、あれらは人ではなく怪物です。それは僕でなくても誰でも見ればわかることです。あれら怪物がすることは人を傷つけることです。野放しにしてはいけません。見かけたら即座に退治すべきです。僕にもっと

力があれば自らあれらを退治できます。ですが僕にはまだそこまでの力はありません。警察の皆さん方に活躍していただかないと人々は幸せに暮らせません。僕も努力して強くなります。強くなったら人ならざる怪物を共に退治しましょう」同僚の多くは笑い、一部は感心した。だが私は背中にゾッする寒さを感じていた。



中学を卒業した五明総人は進学せず剣道場に就職した。そして教習所に通い中型バイクの免許を取った。

高校に行かず、バイクを乗り回し、力を求めて道場に通う十六歳。そう聞けばただの不良少年としか聞こえない。

だが乗っているバイクは改造車ではなく親戚から譲り受けた中古車だ。剣道場にも真面目に顔を出して働いている。進学しなかったことにより父親からの養育費がどうなったのかは知らない。通常だと成人するまで、もしくは就職するまでが養育費の支払期間だろう。

成人になるまでとしていた後輩が、成人年齢引き下げによって二年得をしたと喜んでいたが、そんなことで喜ぶような奴だから離婚されたという事実には気づいていないようだ。



高校生となった息子の勇利は相変わらずケーブルテレビの番組に出ている。タイトルは「高校生が作る未来の政治」に変わっていた。

そして、勇利が十八になり、山口の娘が十八歳の誕生日を迎えた日、勇利と山口の娘、山口加恋は結婚した。

昔は二十歳未満の結婚には親の同意が必要だった。だが、今は結婚年齢が男女ともに十八歳となり、成人年齢も十八歳だ。結婚に親の同意はいらない。

その結婚式場で、来ていた五明総人と顔を合わせた。ケーブルテレビのカメラも入っていたが、それに臆することなく五明総人は友人代表としてにこやかに若い二人の栄光の未来を語った。胡散臭い占い師がするような話に大人の大半は笑ったが、一部の大人と子供の多くは新郎新婦をはやしたてながら大きく拍手をしていた。

そしてその拍手は、その直後に行われた勇利の七年後の市長選出馬宣言でさらに大きくなった。

なかでも満面の笑みで拍手しているのは父と山口だ。私は父の戦略にまんまと乗ってしまった勇利に対し肩をすくめることしかできなかった。

大川《おおかわ》美風《みかぜ》（ミカエラ・グロサーフロス）

ベッドに横たわる引き締まった背中を見て、何故こうなってしまったのかという思いと、やっぱりこうなってしまったかとの思いが、途切れることなく寄せては返す波のように私の心を揺らしていた。

私には姉と二人の兄がいると聞く。兄たちには会ったことがない。姉は数度、会っただけだ。年賀状のやり取りさえない間柄なので、見知らぬ番号からの電話が姉からの連絡とは思わなかった。だから、通話を受けるなり「あのバイク、まだある？ 使ってる？」と聞かれたときには何を言っているのかとつさには理解できなかった。

姉と初めて会ったのは中学の卒業式の日だ。当時の私は父と二人で山の中の古い家に住んでいた。物心ついたときから父と二人きりの生活だったので、それは当然のこととしてとらえていた。

父は武骨でおとなしい人だった。私が生まれたときはもう

五十近くで、運動会や参観日に顔を出すと「誰のじいさんだ」と言われることもあった。

その父が卒業式の三日前に入院した。前から具合が悪かったようだが私はそれに気づいてなかった。本人は卒業式の後に入院するつもりだったらしい。だが、医者がそれを許さなかった。

卒業式当日の朝、一人で準備していると玄関の呼び鈴が鳴った。隣のおばちゃんなら呼び鈴など鳴らさず「美風ちゃんいる？」と言いながら玄関を開けるはずだ。

朝早くからの訪問者に顔をしかめながら玄関をあけた。そこには小さな男の子の手をとった見知らぬ女性が立っていた。

こぎれいな服を着て、子供の手を引いて家々を訪問する。私を知っているのは、あの迷惑なキリスト傍系団体の嫌がらせにも近い押しかけ説教だ。どう断ろうか考える私にその女性是不機嫌そうに口を開いた。

「美風？ 私は千波。あんたの母親の娘。準備できてる？

学校に案内して」

早口でそう言い放ち、引きずるように男の子の手を引っ張りながら玄関も閉めずに庭から出ていった。

私はあっけにとられた。あわてて支度をし、あとを追いかけた。家の前にタクシーが停まっていて、助手席に女性が、

運転席の後ろには男の子が座っていた。私は後部座席に乗り込み、運転手に学校名を告げた。動き出した車の中で女性は前を見たまま独り言のように話した。

「身内として卒業式に出てくられて、あんたの父親に頼まれたから。その子は総人。私の子」

その後はなんの会話もないままタクシーは学校へ向かった。車の中では男の子の咳だけが響いていた。

二回目はそれから二年後だった。当時の私は少し荒れていた。父は入院を繰り返し、その度に具合が悪くなっていた。父が入院しているときは大きな家に私一人だ。高校に入ってから母屋ではなく離れで暮らしていたので、父が家にいる時も気兼ねなく友人を呼べた。そんな場所は恰好のたまり場だ。集まる友達に誘われるまま、髪を金髪にし、週末はバイクの後ろに乗っていた。

父は具合が悪くなつて車を運転しなくなつた。田舎には車が必要だ。そんな屁理屈をこね、バイクの教習所に通つた。教習所の終業が間近になつたとき、家に帰ると姉がいた。

「あんた、バイク欲しいんだってね。私、離婚で慰謝料たんまりふんだくつたから買ったげる」

そう言つて私の顔をじつと見た。

「よけいなおせっかいだつて判つてるけど、やなこと言わせ

てもらふよ。あんたも私もあの女の血をひいてるから。私は忘れてて失敗した。今回の結果がそう。でももう忘れない。あんたもそれを忘れないほうがいい」

高校一年生になつてすぐボーイフレンドができた。初恋のような淡い恋でキスはしたがそれ以上はなかった。夏前に気持ちがさめてしまい、夏休みに別れた。

二人目は秋に文化祭の準備で仲良くなつた同級生だ。その彼が初めての男になつた。けれど、二年生になつてクラスが別になると自然消滅してしまつた。

姉と二回目に会つたとき付き合つていたのは三人目で、彼のバイクの後ろではしゃいでいた頃だ。集会後は朝までベッドで過ごしたりしていた男だ。

小さいころから一目惚れが多かつた。優しい言葉をかけられればすぐ好きになつていた。それは今も変わらない。

私の母は姉を生んだあと男を作つて家を出た。しばらくすると男と別れ、別の男と結婚した。そこで二人の男の子を生んだが、家を追い出された。そして、私の父と結婚した。私を生んで三年たつたとき、父のもとから姿を消した。今は伊東だか熱海だかで若い男と暮らしているらしい。

母は浮気性だ。姉に言われるまで考えたこともなかったが、私もそうなのかもしれない。姉も私もその母の血を半分受け継いでいる。同じ血をひくものとして姉の言葉はズシリと響

いた。

一週間後、届いたのはヤマハのオフロードバイクとフルフェイスのヘルメットだった。集会には似合わないバイクだ。もしかするとそれは姉の計算だったのかもしれないし、単なる嫌がらせだったのかもしれない。

私はオフロードバイクに乗った。街も野もオフロードバイクで走った。そこで風を切る楽しさを知った。暴走集会への参加は少なくなり、男とも遊ばなくなった。

姉の策略にはまってしまった気がして悔しかった。

そのバイクをくれないかと言う。

地元の中小企業に就職してから新しいバイクを買った。だから姉からもらったヤマハは使っていない。

次回の税金納付の前には廃車にするか中古車として売ろうと思っていたくらいだ。譲り渡すのに何の不都合もない。知り合いに頼んで、軽トラにバイクを乗せて運んでもらった。助手席に乗ろうとしたら「俺は降ろしたら帰るから。積む話もあるだろ」と言われ、バイクで先導することになった。

置いて、ちょっと話して、すぐ帰るつもりだった。平日の昼間だから甥は学校だろう。そう思っていた。でも彼は家にいた。背は低いが凛々しい体つきをしている。

彼は私を見てなつかしように、うれしそうに笑った。

会ったのは中学の卒業式の一度だけだ。小学校に上がる前の子が私のことを覚えてはいないだろう。

「こんにちは。前に一回会っただけだけど私のこと憶えてる？」

「うつすらとおぼえています。『男の子なら体を強くしたほうがいいよ』とアドバイスしてくれました。そのとき、いい匂いがしたのもおぼえています」

それは嘘だ。正しくない。美化しすぎだ。

思い出したのは一葉の写真だ。それは箆笥の上に飾られていた。

卒業式と書かれた看板の前で、左手に持った一輪のチューリップをだらりとたらし、にらみつけるように前を向いて涙を浮かべている私。私の左には下を向いた男の子。右手には姉。姉は正面を見ずに目をそらしている。そんな三人が写った写真だった。

それは卒業式が終わった後にケータイで撮られた写真だ。最後のホームルームが終わり、校門を出ようとしたとき、男の子が咳をしながら寄ってきた。

「美風お姉ちゃん、卒業おめでとう」

小さな声でそう言い、一輪のチューリップを渡してきた。

「私がちゃんと式に出たっていう証拠の写真撮るよ」

姉はそういう放ち、私を看板の前に立たせ、たまたまそばにいた隣のクラスの父兄にケータイを渡した。

そのときの涙は卒業式の感動ではない。見知らぬ人と写真を撮らなければならない悲しきで涙したのだ。写真では左手でチューリップを持っていた。小さな男の子は左側に立っている。いい匂いは私の匂いではない。きっとチューリップの匂いだ。

そして私は男の子にこう言ったのだ。

「咳ばかりでみつともない。男のくせに」

車で送ると言う姉をことわり、泣きながら走って帰った。もらったチューリップは走りながら用水路に捨てた。父は後日贈られてきた写真をかぎり、涙の私を見て「出席できなくてごめん」とあやまった。

「でも、こんなことでもなければお姉さんとは会えなかったから」

私は明るくそう答えたが、父にはそれが本心でないことは判っていたようだ。

その写真はバイクをもらった一年後、父の遺品整理で捨てた。その時点で私と姉をつなぐものは、バイクと母の血だけになった。

その片方であるバイクを失うことに気付いてしまったからかもしれない。それと、あの時の大人げない発言の謝罪もあつたのだろう。私は試乗の付き添いを申し出ていた。

風が通り抜ける湘南平の展望台でバイクの名前を聞かれてしまった。なぜ高校生の私はバイクに名前を付けてしまったのだろう。

「ウインドブリンガー。風を呼ぶ子」

恥ずかしさで顔を赤くする私に向かって、彼は言った。

「美風さんはいい匂いがします」

それはきつと今朝つけた香水の香りだ。

私は総人を仲間とのツーリングに誘うようになった。私の休日は取引先との関係で水曜と木曜だ。ツーリング仲間の主要メンバーも水曜か木曜が休みの人が多い。そういう人たちが集まってできたグループだ。

総人は学校に行かず、剣道場で働いているらしい。土日は稼ぎ時で平日は夕方から出勤。休みは平日に二日休んでいいという、ゆるい職場のようだ。月に二回程度行っているツーリングにもたいてい参加している。

さすがに泊りがけのときは宿泊せず、道場がある日は早め

に帰っている。そのときは私も付き合って早く帰ることにしている。それは保護者としての責任感があるからだ。

いや、正直に言おう。総人と一緒にいたいからだ。

ツーリング仲間である自動車修理工場の社長夫婦と総人と私の四人で河口湖に来た。

夕方まで精進湖、西湖、河口湖ですごし、ペンションに泊まる夫婦を残し帰路についた。山中湖をすぎたあたりで雲行きが怪しくなり籠坂峠で土砂降りになった。小山の手前のガソリンスタンドでしばらく雨宿りしたが、一向にやみそうにない。

覚悟を決めて走り出したら、今度はウィンドブリンガーの調子が悪くなった。ギア系のトラブルだろう。低速では進むが速度が出ない。

私は雨の中、肩をすくめた。総人は困ったように周りを見渡し「あそこで休みましょう」と指をさした。

それは派手な照明のラブホテルだった。

「意味判って言ってるの？」

「はい」

「判ったうえで、私と、あそこに行きたいっていうの？」

「はい。美風さんと行きたいです。美風さん以外とは行きたくないです。あそこで休憩してからバイクを調べましょう」

「休憩。ね」

私は息を吐いた。頭の中でそのような展開を妄想したことはある。それは現実にはなりえない妄想だったはずだ。

「ついてきて」

私はゆっくりとバイクを走らせた。

総人は私を突きながらとろけてしまう言葉をささやいてくれた。

ずっと美風さんのそばにいます。美風さんを幸せにします。美風さんが好きです。

翌朝、物音で目をさますと、そこには両手と顔を油まみれにした総人がいた。

「ギアに草がからまっていました」

そう言っさわやかに笑う総人は輝いていた。私は裸のままベッドから飛び起き、総人を抱きしめた。

総人が耳元で「美風さんも油で汚れちゃいますよ」というが、そんなことは構わない。私はわざと油に汚れた頬に私の頬を押し付けた。そして熱いキスをした。

「二人とも汚れちゃったから、一緒にお風呂入ろうか」

そして、愛し合った。

裸で寝ている総人の背中を見て、すぐ人を好きになったしまう母の血を呪った。ただ、それを血のせいだけにするつもりはない。これは私が選んだ結果であり、私が選んだ未来だ。

●●●●●●●●七章の後

飯塚《いいづか》徹《とおる》（トール・レスフェゲル）

司会業をしていて面倒な結婚式は政治家のからむ式と未成年の式だ。いや、今はもう未成年は結婚できない。十八はもう成人だ。面倒なのは政治家と十代、もしくは二十そこそこの結婚式だ。政治家は式に関係ない選挙演説を長々と言う。若者は学生のノリで進み、ともに進行できない。

だから、今回の仕事は最悪の仕事だ。

前市長の孫と市議の娘。どちらも十八歳の高校生。出席者の三分の一は政治家で、三分の一が高校生。高校生は市議の挨拶など聞かないだろうし、年寄りには高校生のバカ騒ぎにまゆをひそめるだろう。

乾杯から始まって、市会議長、市議の挨拶が続く。議長はさすがで若者の興味を引くような短い話をした。次の若手議員もよかった。だが、この年寄りは駄目だ。内容のない政治

の話を延々と繰り返している。これでは高校生でなくても飽きてしまう。

司会者は場をまわすのが仕事だ。そのためのテクニクも持っている。年寄りが文脈を区切った瞬間、マイクの前で拍手をした。

「ありがとうございます。ためになるお話、若い二人のこれから大変役立つでしょう」

年寄りとはがめるようにこちらを見るが、それは平然と無視させてもらう。

「続きまして、ケーブルテレビ秦野伊勢原の松永様よりお言葉をお頂戴いたたく存じます。松永様は新郎新婦が中学生のころからのお付き合いで、ともに『学生と市政』についての番組を作られてきたと伺っています」

拍手をして、次を呼んでしまえば、話し続けたくともできない。次の相手がローカルとはいえメディアであればなおさらだ。

選挙演説とありきたりな祝辞がいくつか終わり「しばしご歓談を」とした。高校生たちは高砂に集まり、新郎新婦と話している。政治家たちは顔は笑顔で腹の中は探り合いだ。

ここで時間を確認する。あと十分ぐらいはこのままでいいだろう。その後は。

手元の式次第を確認していると、声をかけられた。見れば新郎と高校生の一人が横にいて私を見ている。

「いかがされましたか」

「岡口がスピーチを遠慮したいって急に言い出しまして」

新郎の言葉に横の高校生が恥かしそうにうつむき消え入りそうな声で「すみません」とつぶやいた。

おそらくは学校のノリでスピーチを承諾したものの、スピーチ慣れた大人たちの挨拶を目の当たりにしてビビったのだろう。スピーチ取りやめなどよくある話だ。その程度なら何の問題もない。

「かしこまりました。ではご友人ご挨拶はなしといたしましたよう。それとも別の方に頼めますか」

大勢の挨拶があるのだ。一人ぐらいうめても不都合はない。その程度の時間調整はいくらでもできる。逆にこの場で急に話をしてくれと言われたら、頼まれた方が困るだろ。普通でさえそうなのに、友人が高校生であればなおさらだ。

「そうですね。では、総人、五明総人に挨拶してもらいましょう。彼なら加恋のことも知ってますから」

新郎と新婦の双方を知っているからと言って誰でもスピーチできる訳ではない。もしかして、これは新手のいじめではないかと疑ってしまう。私は、席次表から五明の文字を探した。

「では私から五明様にお声をおかけします。もし、五明様のご辞退されましたら、友人代表はスキップさせていただきます」

「はい、お手数をおかけしますが、それでお願います」

そう言うとき新郎はすまなそうに下を向く高校生の背中を叩きながら高砂に戻っていった。

五明はおとなしそうで人がよさそうだった。他の高校生とは交わらず、一人で料理をつづいていた。

「五明様、突然のお話で誠に心苦しいのですが、このあとご友人代表としてご挨拶を頂戴いただけませんか」

「僕でよろしいのですか」

「予定されていた方のご都合が悪くなりました。そうしましたところ、新郎の原田様が五明様に代わりにご挨拶をいただけないかと申されました」

「そうですね。ではよろこんで祝辞を述べさせていただきます」

断られるだろうとの予想は見事にはずれ、二つ返事で承諾されてしまった。口調も丁寧で笑顔も非の打ちどころがない。高校生らしくないその姿に私はうすら寒いものを感じていた。



ただいまご紹介にあずかりました五明総人です。

勇利、加恋さん、結婚おめでとう。

結婚式での二人の幸せな姿とここでの二人の嬉しそうな顔、そしてここにいるみなさんの幸せそうな顔を見て『ああ、結婚っていいなあ。みんなを幸せにできるんだ』って実感しました。

二人を見て、僕も早く結婚したくなりました。

人を幸せな気持ちにするのは子供の誕生もそうですね。結婚は二人に先を越されてしまいました。子供の誕生は僕が先を目指しますよ。

僕が二人と初めて会ったのは中学校に入ったときでした。そのころから二人は仲良くいつも一緒にいて、いつも幸せそうでした。

今の僕の体形からは想像つかないかもしれませんが、そのころの僕は体が弱く学校も休みがちでした。そんなことから友達も少なく、教室の隅で目立たないようおとなしくしている子供でした。

でも勇利はそんな僕にも親しげに声をかけてくれましたね。僕だけでなく、みんなにも声をかけていました。

ときどき暴走することもあるけど、そんなときは加恋さんがブレーキをかけていて、その姿は微笑ましかったです。

中学を卒業してからは、たまに顔を合わせる程度になってしまいました。が、高校に入ってからきつと、中学のときと同じような関係、同じような風景、同じような想い合いが続いていたのですね。

だから今日という喜ばしい日が訪れたのです。

勇利、加恋さん、憶えていますか。学校の図書館で占いの本を読んでいた僕に二人の将来を占って欲しいと言ったことを。そのとき僕がこう言ったのを、『二人は幸せな結婚をします』と。

そのときは占いの勉強を始めたばかりだったので、実はちょっとだけ不安だったのです。

でも、今日の二人の晴れ姿を見て安心できました。

ちゃんと僕が言ったように『幸せな結婚』となったのですから。

先のご祝辞でもみなさん、二人の素晴らしい未来を語っておられました。ですから僕も先ほど二人の未来を占ってみました。

二人はお互いを助け合いながら幸せな結婚生活を送ります。

長男が生まれ、長女が生まれ、秦野の市長となり、その一年後に双子を授かり、四人の子供に囲まれながら楽しく過ごすでしょう。

もちろん辛いこともあるはずですが。でもそれはみんなで助け合えば乗りこえられる辛さです。ご家族だけ乗りこえられないようでしたら、僕たちを頼ってください。

今日、僕たちは勇利と加恋さんから幸せを分けてもらいました。その分のお返しはいつでもします。

僕は引越して、今は中井に住んでいます。秦野市長選挙の投票権はありません。ですから選挙違反を気にせず発言します。

秦野に住む十八歳以上、二十五歳以下の人は一万四千人です。十八歳から三十歳だと二万人です。先の市長選で次点候補の得票数は二万でした。

勇利が被選挙権を得たとき、同世代の全員が勇利に投票すれば次点の得票数に達するのです。僕たちの力で秦野の人たちを幸せにすることができるとのことです。

もちろん次点では市長になれません。でも、ここにいるのは僕たち若者だけではありません。僕らより人生を長く過ごしている大先輩方が大勢います。

大先輩のみなさん、思い浮かべてください。皆さんが尊敬している人、あこがれている人、目標にしている人は誰ですか。

きっと、若いとき、そう、今の勇利や加恋さんと同じくらいのとくに、会ったか、見たか、本で読んだかして感銘を受

け、影響を受けた人ではないでしょうか。

若いときに受けた恩や影響は齢を重ねてもずっと心に残ります。逆に若いときに負った心の傷も忘れることなくにくすぶり続けます。

みなさんにお願いです。若い勇利と加恋さんを愛情をもって育ててください。愛情をもって指導してください。勇利と加恋さんはそれを忘れません。僕らはそれを忘れません。

僕たちの世代の力とみなさんの力があれば、三万の票はたやすいはずです。四万も五万も不可能ではありません。

勇利、加恋さん。幸せな家庭を築いてください。人々を幸せにしてください。そのために僕らを頼ってください。ここにいるみんなを頼ってください。そして、みんなで幸せになりましょう。みんな、みんなを幸せにしましょう。

勇利、加恋さん。結婚おめでとう。お幸せに。



気がつくとは私は拍手をしていた。これはスピーチを打ち切らせるための拍手ではない。感心をあらわす拍手だ。五分前に依頼を受けたスピーチでここまで話せる者は大人でもそういない。

「五明様、心に残るお言葉、ありがとうございます。新郎新

婦の心にもきざまれるでしょう。続きまして、新婦の叔父様から木遣り唄を披露していただきたく存じます。その準備に少々お時間を頂戴させていただきます」

式の合間で再び五明の席に向かった。五明は一人、料理をつついていた。

「五明様、先ほどは急なお願いに対応いただきありがとうございますございました」

「少しでもお役に立てたのなら幸いです」

「素晴らしいごあいさつで感銘を受けました」

「僕は勇利に比べればまだまだです」

そう言つて、誰もいない壁に向かってにつこりと微笑んだ。その笑顔に何故か背中が寒くなった。

●●●●●●●●●●七章の後

杉山《すぎやま》志恩《しよーん》（シヨーン・セダーベルグ）

私は古い師を信じない。テレビの星占いなどはついつい見してしまうが、面と向かつてどうとでも取れることを言う占い師は口が上手いだけの詐欺師と同じ人種だと思っている。

だから目の前の青年がいかにも占い師が言いそうな言葉を口にしたとき、胡散臭いものを見る目になってしまったのはいたしかたないだろう。

「あいまいな言葉ですね」

口調の強さに理沙が少し驚いている。

「具体的なことがよかったですか。では」

青年は名前と生年月日を書かれたメモ紙に目を落とした。

「すぎやましよーんさん。生まれた日はこの日でもいいですか。

一日あとではないですか」

私は思わず息をのんだ。

父方の祖母は移民の子としてペルーで生まれた。国籍はペルーだが遺伝子は百パーセント日本人だ。その祖母がメキシコ旅行中にイタリア系アメリカ人の祖父と出会った。二年後、アメリカで父が生まれる。父の遺伝子は半分が日本、四分の一がイタリア、残り四分の一がアメリカのアメリカ人だ。二百数十年の歴史しかない国の遺伝子の割合はどう評価すべきか微妙だが、父の申告によるとそうなる。

その父が軍に入隊した。母は横須賀で父と出会い、基地の病院で私を生んだ。

そのころスマートフォンはなかったが、インターネットは存在していた。

父は孫の誕生を両親にメールで知らせた。

祖父からの返事はすぐに返ってきたと言う。

「イースターの晩に生まれるなんてなんて喜ばしい子なんだ」

だが、日本ではすでに翌日の明け方になっていた。だから、私はイースター生まれのアメリカ人で、その翌日生まれの日本人。遺伝子的には日本が四分の三、イタリアとアメリカが八分の一の二重国籍者だ。

日本での公式記録は四月十六日生まれだが、公的書類をのぞいて誕生日は四月十五日と記載してる。それはプライバシーセキュリティーのためだ。

日本名は杉山志恩。アメリカ名はショーン・ジョルダーニ。父が名をつけ、母が漢字をあてた。

志恩の字を見ると、すべての人が「しおん」と発音した。初見で「しょーん」と読んだ人はいない。いなかった。

だが、にこやかに微笑むこの青年は、誕生日のずれを指摘し、志恩を「しょーん」と読んだ。

結婚式の当日は朝から雨だった。大した降りではなかったのに気にせず車を出した。だが、駐車場で車から降りるとき水たまりに足を入れてしまい靴下に泥をつけてしまった。

その瞬間「雨用の靴と替えの靴下を持っていかないと後悔

します」と、にこやかに告げる青年の言葉が頭の中によみがえってきた。

## ●●●●●●●● 八章の後

城所《きどころ》潤《じゅん》（ジャン・ボウグスタッド）

母が若い占い師のもとに入り浸っている。そう聞いたのは七月の中頃だった。

五年前に父を亡くしてから母は田舎で一人暮らしをしている。こっちで一緒に暮らさないと声をかけたが即答で断られた。その返事に内心ほっとしている自分がいた。

同居を提案したものの実際に来られてしまったら困ってしまう。

母と妻は折り合いがつかないだろう。部屋の問題もある。夫婦の寝室に子供たちの部屋が二部屋。あとはリビングダイニング。母が来ても寝るところはない。子供部屋を一部屋あけ渡すことになる。中学二年の娘は小学六年の弟と同じ部屋になるのを嫌がるだろう。

車を使えば十五分で行き来できる今の距離が最適だ。

三日後、藤沢に住む姉から電話が入った。母が占い師に貢

いでいるらしいから確認しろ。そんな内容だった。

ここから実家まで十五分ほどだ。だが、姉の家からでも車で一時間もかからない。人を頼らないで自分で動けと指摘したが、忙しいとか子供の面倒がとか、くだらない理由を言ってくる。こっちだって子供がいるし、仕事もしている。

「賁いでるってのが上の美風のとこの若い男。美風とあんたは歳が近いでしょ。あんたはあんな金髪暴走族にうちの財産、巻き上げられて平気なのっ」

上の美風。実家の前の道をのぼった先にある家。歳が近いと言われても十近く離れていたはずだ。小学校でさえかぶっていないので親しい訳ではない。顔を見ればあいさつぐらいはするが、その程度だ。

美風は高校生のころからバイクを乗り回していた。自分の父親の葬式に、ものすごい金髪で姿を現したときは、周りにはあきたものだ。確かにそんな女とつるんでいる輩に母の金を盗られるのは気分が悪い。

翌日、午後半休を取って実家に向かった。玄関を開け声をかけるが反応はない。縁側にまわって中を見ても誰もいない。玄関に鍵はかかってなかった。近所にいるなら鍵などかけない。このあたりの田舎ではみんなそうだ。ここに住んでいるときはそれが当然で何とも思っていなかった。だが街に住むようになるそれがとてつもなく不用心に思えてしまう。

縁側の脇の下駄箱の裏。そこが鍵の置き場だ。そこから鍵を取り出し玄関を閉め元に戻す。そして、実家の前の坂をのぼっていった。

「お袋っ。ここにいるのかっ」

坂の上の家の庭に入るなり母を呼ぶ。大きな声になったのもきつい口調になったのも仕方ないだろう。

古い大きな母屋は全てのガラス戸があげ放たれていた。今はこんな田舎でも各家にエアコンぐらいは入っている。こんな暑い日は全ての戸を閉め、クーラーの効いた部屋で過ごすのが普通だ。その家はそれをしていないらしい。

全てが開いている母屋の中に数人の年寄りと共に母がいた。

「こんなんに入り浸ってんな。けえるぞ」

廊下の近くに座っていた母に向かって腕を伸ばし外に連れ出そうとした。

「おう、潤じゃねえか。なあにあわててんだあよ」

のんきな声のほうを見れば、そこに叔父もいた。母は「まあちゃんかよっちゃんになんかあったのけ」とおろおろしている。

「いいからけるぞ。叔父さんも帰ったほうがいいよ」

二人を諭そうとしているとき目の前にあらわれたのは、背

は低いががっしりとした体格の青年だった。

「照枝さん、いい息子さんですね。心配で迎えに来てくれましたよ」

そう言つてニコニコ笑っている。

「富夫さん、一緒に家まで送つてあげてください」

占い師と聞いていたのでヒョロヒョロの青白い細身で陰気な男を想像していたのだが、ニコニコ笑い続ける男はその想像とはまるで違つていた。その男を睨みつけ母と叔父の手をとり、引きずるように外へ抜け出した。

「いい歳してあんな若い男に金つぎ込むなんて、何、考えてんだっ」

家に帰つて仏間で怒鳴りつける。母は面食らつた顔をしていたが、やがてうなずきながら笑いだした。

「何、ヘラヘラしてんだ。いい加減に目を醒ませっ」

叱りとばすが、叔父まで笑い出す。

「おう、潤坊。その話、隆からから聞いたんだべ」

隆二郎はこの集落に住む五歳年下だ。確かに最初の報告は隆二郎からだった。珍しいメールに何かと思つたのが最初だ。

「ねえちゃんからも聞いた」

その返事に叔父と母は声を出して笑い始めた。

「ったく、隆はしょうがねえなあ。そんなだからフラれんだよ」

叔父はスマホを取り出し、手慣れた仕草で電話をかけ、スピーカーモードにし三人の間に置いた。

「おう、真理か。お前、ばあちゃんが美風のとこしよっちゅう行つてんで、誰に聞いた？」

「あ、富おじちゃん。誰つて。あ、潤がそっち行つたのね」

「で、誰から聞いた」

「笹屋の次男よ」

「やつぱりそうだんべと思つたんだよ」

小清水隆二郎。屋号は笹屋。この集落に今でも住んでいる。長男の功一郎とは同級だ。確か功一郎と隆二郎は五歳差だった。だから、小学校も二年ほどかぶっている。美風と接点はないが隆二郎なら多少はある。

「隆が美風に惚れたてのは知つてんべ」

「まあね」

「知らねえよ」

姉は知つていたようだ。

「だから美風の旦那に嫌がらせしてんだあよ」

「あつそ」

「細かいことは潤に話しとくからあとで聞けや」

「あ、うん」

叔父はスマホをつかみ、ささつと操作して通話を切った。

「岩本の本家の孝之、知ってんべ。先月、お前とおんなじように乗り込んで、どなりちらしてったんだよ。よくよく聞いたら笹屋の隆から、美風んとこの若い男が本家の金をだまし取ってんて言われたんだとよ。どうだ、おんなじだべ」

同じだが、それは大勢が同じ目にあっていることの証明であって、母が騙されてないことの証明ではない。

「美風んとこに何も持ってってねえのかよ」

「持ってってんよ」

「じゃあ、隆二郎の言ってるのは本当のことじゃねえか。今日はいくら持ってた」

「今日はうちの当番じゃねいからなんにも持ってってないよ」

「いままでにくらつき込んだんだ」

母と叔父は目を合わせて笑いを押さえている。

「総人は金、受け取らねえからな。持ってくのはお茶菓子かお茶請けの漬物ぐれいだ。今日は俺がキュウリとヘチマの漬物、持ってた」

「ヘチマはあんまおいしくなかったねえ」

「漬かり方が浅かったな。今度うちの嫁に漬け方教えてやってくれよ」

「今の若い人は漬物なんかしないからねえ」

「じゃあ、金は持ってってねえんだな」

話しがずれてきたのであわてて元に戻す。

「風騎が生まれたときも、莉子ちゃんが生まれたときも、お祝いをあげたよ」

「そういうことじゃねえ」

年寄りたちの話を要約するとうだ。

美風の家は年寄りの溜まり場。茶菓子持参で寄合所のように使っている。そのとき子供の面倒を見ている。金は一切渡していない。隆二郎が嫌がらせをしている。その程度のことだった。

すぐに話が脱線するものだから、そこまで聞きだすのに結構時間がかかってしまった。

「おばちゃん。迷惑かけたみたいでごめんね。あがるよ」

そんな声がしたのは玄関の戸が開く音がした直後だった。それからすぐにリビングの扉が開けられた。そこに顔を出したのは少し赤ら顔のボブカットの落ち着いた感じの女性だった。

「あ、潤にいちゃん。今日は迷惑かけてごめんなさいね」

「美風か」

「お久しぶりです」

「だいたいイメージ変わったな」

はにかんだ美風には金髪で派手な化粧をしていたころの面影はない。

「いつまでもとんがった恰好なんかできないよ。いい歳だし、もう子供が二人もいるんだから」

「そうか美風ももうお母さんか」

「もう一日中大変よ。おばちゃんやおじちゃんが手伝ってくれんのが、とつてもありがたいよ」

「今、いくつだ」

「上が二歳で、下が八ヶ月」

「じゃあ、これからもっと大変になるぞ」

「おどかさないでよ」

「お前んとこのは保母さんだったんだろ。美風に子育て教えてやってくれよ」

「そうだべ。もつとけえってこい。そうすりゃあ、誰かに嘘吹き込まれることもなかんべ」

「やっぱり笹屋だった？」

「おう。真理にも吹き込んでたぞ」

「俺も悪かったな。隆二郎の話を鵜呑みにして乗り込んだりして」

「ま、私もちゃんと籍入ってる訳じゃないから、周りから見るといろいろ言いたくなるんだろうね」

さらにと爆弾をぶち込んでくる。こちらは戸惑うが本人も母も平気な顔だ。タッパージュアに入ったミニトマトを渡して「まだ洗ってないからね。全然大きくならないのよ」とか「農薬撒かないから虫に食われるのよ」とかい合っている。子供を二人も生ませてといて籍も入れない。隆二郎の人物評価のほうが正しいのではないか。

「結婚してねえのか？」

「形だけけど式は挙げたよ。籍は、うんとね。ま、いろいろあつて。総人のお母さんは口もきいてくれないし」

「子供は認知してくれてんだから、いいのよ、籍なんて。姑なんていないほうがどれだけ楽か」

「わりいな、ねえさん。お袋も気が強かったかな」

「ごめん、ごめん。富夫のお母さんだったね」

口癖が「私の目の黒い内は」だった祖母は母といつもいがみ合っていた。子供の目から見ても仲がいいとは言えなかった。その風景が母との同居に積極的になれない理由の一つだ。

畑を売ることや家の建て替えに反対していた祖母が亡くなったとたん、母は田畑を売り払い、家を建て直した。そして、建前の日に叔父や叔母の前で「目が白くなってくれたから、やっと家を新しくすることができると云い放ったのだ。

「そんなものなのかな。私はお母さんもおばあちゃんもいな

かつたから、嫁姑って判んないんだよね」

「何言ってるの。今、美風がやってるのが嫁姑よ。そんなどの家にもある普通のことよ」

その言葉に女性陣は笑い合い、男性陣は肩をすくめたのだった。

ひとしきり笑ったあと、帰ると言う美風を玄関まで送った。

「今日は照おばちゃん、よくしゃべってたね。潤にいちやんが帰ってきてよっぽど嬉しかったんだろうね。富おじちゃんじゃないけど、たまには帰ってきてあげて」

「お袋、普段は違うのか」

「いつもはちよつと寂しそうにしているよ。うちに来る人はみんなそう。きつと、総人は淋しい人に好かれるんだろいうね。だから、茶碗屋とか高橋さんほうちには来ないんだよ」

「そうか。判った。美風んところにも迷惑かけたこと謝り行かなきゃいけないからな。近いうちにまた来るよ」

「うちはいいよ。潤にいちやんは土日休みでしょ。うちは二人とも水木休みで土日は家にいないから」

そう言いながら玄関から出ていく美風の背中はどこか寂しそうに見えた。

翌週の水曜日、街の洋菓子店のマカロンを手土産に美風の家を訪ねた。そして、そこでじつくり総人と話した。総人は

気味が悪いくらい礼儀正しい若者だった。別れ際に彼が言った言葉は頭の中に残っている。

「美風さんと子供たちは僕が全霊をもって守ります」

そして悟った。意見すべきは総人ではなく隆二郎だ。

●●●●●十一章の後

柳川《やながわ》かな恵《え》(キャナリー・ヴァイデストルーム)

「柳川さんは総人のこと好きですよね」

園長先生の奥さんに自宅に招かれ、伺った客間でそう聞かれた。私は何と答えていいのか判らない。そんな私を見て奥さんは一瞬淋しそうに笑った。

いつもは楽しそうにこやかで、子供が悪さをしたときだけはキツイ表情で叱る奥さんは、時々、淋しそうな顔をする。いつもにこやかで芯の強い女性が見せる一瞬の愁いを帯びた表情が男性の心をくすぐるのだろう。奥さんは男の人に人がある。

「総人はどこかアンバランスでしょ。そんなところが女性を惹きつけるのよね」

その通りだ。背の割には骨太で細マッチョの体格。幼さの残る顔立ちなのに、三人の子持ち。親しげな表情をしながら口調はよそよそしくやたらと丁寧。

その違和感からどこか不安定な感じを受けてしまうのだ。その不安定さが母性本能をくすぐる。だから園長先生は皆から好かれる。私もその中の一人だ。そう、私は園長先生が好きだ。

園長先生は三嶽奈波さんのお兄さんだ。奈波とは小学校の頃からの友達だ。小学校、中学校、高校と同じ学校に通った。大学は同じ大学の医学部と短大だ。

奈波は地元では大きな病院の跡取り娘で、いわゆる『いいところのお嬢様』だ。本当なら小学校から私立に入るような『御家柄』だ。でも田舎町には私立の小学校はない。奈波は市立の小学校に入学し、私と同じクラスになった。

子供にとって家柄は関係ない。奈波にもお高くとまったところはなない。明るくて人懐っこくて皆に好かれていた。

奈波の家にもよく遊びに行った。奈波の家はとても大きかった。リビングが広く、リビングだけで私の家の部屋全部が入るほどだった。

奈波にはお母さんがいない。大病院の院長のお父さんいつも家になかった。その代わりにお手伝いさんがいて私達がやってくる everytime 紅茶と甘いお菓子を出してくれた。小学校の頃は広くて物が何もない殺風景なリビングでお菓子を食べていた。中学、高校に入ってから遊びと勉強の教

え合いだ。そして、徐々に遊びが少なくなっていくた。

奈波が遊ばず勉強するようになったタイミングを私ははつきり覚えてる。中一から中二になる春休み、奈波は突如『私は皆の病気を治すために医者になる』と宣言したのだ。そしてその日から奈波の家のリビングは遊び場から勉強会に変わったのだ。

奈波はお父さんと二人暮らしで、昼はお手伝いさんがいるだけだ。奈波はお兄さんと暮らしていない。ただ、よくお兄さんの話をしていた。体が弱いらしいけど、優しく、格好よくて、頭がよくて、憧れの存在だと言っていた。宣言の前々日に『明日、兄さまと会うの』と嬉しそうに言っていたので、宣言もお兄さんからの影響なんだろう。

私には兄弟がないので兄妹の感覚が判らない。でも奈波は明らかにブロンだった。それは小学生の頃からそうで、私たちはそのことをよくからかっていた。

奈波の家に行ってもお兄さんと会うことはない。だから、私はお兄さんとすでに会っていたとは思っていなかった。

短大と医学部は同じキャンパスにある。でも広いキャンパスなので滅多に会うことはないと思っていた。

「かな恵ちゃん。やつほー。私もこの講義受けさせて」だから幼稚園教諭のための講義に奈波がやってきたとき

には驚いた。医学部と短大では講義は異なる。短大の教室に医大生が来ることはない。でも奈波は「まだ何科の医者になるか決めてないから。小児科になるかもしれないじゃん。だってたら幼児教育も習っていた方がいいかなと思って」そう言っ  
て幽霊学生になりにきたのだ。そんなことを幼児教育科だけでなく心理学科でもやっていたらしい。

そこで知り合ったという逸見さんと奈波と私の三人で遅めの学食でお茶をしていたとき。なにかの話の流れで占いの話になった。占いの心理学的見地に興味があるという逸見さんに対し、奈波が『最近、兄さまが占いの勉強してるみたいだから話してみたら』と言ったのだ。

ブラコンの奈波のお兄さんを見てみたい。そんな思いで私も同行することにした。

「はじめまして」そう挨拶するつもりだった。でもその前に「柳川かな恵さんですね。こんにち。お久しぶりです」と言われてしまった。そして、いぶかしがる私に「小学校のころ、父と妹と三人で駅近くのイタリアンのお店で食事をしてるとき、お見かけしましたよね。あのときはご挨拶もできなかったので覚えておられないかもしれませぬね」と経緯を教えてくれた。

「あの後、奈波から柳川さんのお名前と一番のお友達という

ことを聞きました。とても可愛らしい女の子でしたので記憶に残っています。あの子がこんな美しい女性になって再びお会いすることができると、とても嬉しいです」

奈波は可愛い。中学でも高校でもトップクラスの可愛さだった。逸見さんは美人だ。私達より二歳年上ってこともあるのだろう。落ち着いた感じの知的美人だ。

それに比べて私は可愛くも美人でもない。可愛いって言うてくれるのはおじいちゃんとおばあちゃんだけだ。他の人から言われたことはない。だから可愛いだの美しいだの言われて、私は舞い上がってしまったのだろう。その日のそれ以降のことはよく覚えていない。

覚えてるのは帰りのバスの中で「お兄さんって彼女とかいるのかな」とつぶやき、奈波と逸見さんに大笑いされたことだ。

「彼女は分からないけど、奥さんはいらっしやいますね」

いつも表情を顔に出さない逸見さんの満面の笑顔をその時はじめて見たのだと思う。

「総人がみんなを幸せにしようとしているのは知ってますよね。これからは柳川さんも総人を幸せにしてください。それと同時に柳川さんも幸せを感じてください」



は一切そう思わないが、そう言ってくれて正直嬉しい。

いくつもの職に就いているが人々の評価では父は清貧となっている。園長職と道場主は名誉職としてほんの僅かな給料しかもらってないらしい。そして受け取った分はほぼほぼ僕と姉の養育費として母に渡していた。また宗教団体に関しては金銭の受け取りを一切拒否している。受け取るのは一食分の白米だけだ。だから現金収入は猟師としての収入だけだ。猟師の収入は多くない。町から出る害獣駆除の報奨金は猪一頭当たり五千円だったはずだ。父は罾猟師なので鉄砲代はかからない。それでも毎日猪が捕れる訳ではない。肉を隣町のジビエ料理店に卸しているがそれも大した額にはなっていない。

父は金を使わない。米や食材は信者の人が持ってきてくれる。趣味も少ない。バイクと韓流ドラマを楽しむぐらいだ。そのバイクも母が昔使っていたものを大事にメンテして使っている。

だから傍から見れば清貧に見えるのだ。でも父に資産がない訳ではない。

父と叔母には親戚が残してくれた学資信託がある。その額は一般的なもののより遥かに多いらしい。父と叔母が成人した今でもかなりの額が残っていて、それは僕や姉や兄の学費に

も回されている。

あくまで学資信託なので生活費は出ない。だが「学び」という点で、立ち上げ時には赤字経営だった幼稚園や剣道場の運用資金に使われていたりもしていた。

新興宗教は正式には宗教団体ではなく、父の占いの勉強の場ということになっている。訪ねてくる人は信者ではなく父の占いの勉強に協力してくれている人たちだ。学習のための費用は学資信託が利用できる。それが占いの勉強であってもそしてその金は場所を提供している明総資産管理株式会社に入る。明総資産管理は明総幼稚園、境別所剣道場の不動産と、父と叔母の学資信託を管理している。明総資産管理に父の名前はないが、学校法人明総幼稚園、境別所剣道場、明総資産管理を束ねている明総ホールディングスは父、五明総人が取締役を務める会社だ。

父の所得は決して多くない。父も高い収入を望んでいない。でも、もし父がそれを望めばたやすく実現できる環境はできている。

父は清貧だ。そして人の幸せを願う正義の人だ。

新興宗教を頼る人は何かしらのトラブルを抱えている。家族間トラブル。肉体的疾病。精神的疾病。

親や子供が新興宗教に入れ込んでいるとなると家族は奪

還しようとして弁護士を連れてやってくる。父は直接彼らと話し合う。大抵はすぐに納得してくれる。でも中には何回も来る人がある。ただ、初めは同席していた弁護士も三回目以降は姿を見せない。

相談のトラブルの中には反社会的勢力が絡むものがある。そういった相談を受けると父は単身反社会的勢力のもとを訪ねる。その結果、ヤクザものに乗り込まれることもある。そこでも父は直接彼らと会話する。ヤクザものは三回来ることはない。来るのは多くて二回だ。そしてその後、彼らは極端に父を恐れるようになる。もしくは父とは関係ないところで犯罪者として逮捕され処罰される。もしくは反社会的勢力間の抗争で命を失う。もしくは病に倒れ命を失う。

僕は医師を目指している。だから断言する。信心で肉体的疾病は治らない。

父の元にも病気の人が来る。その時、父は話をよく聞き、紹介状をしたため、叔母を訪ねるよう伝える。後は病院の範疇だ。

精神的な病も本来は専門の病院で行うべきだ。でも精神科への来院はまだまだ敷居が高い。父もそう思っているのだろう。そういう人たちに対してはカウンセリングよろしくよく話を聞き、話をし、心穏やかに過ごすすべを教えている。

父は人々の話をよく聞き、人々の幸せを考え、人々のため

に行動する。そしてその活動に金銭を求めない。

父の行動基準に経済は存在しない。自己犠牲も存在しない。基準はただ一つ。人々が幸せになるか否か。

そんな父が突然、僕と叔母と祖父が暮らす家にやってきた。何の用事がある訳でもなく、とりとめもない話をした。この頃の世の中の話や将来の話、それだけをして帰っていった。次の日の夜、僕は突如、父の訪問の意味を悟った。そして叔母の部屋を訪ねた。

叔母はパソコンでカルテを見ていた。

院長を務める祖父と事実上の副院長の叔母が暮らすこの家からは病院のシステムに入れるようネットワークが整備されている。そのネットワーク構築にも最新の医学の学習という名目で叔母の学資信託が使われている。

「お父さんはお別れの挨拶をしにきたのかな」

僕の問いには答えず、叔母はパソコンのディスプレイを指差した。

「勇太はこの症状をどう見る」

そこには脳のCT画像があった

本来は駄目なのだが、叔母は時々僕にカルテを見せ意見を求めている。それはおそらく叔母なりの英才教育なのだ。

「脳の所々が萎縮しています。アルツハイマーに見えます」

「クランケは当時十二歳」

「じゃあ急性脳症かな」

「これが三年後の写真」

祖母が僕からマウスとキーボードを取って、検索条件の日付を変更する。出てきた写真に僕は首を傾げた。

最初に表示された写真に委縮はなかった。マウスを受け取り頭頂部から下がって表示する。空間が開いていたところにも灰色が埋まっている。でもその灰色はおかしい。しわがない。そして、僕は目を見張った。

左右の側頭葉と後頭葉に正十二面体の物体がくつきりと写っていたのだ。

「これは何ですか」

「兄さまが何を考え、どう行動するか常人には判らないわ。こんな脳の人、常人が理解できる訳ないでしょ」

C T画像の左下には「ゴメイフサト」の文字があった。

父と会った翌日、父と母の再婚相手がなくなったと兄から連絡が入った。

そして父の失踪から十日後。朝鮮半島の軍事境界線で事件が起こった。

南側の軍服を着た二人が銃を乱射しながら北側に入ったのだ。そして北の建物が爆破され崩れ落ちた。

北は南を非難する。南は丸一日沈黙した。次の日、北は南の兵士二人を射殺したと報道。南は当該兵士は存在せず北側の自作自演と反論。射殺したとする兵士の遺体の返還を要求。北はそれを拒否。

銃を乱射しながら北側に走っていく兵の姿は、何度も繰り返しニュースで流れた。その後ろ姿は失踪した父と義父によく似ていた。

軍事境界線の事件から三日後と四日後。南のテレビ局が北側の局地地震を報じた。その報道では北軍事施設で爆発があったとしている。それに対して北は無反応だ。

今日で父がいなくなってから二十日が経つ。軍事境界線の事件からは十日だ。三日前に北の首都で爆発があった。大爆発で北はこれによる攻撃と報じた。そして休戦協定の破棄を宣言。軍事境界線を越えて南に侵攻。一昨日、南に向けて短距離ミサイルを発射。

日本は日米韓同盟に基づき援助を申し出るも南は軍事、民事を含め一切の援助を拒否。

米軍は一部の基地がミサイル攻撃されたとし、同盟とは関係なしに交戦状態にあると宣言した。

そして昨日、南の首都で大爆発が発生。爆心から直径五キロメートルは建物が一つも残らないほどの被害。二十キロメ



あとがき

初期のファイルスタンプを見ると二〇一六年の秋あたりから書き始めたらしい。いつものごとく途中一年以上放置して、(完)としたのが二〇二一年の夏。時間がかかったのは疫病対策により在宅勤務になった影響が大きいだろう。

昼休みに手帳を開き話の展開を書きつけることがなくなり、ゲームコントローラーを握るようになってしまったからだ。

この話はシリーズ化することなく、これで終了。

令和三年八月二日

太田巳波(ま)

2021年8月2日 初版

2025年4月27日 改定